學　　全

柳田文庫
文庫11
A1530

文庫11
A1530

中橋鶴峯著

語學新書

一名西洋仮字必讀

全

東都書林 文岳堂櫻

刻語學新書序

予寒鄉鄙人於文學毫無知解然人心之靈莫不有知敬謹敦厚吾知其可尚矣貪淫殘詐吾知其可戒矣乃知鶴峯先生之能導人於學當與從兄易信相共從之先受其語學矣蓋以其所聞曰琢玉者必治錐鑿學文者須明語法不解語法而脩辭猶無錐鑿而琢何能成器耶夫性靈所鍾秀氣成采

皇華言辭傳於天上聲韻清朗品格精密貴賤男女平生語言造次顚沛莫有所違海外使人至驚嘆以為奇事不亦宜乎然至其施諸漢字則自非併語法之與字格而能熟滑焉不能莫錯謬也於是古博士家之學建助辭法以無憲章孰不遵此後世儒者不事語法讀書作文不辨主客豈唯言見賢變色犬馬養人類哉良可嘆矣印度有八轉聲十羅聲遠西有

十品四格與我語法雖精粗不同其義不相戾鉛槧之士不可不知也我先王求美于野百家之學莫有不備矣而如夫八轉聲原是訓語之法漢譯唯傳其義而失其音至十羅聲則音軌俱亡傳而我所求唯在漢譯是千古人之所以不能悟其法也物子解書殊多牽強矣而如論其文法以形狀作用聲辭物名四者為準稍可庶幾於語法也至法住師著攝八轉

義是亦固有所未盡而論梵則者含此書將取何書乎同時本居富士谷二公起而專論歌文助辭繼志築藤林諸氏出而盛譯遠西語書文運既動語法將振焉唯恨其親彼者疎此親此者疎彼而未嘗聞有合彼此而大成者矣鶴峯先生學極宇內識洞古今折中諸家而著語學新書劈肌分理沿波討源證據的實昭然可鑑豈非合彼此而衣被學人者哉予於文學毫無知解亦知斯書之宜傳不朽因與同門諸君相議遂請以刻諸梓敢題此語爾

天保四年癸巳仲春

參河　島田易清謹識

臼杵藩河村脩縣　書

早稲田大學圖書

捨得也事にとどまらず秋深くは。天地のかくれなき
深過ぎ申さ諸れ。夜も昼も張あつき空すべし
およそ文つけ。それより。米を。植ゑる業に。
魚は味平にて。此所に生まれ。氏物に記し
および立る人。まもる深きは惜む深く。偏なる
まん郎。天竺。震旦。阿蘭陀の
志かく云ふ。時候をしるし。それぞれの

柳田泉文庫

老遊はなはだしかるべけれバ。人をも自ら驚かすべき
これハ又生たち。おしいづる事ハ小さき
食ふまでやう断れども。いざか程度ある
読びとには思ひし拙き事あり。儒佛乃学
第ハ者論。此葉館の学のあれ者無。それに
契る我初ひ人実施るいさゝか古ためた。
多く編ずるかるかうども。一升ほどもさり

たんきんなすばかり。法を人に誑す事
なれバよからず。いづれ結局なるかたぎを
我よく学びやすきは儒佛神道乃
本国ハあり。神道のこゝろなりや。何
ぞか何事。遂に捨てしまはんとなし。文和ぎてまさにあ
とゞまらひ。あはれ汉の恥とも求めたまへ
やされバ。儒学者とは古持まつりハ。儒佛。佛

学。蘭学。神学。詩学。俳諧学。狂歌学。
などいふ学まなびのすぢ、さまざまなる中に
新(アタラシキ)を志すは、まづ古きを知るにありけり。そのうち
此学者などと見えて、学びをさし知らるゝ倭学の
大(オホキナル)道(ミチ)也。中橋鶴峯翁は。儒学に。韻学に。
漢学に。神代学に。和歌を業として。博識
秘事をさぐれる人也。倭(ヤマト)漢(カラノ)語(コトバ)用(ツカヒ)の深き学び

を極め。殊に雅言。俗語学。新古を比較
して。年来の語法をしらべ。それが中にも殊にすぐれたる
し。学びの道をしるべにして。かの道をも記
させ給ふ。かしこき事なれ。漢文学者らは
新人等は。これを学ぶにもそのかみの人々も此学
は深く探りて考へたるを読むべし
くにあそびぬ。余新書をよむ事。此一例は語雅

こゆるまで經。ものに此編が學の事をもがな。ど。な
あらんは。まて試てはど。ひとり用ゆべく侍る。天保
四年上元日。松屋主人平小山田與清序。

語學教書の志ある人々にまなぶ[illegible]
おのれ志を起人々よりて[illegible]
けるも母[illegible]の[illegible]理[illegible]
の[illegible]家の[illegible]
[illegible]月を[illegible]
おりて[illegible]の道の[illegible]
[illegible]大人[illegible]
[illegible]
[illegible]山[illegible]

こゝろえのいまかたこなたにふみのかよひみちら
代て百年にわたり郡よりえんとやしそのすゑ大人
にいとまなくはていでしとこのうへすゑ蛙
きりんのみちの法をしかうちにかなり
諸越の書あれと山かつの藝学はまたち
出て東に伝てにたらしもの ことし天保の
四季とよし蕉翁の古事よくしらるめでたう
みちときことをおほせつかうまつれ今はこゝろ
あまた世の人ひとしくおのれとめでてやよ我樹

其角嵐雪はしめ家々の門人あまたありしかとも
しかはあれと其のみちふかくあなかちにあらす
あまねくいはゆるまことにかしこく大江戸に於て
天の下のかしこきよみものつとひすへけるその
いにしへ其角嵐雪門人はるかにめでたきかな
あまた蕉翁の門人よしあしの世にとひもすれは
まことにいにしへのこゝろとのりまつるこゝの
君わかかたちきよらかに藤井の家しよかな
其角嵐雪へし鶴峰のせんき今大江戸の

大城のぬしいとはやうに古典の道に志ある翁
すみやかきこえてすでにゆきすぎにしころよりおほよ
なくやしつるに物学びのみちをめでたきにさへおほく
外国の人をもやまとの書を出し、こゝろざし
給へるをよみのみ文作るとよみて唯あしのれ
らぬ学の志ある雲ま書ありて字探ちよ摘
みやたのもんとあつまりかはりぬるものあれ
乏しめ我なるものをもかきくへ家を先生と
見えるへてころていふも識志なりなりときゆる

し給へるは葦牟いへば無なる人のつとめにとく
やされ我らを板にゑりさせて本書となりぬいへ給はん
とぬ我の国丸亀の藩に仕へまつる橘山地の茂樹

おほけなきもの花乃あたりにしもあらぬ筆
を染てうき世乃おもしろきハみやこのむろ咲かむろみの花ことのはぐさかたま
ひきおもしろきふかみうたあのことばのみちばかり。くちびるあやしくめ
でたきハ何ならずいつはりのみ世の中るおもひ絶つ代々のむかしへわれ
きみのたのみことをあきの声にうきうきすることばをたのめをしお
のみちあらわれば。さうらふもそのおもかげてうる世のひかりをさそひてむ世の
あうにあるひとのかきみじかきなかにいひてうらみのよりて世をへば
と心ざしの言のたへにも。いきつもれども。れいざねと心ざしあまつみ
いまぞかりきはその言の葉につぎそるこみすむ。はやあまやかに あじきあ
心ひとぐさにつもへあまひける。此種その心ざしおぼろにハ。こゝにこのをれ哉

歌のみちありといへるは、よはなるわざしこゝろにおほみうたのいよ
しへ常りは、難波津のむかしこちかきくへすがらして、のづからをかく
たゞしかりしをうたにまをさてことにばのたへにして、いさゝかむしたにかく
うまたがへるふしのあ糸ざりき達ばおとにそをまうすぶきゝちとて、は筆にて
ざりつる紙筆にはれおしのそらぶちかてゆまていおとだまれ八十のちま
るの志あさだめまさし嫁きにあらざれどゆめづま秋たゞくしらずてまゝ
集るされバいまれ世にしていそれもぢのさかしぶき紙らくよみてその
いますへ嫁り紙うがへ志るぞやがていまれ世のいすしへぶりよ参ある
倭ようくてむ糸ばのみちれをのおあびにこそてふをはのさだすかあ浦
がごとく、何それ志てのらめぐみ君おのなくそのもぢれ、ちあひさる、は楼

の名にふさに嫁りよまめてくまぐふ常うさしめ、そのゆらいこそ家が常
さもくられいの糸のみたまにまめてそうしりまよれるあらばのさだま理に
しあ先德バうしよみふこつる堂めかる寺か那らば哥那死志るべきみち
ある紙う色が書に浦ふちる此のこの名をばま志てでまぐ於らんは、いと
くちをし紀和ざみくぞや、志うはあ幾ざあるはそれ名のよつゝはめてその
うちはちるが、にお浦しくまかり居る。けるはそれ流くへ幸あ悲ざ此
ことぞたはそ那のかげ英うつしえがく見すずまれおうりれるをれの徳志が
の嫁なつ笠しれおもひをこがしめるにこ志ゆよの出て帰めまもるまで
いかりまつ経ぬあ孫まをあきうれぬまのそあふつきは川ぐかうく
えたる常しまいできにきる紙家紀の花ま葉う紀あつ色に色たる香いまよ

まいつとせむと世にしれらくやあまたなむ。そがなかにおとぞかゞみと
いへるハ。たびといぬづかのよきを好むられしもちらも。でなそのうこ本
つくりしめよ。いまこの書こハ。をはてびとらしそのなるさだ。そのいへなる
みよ女びを好さ。いとうれさるまさにあらくて。志らしくれの書が さとせ
るまじ紙。そぎがうへ乃数ゆたかハ。ぞうつしとらせたるふるんあまらるゝさ
てまうりやりふうつしゆかたる術を述バ。いまよ里撰くさ記ら紀葉のれを
ぢゆきうふかめがくの。その志をまとも子やめぬでくりめそえたるあをや
ぎの。いとおむがしくれめりすもおま志うしまがらおとだまれさちさし
たそくる志まにら挙こて。ふ子英の名紙おとぞ美好盛れあたらしぶらく
おほせて。そのすしいさゝかさつくるハてむろがの筆とらせどいふやうし

れ志を波の音ちぞうか。をえりれたびやどりふまむ。

越るみ〔〕れ志ぞの媼

語學新書序説　　中橋鶴峯撰

此書を助詞の品定と名づけて九巻に九ッ格に九巻附録に二巻をすべて二十巻とせし。然さてハ手業のその勝写もたやすからねバ同盟あひはかりてつひに師にこひて本書の志ざしを節して二巻とすつゞるを名をもあらためて語学新書とハせられたるなり。

○師いはく天地の間一切の物あるごとに二具の創業あらざる所なし。中にも言語のうへ正具ならぬある。神世の古訓もおきによりて傳ハり聖人の名教もおきによりて流れたり。天下古来語法をいふもの已が皇国に帝爾乎波あり。漢に韻法熟字法あり。梵に八轉声十羅声あり。蘭に十品四格あり。これこれ前聖の窮理にして言語文字の品格をさだとのみちなり。戊申語名を正して諸家を折中し論定して九品九格とほ世間に量りなき貴賤男女ありながらすくなきの則に順がひ平生の語云よく呼びよく應じ差ふ所あることなし。あまく其格を失ふものハたゞ初学脩辞の為にあるのみ。たゞし平云ハ天工におづ。故に差錯なし。脩辞の如きハ人為におづ。故に謬乱あるべし。いま戊申学者をして謬乱の弊ありしあめんとためふがゆゑに語法を講じそき諸子百家の書ひとつゞりして語云にあらざるそれなし。志うるに語云に捨てこの格式あると紀ハ書を讀まん人辞を脩めん人おざらこれをまなバざらん。

○師いはく天下の語かぎこれ同じからざれども言語の別ハ二等にハるぎりなし。そハ一つにハ訓語二つにハ韻語なり。すべて五大洲

のなかに韻語なるハ漢と字音とのみにてこのほかハ皇国より印度諸国にいたるまでみな訓語なりくその別ハ二等にわかれたりといへどもその語法に於てハともに一種にして其法ただ一つにして二つあることなし然るに漢籍を読むにいたりてハ従頭直下あるハ順逆廻環なるにつきて世人ハいたく異様なるやうにおもひなしたれどそハかさみにかなふとまでこころに漢人に訓語の書をよまざれバうなかひて廻環の読までこそ其意をハわきまふにあたれ譬へバ明人の此方の歌詞を註するがめきき読法ハ阿氣那塔那華里復那一屋那めして切意ハ秋田収稲結舎着守なるがめしきしおこ廻環の読に嫌あらバそべうらく熟字を推し漢呉二音便に従がひ直読すべしさまど語法をよめどもそハその熟字をおほしなゆきとらざるべしそもく語法ハ玄語文字の名称をしるさ名をしるをハ仲尼のことなしこともしり過く世の学者たちの講出作文なとまおし謬妄のあることハ他なし此学をさとらざるが故に譬へバ論語の学而時習之れごとき学而二字あひ連なりて学字ハ忽去活用玄而字ハ速及接続玄とあり時習之三字あひ連なりて時字ハ時令形容玄習字ハ現在活用玄之字ハ再説代名玄とあるがめしそし是等の字各々連なりて各々分離せバなへ人の課件にて箕踞したらんがめくその士たる農たる何をもてかわかつ尚ほまことに連続したりともきし語法を知らずバ時習の時も使民以時の時もひとつにおもひまがへてんされバ衣冠ハ人

のかの分別をする所熟字ハ語法を分別をする所なり物氏文章を論ずるに虚実死活の四つを準とあるハかつぐ語法にそのつきたるなれどもいまだ九品九格におよバざりしゆゑ時習の時字をもときひがめたり学者これをしれかし

○師いそく悉談章に二種の釈あり一つにハ深秘二つにハ浅略てさてひが説くところハ浅略の釈にして深秘にハあづからず悉談字母四十七字ハ梵天の所製之梵天をすこし大自在天と称す梵人の傳説に此に三類あり其六天の主を伊舎那と称すといへり伊舎那ハ暗に二天の尊称に渉れり梵文をかすこし二天諸神の所教に係れりとあるべし義浄が南海寄帰傳に拠るに大自在天の所説の悉談六歳の童子六月に学びおハる次に蘇呾囉まさし駄覩章羅等の章あり蘇呾囉ハ声明の根本北天竺乃健駄羅国なる波你尼仙が造れるなり駄覩ハめそら字元を明せり章羅ハ荒梗の義田夫のひらきばえるがめし分ちて三章とす一つにハ頞瑟吒七例十羅二九韻などを明せり二つにハ文茶合成字を明せり三つにハ鄔拏地天に前例に同じ広略を異とするのみこれを三荒章といふ上古書を作りて蘇呾囉を釈せし其類いと多しそが中にも中天那爛陀寺の学士闍耶昳底が説最妙なりとぞそれ後学士鉢顛社攞伐撥哥利等が輩あひつぎてまたく其義を詳かにしあまねくられ諸書国中に通じ学ぶといへりそれ人生まれて八歳にして小学に入り十有五歳にして大学に入るハ漢家のさだまりにて悉談ちまき西洋の

語法なども、ミな少年の学術なり。しかるに、いまわが玄昊のはきちかふ皇國人として、白髪にいたるまで讀書に通ぜしにても、てにをはのやうのへうちづかひのさだをもわきまへざるものもあるハいかなぞや。さまきミな少時語法を學バざるがゆゑのつミ也。しかるに外国学術のかたむきにまなびつてハも、そのまなびのはじめにハ、かならずしかつ語法をさとし、通ぜしむることをおもふべし。古代博士家の学風もしからざりけりのをや。

○師いはく、西洋の文字ハ天竺より出たりといふハ、亞辣比亞人の説なりと聞けり。されバかれ空別泄二十六字ハ、右行伽書二十五字の流にして、十品四格の如きも、八轉十羅に原ざすなれバなるべし。

○師いはく、帝尓乎波ハ、元来古博士家の助語点本よりおこりて、その法精微なりて、語法をいふもの正を取るにいたれり。戊申すなはちこれにもとづいて語法を講ずることをえたり。きさし体用二言になく助辭あり。てにをはといふの助辭に能所の別あり。能所ハなほ君臣のごとし。さて用言の助辭ハかならず能格を結ぶこと、なほ民の君王に仕奉るがごとし。帝尓乎波の名ハ君臣民の三つを總括するよし。其法ハ既に詞鏡にあらはせるがゆゑに、かの鈴屋翁の紐鏡の如きハ、帝尓乎波法第一の書なれども、ただ君と民とあることをしりて、いまだ臣あることをしらざりけり。能主格君位の辭これ第一等に波毛と徒とを置き、第二等に叙乃也何を置き、第三等に許曽を置きさて別に変格を設きたまへり。

今戊申がおぎつらへるにハ、第一波毛、第二ハ叙乃也可、第三許曽と定めて、徒と何とを刪去て変格をたてしことまでそのおもむきハ一つなれども、そのおぎつらひハおのづからことなるを知るべし。また北邊翁の脚結抄にハ、五属十九家六倫十二身八隊など、わかちて言辞の品格をおぎつらへるなどもあれど、これまたいまだ九品九格のくはしきにハよばざるなしとぞ。師説かくのごとし。いまハそのむねとあるをとりて、此書の巻首にそのするのみ。

凡例

凡テ語学トハ言語文字ノ品格ヲ学ビ知ルヲイフナリ。然ルニ文字ハ言語ニ従フモノナレバ、先語法ヲ弁ヘ知ルヲ要トスルナリ。言語ニ品格アルハ、譬ヘバ猶人倫ニ王公将相卿大夫士庶人ノ品別アルガ如シ。鎗ヲツカセタルヲ士ト知リ、鋤ヲモチタルヲ農ト知ルハ、人品ヲ定ムルモノナリ。言語文字ヲバ、熟語熟字ニヨリテ、其品ヲ定ムベシ。文学ニコヽロザス人此法ヲ知ラザルトキハ、必ズ其讀書作文詠歌ナドノ間ニ於テイミジキヒガコトイデキタルモノナリ。スベテ助辞法假字格ヲアヤマル類モ此法ヲ学バザルガ故ノ弊ナリ。鉛槧ノ士トシテ知ラズハアルベカラズ。

○凡テ言語ノ品格九品九格ニ分ル。人倫ノ品格モ能ク推ストキハ、必ズ九品九格ナルベシトナン。九ハ數ノ極ミナレバナリ。

○凡テ九品トハ、第一実体言、才二虚体言、才三代名言、才四連体言、才五活用言、才六形容言、才七接續言、才八指示言、才九感動言ナリ。九格トハ、才一能主格、才二所生格、才三所與格、才四所役格、才五所奪格、才六呼名格、才七現在格、才八過去格、才九未来格ナリ。

○才一実体言トハ、國都山川霜雪人畜ナドノ如ク実物アル体言ヲ云ナリ。其中ニ白サ長サナドイフ辞ハ其分量ヲイフ体言ニテ、是スナハチ実体言ノ類ナリ。又コレニ統称各称ノ二等アリ。譬ヘバ山人ノ類ハ統称、富士山人まろノ類ハ各称ナルガ如シ。

〇オ二虚体言トハ。深き浅き長き短き白き黒き多き寡きマタ有る無きナドノ如ク。実物ナキ体言ヲイフ。其中ニ譬ヘバ白き雪トイヘバ副上トナリ。雪白きトイヘバ副下トナリ。又助辞ナドヲツケテイフトキハ比較トイヒテ。クラベ辞ニナルナリ。其比較ノ中ニモ又三ツノ差別アリテ。白きハ雪なり白きぞ雪なる白きこそ雪なれ。又雪ハ白き雪ぞ白き雪こそ白けれナドヤウニイヘバ称階トナル。ホムル意アルクラべ辞ナリ。又雪よりも白きナドヤウニイヘバ比階トナル。此ト彼トクラベイフ辞ナリ。又いと白きいとゞ白き最も白き極て白きナドヤウニイヘバ最階トナルナリ。

〇オ三代名言トハ。自ラヲサシテ吾トイヒ。他ヲサシテ汝トイヒ。又彼トイフ類。或ハ汝が妻我がの此雪其白きこれそれなにたれいくらなナドノ類ミナ事物ニ代ヘテイフ辞ニシテ。スベテ六等ニワカレタリ。

〇オ四連体言トハ。降る雪照る月行く人鳴く虫ナドノ如ク。用言ヨリ体言ニ續ク辞ナリ。コレニ現在過去未来ノ三等アリ。

〇オ五活用言トハ。行くゆきゆけゆかん鳴くなきなけなかんナド、活ク辞ナリ。此中ニ譬ヘバ令虫ヲ鳴ノ意ニ虫をなかしむトイヘバ動他トナリ。虫が人になかさらるトイヘバ被動トナリ。虫がなくトイヘバ自動トナルナリ。此三等ニマタ各。現在過去未来アルコトナリ。又活用言ニ九法トイフコトアリ。スベテ用言ノ活ラクニ九法アリテ。萬事萬物ノ活用ミナコレニ従フコトナリ。譬ヘバ行くゆきばゆくとゞゆく蚕しゆけゆかんゆくらんゆくなりゆかで又ハ降るふればふれどもふるべしふきふらんふるらんふかりふりふらゞナドノ如シ。とゞどゞトハ。既然未然ノ差別アレド。九法ニテハ一法ニ属スルナリ。

〇オ六形容言トハ。雪が白くふる虫が悲しく鳴くナドイフトキノ白く悲しくノ如ク。スベテ用言ノ活ラクサマヲアラカジメ形容スル辞ナリ。シク〳〵泣くキヤラ〳〵笑ふナドイフ辞コレニ同ジ。此ニ十八等アリ。

〇オ七接續言トハ。譬ヘバ汝が顔色ハ甚ダ白きト切レタル語ヲ直ニ下文ニ接ケテ然れども雪にくらぶれバいさゝか紅なりナドイフトキノ然れどもノ類是ナリ。コレニスベテ十二等アリ。

〇オ八指示言トハ。雪の中雪の上ナドイフガ如ク。上下内外遠近前後ナドヲ指シシメス辞ナリ。

〇オ九感動言トハ。あなうしくノあな悲しくあノ悲ノ如ク。スベテ喜怒哀樂ニツケテ心意ニ感動シテ發スル声ナリ。俗語ニテイヘバ。アヽアラヤアヤレオヤエ、ウ、又ハシイシツ或ハ笑フ声泣ク声ノ類。スベテ十七等アリ。

〇オ一能主格トハ。カヽリニナル助辞はもぞのやかこそナドノ定格ナリ。コレニ各其結辞アリ。コノ結辞ヲモテヒガメナドスルヲ。助辞ヲ誤マルトハイフナリ。能主ハ猶君ノゴトク。結辞ハ猶民ノコトシ。

〇オ二所生格トハ。体言ト体言トノ間ニアルのがナド云助辞ノ格ナリ。

〇オ三所與格トハ。にとへナド云助辞ノ格ナリ。

○第四所役格トハをト云助辞ノ格ナリ。
○第五所奪格トハよりゝりゆゑナド云助辞ノ格ナリ。所格ハ猶臣ノ如シ。
○第六呼召格トハよややよいでナド云助辞ノ格ナリ。是ハ客位ノ助辞ナリ。以上六ツハ体言ノ助辞格ナリ。
○第七現在格トハめりらんべきらしナド、現在用言ヲ受ル助辞格之
○第八過去格トハてたりたんつちつゝきるばぬぢらゐん等ニテ全過用言ヲ受ケ、ばどどもナドニテ未過用言ヲ受ル助辞格ナリ。
○第九未来格トハぞでじぬんまゝばあんナドニテ未来用言ヲ受ル助辞格ナリ。以上三ツハ用言ノ助辞ナリ。
○凡テ本書ヲ読ム心得。タヾヽ解シ難キトコロアリトセソレハソレニシテ。先一過読ミ畢ルコトヲ要トスベシ。一過読ミ畢ルトキハ。オノヅカラ其義ニ通ズルモノナリ。譬ヘバ実体言ノ條統称実体言ノウチニ。一名統称日類二名統称書類多名統称光類トアルガ如キ。日ト云モ書ト云モ光ト云モ。コレミナ実体言ニシテ。其実体言ノ中ニテモ統称ニ属セル辞ナリト知ラバ。一名二名多名等ノ義ハ捨置テ読ムベキナリ。一名二名ナドイフハ。猶一字名二字名ト云ホドノコトナリ。サテ日書光等ニ准ラヘテ。スベテ実物アル体言山川草木萬物ノ名辞ハ。ミナ統称実体言ナルコトヲ知ルベシ。本書モト凡例ナシ。今童学ノタメニコレヲ書キ加フルモノゾ。

九亀藩　橋山延茂謹

目録

上巻九品
實體言第一 分為二等
虚體言第二 分為三等
代名言第三 分為六等
連體言第四 分為三等
活用言第五 分為三等又有九法
形容言第六 分為十八等
接續言第七 分為十二等
指示言第八 分為四等
感動言第九 分為十七等
下巻九格
能主格第一 併結辭分為三等
所生格第二
所與格第三
所役格第四

所奪格第五　　呼召格第六

以上體言助辭六格

現在格第七　　過去格第八　分爲二等

未来格第九

以上用言助辭三格

語學新書上巻

中橋鶴峯　著

○實體言第一　實体言ハすべて一切の物の名辞にして漢にいはゆる實字なり。これに統称各称の二等あり。

統称實体言　是ハ万物の總称にして此中にまたさま〴〵の差別あり。

一名統称　日類　記上。あをやまにひがかくらバ。ぬばたまのよハいでなむ。

二名統称　晝類　記中。うねびやまひるハくもとゐ。ゆふされバかぜふかむとぞこのはさやげる。

多名統称　光類　古春。ひさかたの日のひかりにあたるわれなれど。かしらのゆきとなるぞわびしき。

一義統称　月類　古秋。つき見れバちぢにものこそかなしけれ。わが身ひとつの秋にハあらねど。

二義統称　月夜類　古秋。つき夜にハこぬ人まるるかきくもり。あめもふらなむわびつつもねむ。

多義統称　月人男子類　万十。天海月船うきうかべてこぐみゆ。月人壮

第一統称　獣類(ケモノ)　古言くを見わかせる[けだもの]く。くまにおほえるん紐ちて。式祝詞山に住ものハ[毛能和物][毛能荒物]

第二統称　駒類(コマ)　駒ハ古言にてといふ語にてもゆかぬ事あひてゆく[古名これあり]をれまへ乃さまそし。こハ獣の中にての統称也。

第三統称　黒駒類(クロコマ)　雄略紀ぬばたまのかひの[矩盧古磨]くらきせバいのち志なまし。かひのくろこまハ駒の中にての統称なり。[布]

[都麻][阿迦胡麻][青駒][あしげ]なども同じ。これにますます名をつけてゆくつぎぞるすみあぜいへど。各称にするなり。

転用統称　恨類(ウラミ)　古序そハあそか川の淵にある[うらみ]まきらうぞ。こハおよそ活用言よりうつり来るうぞ也。

歎類(ジダサフ)　古言我恋ハ山がくれの草なる也。[しぎさ]なのまき事ども志る人の事き。こハ虚体言より滑り来る詞也。

浅類(アサキ)　添葵[あさき]みや人ハありうる我りこハ。身まそおづよでふうきこひぢをこハ形容言より転てきたる詞也。

小称統称　小萩類(コハギ)　古言さやぎ野の本あら[こそ]露をおもみ風をまつごと君をまちまて。小ハおわむらきこ。[小萱][小栄]等も同じ。

三声統称　上声類(アガルコヱ)　[樋]といふ声これめし。　去声類(サガルコヱ)　[火]といふ声のめし。

平声類(タヒラコヱ)　[日]といふ声これめし。この三声のことを印度までも西洋にても。男声女声中声といふ也。仙覚が万葉抄に天をあま

と呼ぶハ男声。おめとよぶハ女声といふ説見えてたり。こハ悉談家の説によれるものときこゆ。漢にハこの三声に入声を加へて四声といふなり。清の毛奇齢が韻学指要に。至魏時李登始取其声之同者。而分聚之。名曰声類。然而猶無四声也。及齊中書郎周顒著四声切韻。而梁沈約儌之。因之有四声類譜之作。夫然後就一類之中。而又分四等といへる是なり。その三声を四声とせしたるゆゑハ。漢人の声ハ長と短と二つにして。其長短に各三つの差別あるを長声の方のみを三つにわかちて。短声をハ一つに渾じて。入声とせるなりていひもてゆけバ。実ハ三声なるなり。さて是ハ万国の声にも。此三つの差別あることを。さとしおきて。万国の三声皇国に同じといふよハわろしばなおもひまがへそ。

一言統称　女類(メノ)　記上。吾ハめよ[め]にしあれバ。汝をきて夫ハなし。汝をきてつまハなし。

二言統称　少女類(ヲトメノ)　記中。[袁登賣]によめあハむと。わがさけるとめ。又[ひめ]　[くはしめ][さかしめ]などもこのめぐひとぞ通し。

多言統称　少女等類(ヲトメラノ)　万一。なごれうらにふなのりすらん[をとめら]がたまものすそに志ほみつらんか。土左日記[うぢとうら]の類同じ。又記中。あくゆく[袁登賣杼母]　續紀廿。頃者[王等][臣等]乃中爾無礼逆在流[人止母]在而。万廿。若草之都麻[母][古騰]母毛とあり。

又そのらいくらなどもこの多云統称のたぐひなれば多し
漢語学徒先輩兒曹の類もなぞらへつべし。

配合統称

日月(ヒツキ)類　延喜竟宴日ほのめく星のやどりハうへハふとも。かなし
ことれやうなどども春の日秋の月などやうなる中間の
ことじなどをそへていへるも辞ハ虚体云の格にて配合統称にあ
らず漢語にても日月山川酒食農工商賈などハ配合統称にして
北辰遠方饒羊木鐸聖人賢人などハ虚体云の格ことなるべし。

各称実体云(マチテイノヰコトバ)　是ハ国郡山川神人等の名ハもとより更にて宮殿楼閣器財禽獣等
までもすべて統称の中にて又ことにとりわけてよぶ名云是之。

国都各称

吾妻(アヅマ)類　古羇旅詞あづまのうちへとよせるひとをかりなさば
いざおひていきなる三河国八橋とつふかきつばたまへるよしまれなる
身寿国の類　論語齊衛魯儀　史記西南夷傳或聞卭西可二千里有
奈良(ナラ)京類　古雑ちりをゆまぎらずうちにおちれ京にやどれり
るときよりならのみやこはかうにまねるなり
周紀而周復都豊鎬　貨殖傳然邯鄲亦漳河之間一都會也。

山川各称

四極山(シハツヤマ)類　古大歌しはつ山うち出て見れハかさゆひの島こぎかくる
たななしをぶね。　封禅出禅太山下趾東北粛然山

隅田川(スミダガハ)類　古羇旅詞むさしのくにとしもつふさのくにとのなかにある
すみだがはのわたりにいりて
河渠書天子乃使汲仁郭昌発卒数万人塞瓠子決

神廟各称

賀茂社(カモヤシロ)類　古　ちハやぶるかものやしろの姫こまつ萬代ふともいろハかはらじ。　封禅書高祖初起禱豊枌楡社

寺観各称

西大寺(サイダイジ)類　古春　西大寺のほとりのやなぎをよめる。

神仙各称

進男命(スサノヲノミコト)類　古序ひさかたのあめにしてハ下照姫にはじまりあら
かねの地にしてハすさのをの命よりぞおこりける。
封禅書十一月辛巳朔旦冬至昧爽天子始郊拝太一　漢の太一とい
ふハ吾天之御中主神にあたりてすなハち各称なり。

人物各称

人麻呂(ヒトマロ)類　古序　ひとまろハあかひとがかみにたゝむことかたく赤
人ハ人まろがしもにたゝむことかたくなむありける。
高祖紀呂公曰臣好相人相人多矣無如季相高祖姓ハ劉名ハ季な
り。

器財各称

万葉集(マンエフシフ)類　古雑詞貞観御時まんえうしふハいつばかり作れるぞと
いはせ給ひければよみてたてまつりける。　孔子家春秋
草薙剣(クサナギノツルギ)類　神代紀一書曰本名天叢雲剱云云至日本武皇子改名曰草
薙剣矣。　蘇秦傳棠谿墨陽合膊鄧師宛馮龍淵太阿

枯野類 記下。「からぬ」を志ほにやき。志があまりをことにつくり。かきひくやうに おほ舩の各称ハあまたあり。

禽獣各称

命婦おもと類 枕草子異本。うへにさぶらふ御ねこハかうぶりて「命婦のおもと」とて いとをかしければ

項羽紀 駿馬名「騅」常騎之。この類おほかるべし。又「金太郎」とし源みらぶあどやうに各称に似たる統称あり。とも混ずべからず。

小称各称

小黒崎類 古今歌「をぐろさき」みつのこ嶋の人ならば都のつとにいざといはましを。「をそつせ」「みを喰」なども同じ。

三声各称

上声類「神」 記上。次成神字比地迩上 去声類 記上。次妹須比智迩去神。

平声類 記に平声を註せざるハ平声ハ常の声なればなるべし。

複称各称

忠岑等類 古今序「ただみねら」「つらゆきら」「等」騶衍淳于髡接子慎到環淵之徒 史何等 驃騎等 緜王居股

配合各称

大汝少彦名類 万三。「堯舜」「舜禹」論語。

○虚体言第二 虚体言ハ実体言に附属して。其深浅軽重などの形容をなす辞にて。漢の虚字之。此に副上。副下。比較の三等あり。

副上虚体言 こハまへに或ハぬえる等の韻をふまえて体言の上に附属する辞之漢語にても体言の上に冠らせる有無多寡難易等ハ此格之。

幾韻副上

深心類 古今恋 [illegible]きこえぬたく山乃「ふかき心」を人ハ志らなむ。 泰伯 如臨「深淵」如履「薄氷」 貨殖傳 揄長袂躡利屣

準幾副上

深淵類 和名土佐国香美郡深淵「布加不知」とよめるハふかきふちの義なり。

倍幾副上

可見君類 古離別 朝まだきにみべき君とし頼まずバ思ひ立ぬる草枕なり。 周勃傳 買工官尚方甲楯五百。被可以葬者

奈幾副上

無水空類 古雲 さらに涙ぞなぐさめらる。 酷吏傳 無勢者貴戚必侵辱。

志幾副上

新年類 古大歌「あらたしき年」のはじめにかくしこそ千年をかねて楽しきをつめ。八佾 美目盼兮。

志幾略幾

空煙類 古誹諧 ぬしなき袖のおもひのこりてなほもえバぬえ絶ゆる「むなしきけぶり」を。

慈幾副上

不可寄川類 書紀「よるまじき川」のくまぐま 源氏「さゆまじきすぢ」とかのこりつかおもひのほかにかくぞあなる。

又伺花けせ又ハすさまじき梅見ちらぐさらんとぞかましきこハ波のうつりをすぢと結べるまで副上れ格にあらず。

不奴副上　不老秋類　右秋ならずから折てかざゝむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるべく。

邪留副上　不咲花類　右来たる人のいりのむらぬ里ハあらじさくる花の見ゆらむ。　始皇紀。度不滅者久之。

奈留副上　常磐松類　右春ときこそみる松のみどりも春くれバ今ひとしほのいろまさりけり。　上林賦。捷垂條踔稀間。

すべて副上虚体云ハきべきなきなき不ぬざるなる等ハ其二能格その也かれ結びとなる辞之。但結びとなる時ハかならず体云をそなへてきるゝ格之。ゑとひ下に体云ありても。それにいそいでつぎてきるゝ事なり。ゑとへバ古今集上。山たかミ人もすさめぬさくら花とある副上虚体云ぬしやの結びとなる時ハ同春下。あとなしバさくらばやハちらぬさくらぞなどとなりてきるゝがごとしかく結びとなりてきるゝを比較虚体云といふ。此切るゝと切まざるとの別ハ先達の説にも見えされども云語の品格によらざる論ゆゑとりぞめずくてもしからざるなり。

轉用副上　殿造類　右序。此殿ハうべもとみけりさき草のみつばよつばに殿づくりせり。殿ハりや体云なれども。かくいへバ虚体となる。

生格副上　後之形見類　右来。宮のちまでむ好のかたみに所生格れ例をつぎてかくりふハ虚体之。　梁孝王錄。欲以孝王爲後嗣。

員數副上　一盛類　右物名それのといふぞ一さかりこきまぜどもかへきぞ春ハそ見える。　孫呉傳。萬騎俱發。

副下虚体云　是ハ是或ハなけれ韻をふみて体云の下に附属する辞にて。かく称て活用云を形容する格之。形容云の條と見合すべし。

志韻副下　川風寒類　右羈旅。都いでゝ今日みかの原いづみ川川風寒し衣かせ山。　倉公傳。有間而身寒。　河渠書。邑牧多。

奈利副下　風速也類　右恋。行かへり空にのみしてふることハわがなる山の風はやみなり。　琵琶行。門前冷落鞍馬稀。

すべて副下虚体云のしまし等ハ其一能格もの結びとなる辞之。但結びとなる時ハ必ずもし此て道かなくなからの格もつくるなりなどやうにおほくいはれをそさみて副下虚体云の格をそなふることなり。

員數副下　心一類　右恋。いせの海につりする海人のうけなれや心ひとつをさだめかねつる。　項羽紀。如是者三。

比較虚体云　こハ体云の助辞を或ハ履之或ハ戴きすることいひといふるる辞をそへて物を比較する辞之。此に称階比階最階の三階あり。比較虚体云ハ体云れ助辞を或ハ履之或ハ戴く辞ゆゑすべて能格三等の結びになる辞ハことごとくこれに属するなるといふべし。

称階比較　称階とハものにてそうりくらぶる義之。此中能格の助辞を戴く辞ハことごとく其能格の結びとなる格之。能格とハ波毛叙乃也加耶許曾之。

𩗗波称階　白波類(シラナミ)　風俗かひが袖に之呂支波事かや。すべてはもぞのやう
古き歌のみをよりよせふむ虚辞云ふまじへたるべし
陽貨不曰堅乎磨而不磷不曰白乎涅而不緇。

戴波称階　波無類(ハナシ)　古恋　ありあけのつれなくみえし別よりあかつきばかり
うきものはなし

戴毛称階　毛無類(モナシ)　古冬　山里は雪ふりしきてみちもなし今日こむ人を
あはれとはみむ
人しなければぞ。

戴叙称階　叙悲類(ゾカナシキ)　古物名　うつせみのからは木ごとにとゞむれど魂のゆ
くへをしらぬぞかなしき

戴乃称階　乃無類(ノナキ)　古恋　ひとりしてものをおもへば秋の田のいなぞれぞよ
ふかきいふひとのなき

戴也称階　也迷類(ヤトキ)　古春　そらるやと紀そなくやなそき吹きてむ常だすもな
かぞもあるかな。

戴加称階　加無類(カナキ)　古恋　人先なるふうそ汝やなる恋しき。などかわれに出て恋
ずしもなきかんかたのおもひかやなはおやなきなり。

許曽称階　許曽悲類(コソカナシケノ)　古秋　ほされば千々にものこそ物かなしけれわが身ひとつ
の秋にはあらねど。

又あの中に古今にきみがうきてありなき　後撰これぞよる
べもなきものぞ　新後撰れとにこそふくとも　なぐやう

にことりいじきてもを従ふ法を以てぞ紀すがらぞこ精を従ふ
さびひありすゐぞ下毛能主格の條とまじへ考ふ居し
まさこの称階の其なれなどのなれはくあれの約ありてなれ
となりたるが又こ轉じてなれとは云ふまるえ。されば此の名とは
るなれとは呉る云ふことを考るでし。かくさ潮かはるかうらうし
うらし上にうらしなどのうらしはくあるらしの約まりたるえ。
まさ古恋わが思ふ人にあとのなげきん　新古文いせ物語須の
ありとはいづ出たかきん　形勅ほらさちらバさきん　催る
乘法着はなかよきん　万葉なきん　さぶきん　きぶきん
さやまんなどのきんは、こなからんの約まり轉じたるえ。まさ
万八、こひしきぞ形見なせんと。十一、恋んまに得久しくなりくに。
十九、なふにまさりてかしこきめやも。望らの事気かうえ。又此
かよ重き　実き　さびきき　つゆ重きさうどうかきは云まの
きうちいさくうことな知るべし。郷黨孤貉之厚以居。

比階比較
比階とは此を彼によらべ。彼を此によらべ紛ち義なてうなうし後上
毛のまさは、よりはなどの合助辞をそへていふ例え。

自波比階(ヨリハ)　自波可住類(ヨリハスミヌベシ)　古雑　山ざとは物のさびしきことこそあれ世のうき
よりは住よかりけり。かりはくありえ。くあ反か

自毛比階(ヨリモ)　自毛悲類(ヨリモカナシキ)　古哀傷　こゑをたてゝなかぬなきてわかるゝよりもまさる
ゝに縁む君ぞかなしき　床

衛霊公、民之於仁也、甚於水火。李斯傳、故詬莫大於卑賤、而悲莫甚於窮困。

最階比較

最階とハ、それよりもこえたるものなき義也。よりもなほ いとも いと などを添ていふ例也。

自殊最階

自殊悲類 古意、ことさら思ふものゝつらからにおもへ よりなほ まづぞかなしき

甚最階

甚深類 古雑詞、むかしの山の蛇ありしとしもさそハゆま いとふかき いとふかし

最甚最階

最甚深類 古雑、としをへてもなほさきをいでしなれバ いといと ふかくさせとやなひ、当いいひうけん。

深孝系 賈后哭極哀 呂后紀、計所以安社稷甚深 晋系、王遇晋公子至厚 趙系、婦人異甚 留侯系、誰最甚者。

○代名言第三 代名言ハ統称各称等の名辞にかへ用ゆる辞なれば人名物名指物再説疑問汎称の六等あり。

人名代名言 是ハ人名に代用ゆる辞なり。されば第一人名第二人名第三人名不定人名復称人名の五等あり。

第一人名

吾類 古書に見ゆるもの左のごとし。とある物ならば 己 躬 吾 あ あれ こ これ まろ おのれ みづから それがし 同じ。

俗語にうつせバ これハワタクシセッシヤ まろハワシオレ みづからハテマヘ自身 おのれそれがしハワタクシセッシヤなり。

やまと万六 天皇朕宇頭乃御手以 などのごとく天子朕と称し諸侯寡人と称し男子臣と称し女子妾と称するたぐひあり。

台 余 卬 姎 吾 我 是らハ字ごとに第一人名也。姎ハ婦人自称也と郭璞が注に見えたり。まさ吾と我との差別ハ平津侯傳 始吾貧時昆弟不我衣食賓客不我内門今吾相齊諸君迎我或千里ときまで吾ハ自身ひとりのこと、我ハ我族にまでかかるをさとるべし。

第二人名

汝類 古雑ちハやぶる宇治のわたりにさをとるはやければ年のへぬれバ な なれ きみ おまへ いまし みづから そこ

どもに同じ きみハアナタソナタ おまへハアナタサマゴゼン いまし みづからハゴジシン そこぬしハソコモトコナタオテマヘゴブンなり。

若 而 爾 乃 汝 是らハ字ごとに第二人名之。まさ 迺ハ乃に同じ 女ハ汝

に同じやうに子足下のたぐひも同じ。

袁盎傳。司馬夜引袁盎起曰。君可以去矣。呉王期旦日斬君。盎弗信曰。公何為者。司馬曰。臣故為従史盗君侍児者。盎乃驚謝曰。公幸有親。吾不足以累公。司馬曰。君第去。臣亦且亡。辟吾親。君何患。これ君ハアナタ。公ハソコモトゝ。張儀傳。始吾従若飲。我不盗而璧。若笞我。若善守汝国。我顧且盗而城。これにハ若汝而を書分けり。孔子家語。子見夫子乎。陽貨来予與爾言。始皇紀。閻楽前卽二世數曰。足下驕恣誅殺無道。天下共畔足下。足下其自為計。この註に。羣臣庶相與言曰。殿下閣下足下侍者執事皆謙類といへり。是らにて第二人名をさとるべし。

第三人名

彼類　古序云。ひまどこまう體えざるところえぬところをおもひふまじれる。ふるくハかれといふ辞をこれといひかのといふ辞をこのといへり。そのゆえある歟。

憲問。彼哉彼哉。項羽紀。縱彼不言。籍獨不愧於心乎。

彼家類　古哀傷詞。藤原敏行朝臣身まかりける時によみてかの家に送りける。このかれうなりける人かのむ筵かの方このかたんよこのむりかこせうりける家ども是らにて古今の辞にてあひかなし。

先進。是故惡夫佞者　魏武傳。杯酒責望。陷彼兩賢

上のわれ汝ハ自他のへだめあるゆゑにて男女中ハことかはらねども、あきらかなる注をこの第三人名ハかれ男かれ女かれ子などやうにいはざれば、男女中わかちがたし。故に是らの辞あるなり。

不定人名

人類　古能皆雲をさまぬあまた山のあさましや人の名を忍びてこそやまめこの人の名ハワシガ名といふに同じく自他に渉る辞なれば。不定といふ。俗諺にも是よりいふ辞也。

陳丞相家。人固有好美如陳平而長貧賤者乎。

復称人名

吾自類　大和物語　われのれひとりよりうらんこハ人名代名言を重ねていふなり。俗語にてワシガジブンニなどいふがごとし。

憲問。夫子自道也。　樗甘傳。去。我身自請之。而不肯。汝焉能行之。

物名代名言

是ハ物名をさゞめる代辞也。これにまた配合独立の二等あり。

配合物名

我君類　古賀。我君ハ千世に八千世にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。汝身　吾大王神などもに同じ。

公冶長。吾黨之小子　泰伯。啓予足。啓予手。　雍也。再鄰里郷黨　田叔傳。王非吾主邪。　袁盎傳。吾與而兄善。

獨立物名

乃類　古序。まんえうしうにいらぬふるきうたみづから〔の〕をも奉らしめたまひてなむ。好忠集。人妻と家〔の〕とふらへ河の里ふよハこれらの神いはかれまされどもこれらの〔の〕どもをまつなにも代辞となりて、さてその物をハ離れて獨立したり。

万十

ハ。なほきうるはしの君のと生ふれけの何なども。獨立物名の一つは
格なるべし。また新古梅花香が袖ふきしかひぞと来やむう
しの序などぞや。こハ古意序やならぬ来やむうしけ来なうぬ
とあるが歌を云てよめるにて。獨立代名言けのもじに本歌の辞
をこ然たれ。やまさけのもじをそへて助くなけ格もあり。新千我
うくて君が七代よりふさうけ。実しまさし紀の道ぞしらる。是
ハ古離別。おほの実しまさし紀物なるバとある本歌をとりてよ
めるにて。実しまさし紀の下にのもじをそへて助くなさ。
賀類なり。古秋詞。このうさハある人のいせくうきけめぐの人まろが
るはんでゝるがなうむとくふうひてよめる。又同雑くけ中ハいろ
づきうゆしてしがなうむなどミな獨立物名の格にて上けのよ
同じ。また万三。いまといへど恋ひる恋斐のが恋ひぐうりハ恋
斐ノソナタガシヒガタリけさ。十四。せ子のが袖もさやなふう
しつハ。セナノ君ガ袖モとゆふさまにてミな云をがめじふめる
せらる知るべし。また古意むぼこの名はいつ何すまどハなん。
人をとふとも称うと思ハむ。氏うとのうハ疑問法のうにていさ
いう実に混ぞべうしぞ。
陽貨。公山弗擾以費畔。召。子欲往。子路不説曰。末之也已。何必公山氏之之也。こまハ上の之ハ獨立物名にて。上けの以費畔三字の代名言。

下の之ハ未来活用言の此方け儒者のむつうざるうとゝ。

指物代名言（サスタカヘコトバ）こハ物をさしてこの何その何などいふ代辞をいふ。

此指物（コレ）此花類（コノハナ）古序。なにはつに咲やこの花冬ごもり。いまハ春べとさく

其指物（ソレ）其名類（ソノナ）古誹諧。ゆうゝその名けなへうとのをつかうむ恋りてまど
ふハうれひとりうそ。

雍也。斯人也而有斯疾也。汲鄭傳。此兩人中廢家貧。學而。事父母能竭其力。事君能致其身。蒙恬傳。此其兄弟遇誅。不亦宜乎。

再説代名言（フタヽビイフカヘコトバ）こハ上のゝを承てびいふ代辞にして。これそれなどこやこハそよそをまさ。所者同などの類之。

是再説（コレ）是類（コレ）古意。形見こそ今ハあさなれこれなくハ忘るゝ時もあらましものを。金葉あさましやこハ何事けさまぞとよ

其再説（ソレ）其類（ソレ）記上。今其可來時故泣。古物名。ものよりそ知まて知ゆつくしまめやこれなむそれとうつをえんうし。拾遺いさやま
ご意てふことも恋うなくにこや恋なるうんいこそ称うれね。
古意そをぞなほの恋ぞがさえに。同意。稲葉のそよといふ人の
なほ。學而。禮之用。和爲貴。先王之道。斯爲美。微子。是魯孔丘與。曰。是也。

淮陰侯傳此乃信之所以爲陛下禽。呂后紀帝廢位太后幽殺之
八佾樂其可知也。

者再說

者(モノ)類 古雑大かたハ月をもめでじこれぞこの。つもれバ人のおいとなる[もの] 同序ぬさハにおかぞへうるを、これハふぐことにいひて、物によそへすぐもをぬ[ものなり]。
學而賜也始可與言詩已矣告諸往而知來者

所再說

所(トコロ)類きこ、こハ漢籍よみの辞よたくありて、上代の古文にハ絶てなし。孟子梁惠王下。姑舍女所學。書。假祖之民の假も同じ。

同再說

同(オナジ)枝類 古秋同じえをわきてこのはのうつろふハ西こそ秋のそめわりなれ。詩谷風及爾同死。

疑問代名言(ウタガヒトフカヘコトバ)

是ハ手物をうたがひとふ代辞にして、これに物にあづかると人にあづかるとのふたくさあり。

非情疑問

何(ナニ)類 古春までといふふちるでしとぬる物ならば何をさくらに思ひまさまし。源桐壺 いづれの御ときにか。公冶長曰何器也。平原君傳予秦地何如。毋予孰吉。

有情疑問

誰(タレ)類 古秋のみちのおで流れる身が通どを誰をまつ虫こそならむ。又おなじく八誰のきこ。同秋なる人かきてぬぎかけし藤ばかまぞも。同恋おもひきまばぬが名ハをしくして。
子罕。吾誰欺欺天乎。述而。伯夷叔齊何人也。項羽紀。客何爲者。

汎称代名言(ヒロクイフカヘコトバ)

すべてこの疑問代名言に第二結格の助辞ぞやら等けつくと既ハ疑問法と格と知るべし。こハひとつにうたがはして、ひろくいふ代辞なり。

然汎称

然(シカ)類 古雑 わが庵ハみやこのたつみしかぞすむよをうぢ山と人ハいふなり。又さハ志かのつまりたる辞也。

如是汎称

如是(カク)類 古恋 世中ハかくこそありけれふく風のめに見ぬ人も恋しかりけり。同序 ばらふも かくれごとく なるべし。
范蠡傳 先生奈何而言若是。

皆汎称

皆人(ミナヒト)類 古哀傷 みな人ハ花の衣になりぬなりこけのたもとよかわきだにせよ。顔淵 人皆有兄弟。李將軍傳 一軍皆哭。

諸汎称

諸人(モロビト)類 拾遺 あすきみしとよけみそぎけるもろ人の君しも物をおもはざりけん。五宗家 諸幸姬常侍病。

幾汎称

幾世(イクヨ)類 古雑 われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾代へぬらん。循吏傳 如此幾何頃乎。

數汎称

八千度(ヤチタビ)類 古哀傷 さきだたぬくいのやちたびかなしきハ流るゝ水のかへりこぬなり。述而 加我數年。
このやちたび 各國のなどひなれば數多へて志るべくなん。

複称代名言とハ代名言六等のあつまり也。

第一複称　我等類　古今序　古も後の世のくまなきハ[われら]が中にはなまて。まさ
同序　そのまゝハ[そのかみ]の事をうつしおやかれる
ものなり。　項羽紀[吾属]今為之虜矣。

第二複称　汝等類　万六まで也。　枕草子[君だち]　神楽歌のさきんだちや。
さハそやを辞すて[公等]するべし。　源氏物語葉下[宮たち]
駿河歌[正乃者良]　平原君傳[公等]録々　日者傳[公之等]喁々者也。

第三複称　彼等類　源語椎姫[かれきんだち]のなぐさめ也。
上林賦[若此輩]數千百処。

〇連体言第四　此体言ハ活用言三世の助辞をうけて、さて実体言に續
くをいふなり。その中に現在過去未来の三等あり。

現在連体言　こハ現在の用言より実体言へ續くを云。すべて四段に活く辞の
くをつなぎ[illegible]及るをうつる[illegible]ハ皆此格也。

久現在　咲花類　古春[はく道]ハ子[illegible]まがくまあさ[illegible]ハ八重をう
らみてたる。

須現在　人古須里類　古今[人ふるさと]をいとひてこしかども[illegible]のみ
やこもうつろひ名なりけり。

都現在　待人類　古今[まつ人]もこぬ[illegible]のゆゑに常なきつる花をまて
まるらん。

布現在　誘ふ類　古雑[illegible]ぬきバ身[illegible]紀貫之の根を絶て[さそふ水]あらバ
いなむとぞ思ふ。

武現在　住我類　古秋[illegible]紀の山[illegible]ぬさ[illegible]むくまバ[すむ我]さへぞ[illegible]
ごろちもする。

る現在　見人類　古秋[見る人]もなくて[illegible]かく山[illegible]をみだれ[illegible]
し[illegible]なり。

久る現在　吹來風類　古秋[illegible]川[illegible]の山べハと[illegible]ど[ふきくる風]ハ
花のあそそる。

須る現在　令紅葉秋類　後撰[illegible]の山の山[illegible]山も[もみぢせさする]
[秋]ハ[illegible]になり。

都る現在　出月影類　古雑　ぬる川に紀めのと思ひしをみな底に山のかげら　でいづる月ぞ峯

布る現在　恋君涙類　古恋　君こふる涙のとこにみちぬれば　みをつくしとぞ我ハなりける

武る現在　鳴留花類　古春　なきとむる花しなければ鶯も　はてハものうくなりぬべらなり

由る現在　見白雲類　古春　さくら花咲きにけらしなあしひきの　山のかひより見ゆる白雲

留ゝ現在　流川類　古哀　ちるおとに流るゝ川をそまと見て　をしまぬ袖にやぬるらむ

高祖紀　願従者十餘人　衛霊公　如有所誉者其有所試矣　孔子家　遇荷蓧丈人　檀弓　魯人有周豊也者

右これらく現在を体言にてうけ現在用言より能格の結辞となる時ハ、下の実体言に續くことをかねてうけたる故に切る格也。現在用言のくもつふむるハ第一能格はもの結びと第二能格そのやの結びと知るべし。ふるもるつるふるむるハ第二能格そのやの結びともなる辞也。まさぬるつるといへば、しても咲きぬ常なきつめ、みぢ葉ながるなどやうにいふ辞ハ第一能格はもを添てつくしの結辞にして、もとより連体言をそへて切る辞なり。

過去連体言　こハ過去用言しりてしせると同じ紀もなりせるてかへりめら、けるめるげん等の助辞をそへて実体言に續くをいふ也。

し　志過去　結水類　古春　袖ひぢてむすびし水のこほれるを　春たつけふの風やとくらむ

にし　尒志過去　来心類　古離別　志るらいまてきかし心の身にしあれば　かへるさのはにも志らまほし

てし　弖志過去　降隠道類　古秋　秋をゝきてちりふやとそむもみぢ葉の　ふりかくしてし道と見えながら

てる　弖留過去　咲桜花類　古春　みよしのゝ山べに咲けるさくら花　雪かとのみぞあやまたれける

せる　世留過去　曝布類　古雑　たがためにひきてさらせる布なれや　世をへて見れどとる人もなき

てる　呈留過去　立松類　古雑　かくしつゝ世をやつくさむ高砂の　尾上にたてる松ならなくに

へる　閉留過去　匂色類　古哀　いろもかもむかしのこさににほへる色も　うゑける人のかげぞこひしき

める　免留過去　霞世類　式子内親王集　はるゝよをみる上にきえきこゆ

れる　礼留過去　氷涙類　古哀　雪のうちに春ハ来にけり鶯の　こほれる涙いまやとくらむ

奴留過去　住世類　古雑。ありし雲井のみえぬとも　なびく草葉にそめば　住みぬる　世又アラき　をられ。

多留過去　浮ぬる類　古恋。あぎつきに旅ぎしをぶめぬる紀をれ　ら紀さる涙も　又いもらりよ。同恋詞。や争ひさるちれ袖に泉をさして。

計留過去　従兄男類　古俳諧詞。いとこなりける男　ふよそへて　人のいひなせ

計武過去　幇心類　古秋。ちぎりし事も　ぞ待ちきあかし　この年も一よびあふ　をあふらい。

省体言格　免留下省体言者　古春詞。みるとしにあきらける　ひとよなれにし　時下に歌とある所を省けり。さらにして　添てみくべし。
多留下省体言者　いせ物語いやしき男すくる　下に女とあるべき　をらぶきり。
計留下省体言者　いせ物語みこのきみなりける　下に詞とあるべき　をらぶきり。

袁盎傳　盜君侍兒者　公治長　喜色慍色　酷吏傳　盜鼠餘肉　孫吳傳　龐涓果夜至斫木下　滑稽傳　擿珥遺簪

右にぬくゐ去ゑ体言にあるゐ去用言ハ、才二能格ぞの例なれ結びとある辞ゑ。然るにゑしその結び辞とする時ハ、下の体言を續くことをぬぞして、うあらば切るゝ格ゑ。ゑとへバ古ゑ春下山守　をみつゝ　已がおし桜と　つぐきさる体言あしぞのむすび辞

とありて同真上を拾にのゑあいきとぞれし　うめのそをとかふ時ハ下の体言につゞくゞして切ることがぬし。
又知えみし　散ゝを散りまき落たる月を月落さりとやうよ　いふハ皆才一能格法ぬを従てばくさの結辞ゑて。ゑ体言をいふあらば、

未来ゑ体言　こハ未来用言より実体言をつゞくをいふなり。志かゞ彦に西洋の語法ふてハ、未来ゑ体言は格なし。そハうれ國の語をそハこの格をきかゞゆゑなるべし。皇國言ふても俗語ふハこの格をいそざるなり。ゑとへバ見んん人ちう死んなすらんん小鑿などの類、俗語又てハ見ル人チリテ死ルル鑿とやうにいひて見ヤウ人チルデアラウ後チルデアラウ小鑿などくハいそざるがごとし。

武未来　將来世類　古恋。来む世を昔と思ハむ。
はもんやありあくむめのまへあつ事なし。思ハむ人恋しき時などこそ同じ。

良武未来　將散小野類　古秋。そぎが咲ちるらむ小野の吉田又ぬさてをゆるむさよハぬくとも。

高祖紀　殺人者死傷人及盜抵罪。
右のぬく未来ゑ体言ふなる未来用言ハ才一能格のはまと才二能格のぞの例ちと説きてなぞお辞ゑ。志かうにあし。その結びとなる時ハうなら切るゝこと上の現在ゐ去の例のぬし。
かくてあの体言又能所中の三等あることゑ。ゑとへバ見る人見らるゝ人見ゆる人ハ現在の能所中ゑ。見し人見られし人見え

「人」は過去の能所中なり。「見えん人」「見られん人」「見えん人」は未来の能所中なるがごとし。

漢語にて、高祖紀、願従者は現在の能なり。斉家断足子 足ヲ断レタル者ノ子といひ、奪妻者 妻ヲ盗マレタル者といふ是等は過去の所なり。

高祖紀、殺人者は未来の能なり。

なほ能所中の事どもは活用言の條にまとむべし。

以上実体言、虚体言、代名言、半体言の四品は、みな体言の名なり。

この四品は体言、助辞はもぞのやかこその例をとりて此六格にかりて転変をなす定格なり。

○活用言第五 活用言は事物を活動せしむる辞にて、漢にいはゆる活字なり。これに動他、被動、自動の三等及九法あり。

動他活用言 動他とは、すなはち能活ともいふ。そはこれをかれをはたらかするなり。これにまた現在、過去、未来あり。

現在動他 動心類 古序。たとへば花にかゝるをとらふをみていさづらなむを動かすがごとし。

陽貨 割雞。魏豹 魏桓子肘韓康子、韓康子履魏桓子。高祖紀 詐為漢王誑楚。老荘伝 其家甚知其子、而疑鄰人之父。

現在動他は、ばかりとそのやうとの結びとなりて、くぎつぐむるの所役格をもてさかふ格なり。雞ヲ割クといふがごとし。わきさの現在動他の上は、うかうかる過去此辞なり。女ヲ見テ心ヲ動カスといふ時、見テは、ちに過去格になるがごとし。

全過動他 動天地類 古序。あめつちをうごかし、めにみえぬおに神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ。

衛霊公 嘗聞之矣。始皇紀 招八州而朝同列。項羽紀 楚人憐之至今。楚家 見秦王書患之。樊噲伝 抜剣切肉食盡之。

全過動他は、きゝちにひとりげせてねへめれの所役格を従ふ格なり。又或全過動他の下は現在の辞なる文例にて知るべし。

未過動他 待春類 拾遺 人しれず書をこそすてえらふべき人に知らるれ。高祖紀 太公往視、則見蛟龍於其上。

未過とハ、現在ならぬ過去の義に未過動他ハ、なにその詞びとを
ねけせてねへめれの所役格をあらはす格也、

未来動他

将留人類　古俳諧出てゆくも人を[とゞめむ]とするは哀なりの
ことにそなたもひぬるか、
李氏[将伐]顯吏、高祖紀、項伯[欲活]張良、
未来動他ハ、うさたみそまらけせてねへめれきしちにひそ也等
の所役格をにあらはす格也、

被動活用言

被動とハ、やはり所活ともいふ、是なハちものゝあらたむ活きなり、小説
語ニ[喫]他走了など云も是也、此もまた現在過去未来あり。

現在被動

所責類　古歌、冬はなほぞ[せめらるゝ]　同誹諧[ゆとけらる]　我身ハ
春の狗子せめや是ハ現在被動の格也、
陽貨、年四十而[見悪]焉其終也已、公治長[屢憎]於人、淮陰侯傳、乃
為兒女子[所詐]　外戚家、為人[所罵責]　五宗家、詣中尉府[簿]　酷吏
傳、跪伏[使]賈臣等前、魯鄒傳、故女無美悪入宮見[妬]、士無賢不肖入
[朝見嫉]　被動ハ多く所與格にあらはす格なり、

全過被動

被棚引類　古歌、そらハうちみに[ゐまびかれ]　同歌、花さくきさと
そ下に思ひしらぬにて人に[むかば]きこゆ　やさ
古くはハ ゐれをゆえといふ、万五かくゆきバ人に[いとそえ]かく
ゆまバ人に[あくまえ]　同七、なりハぬ人のたまを[そられ]しど、

楚家、且王[欺]於張儀、　また袁盎傳[謂]為隴西都尉、　呂后紀[徵]至長
安などと被動の格あり、

未過被動

見恨類　古俳諧あやられ人に[うらみられ]バ、
田儋傳、蝮[螫]手則斬手、[螫]足則斬足、

未来被動

将被忘類　古雑[忘られむ]時さのべとぞおもひまくへもなしぬ
ことをとゞむる忘られむはとりふハ連体言の例なれど
しそハすべてならなそくへて所与格ににあらはす被動詞なること
とをしるべし、されへバ人に忘られんといそんがぬし。
淮陰侯傳、上怒曰、烹之、通曰、嗟乎、寃哉[烹]也　ニラレン7とよみあり。

自動活用言辞

自動とハ、やはり中活ともいふ、能所をそなへさるをいふ、此活
辞はとおなじこれまた現在過去未来あり。

現在自動

成類　古歌、おろかなる涙ぞ袖に玉ハ[なす]我ハせきあへずたぎつ
せなれば、　自動ハすべて所与格にあらはす格也、
越家、[到]門居甚貧、　項羽紀、雖呉中子弟皆已[憚]籍、　淮陰侯傳、居常
鞅々[羞]與絳灌等[列]、　楚家、以說衆々乃[喜]
現在自動ハ、くそつぬ、ふむゆる、うちきる、つか、ぬすふらむる、ゆる
らくれう、へるなどの韻をふむてそうちる辞也、

全過自動

居類　古俳諧、人におらむつきけ花よハ思ひおきてむまてそ
火ぶむやけ[をも]　同序ぎのふハ[はりえおこりて時を]そう

なびよにとびたゝしかやしもうとくなむ岩らさも同格也。
斉家車絓於木而止。五帝紀書鉄有間矣。陳渉家尉剣挺
全也自動ハきたちあひきいりぬ及受痩等のけせてねへめえ也
也の韻の活辞也。

未已自動

行類（ユクルイ）拾遺むかしとほるなるこそ人ハゆけなぐ時の名もこそば
なり。遠及ニモコソ人ハユケのさかして。所々格に
未過自動ハこそ此活辞の所々格にしさがへるゝ。こその活辞
しさがへり。鄭家佗日指動必食異物。
とハけせてねへめ也をいふ。
まさ万葉巻ま一の格此辞あり。二。ならまづくふ入日さしめれ　十七。
五さでみうまとりゆりつれ　十九。露霜のとまりにけれ　十八。こ
大雪のみだれてきたれ　かへり来て志ハぶきつゞれ
がまかりどまうしまへれ　五。をきさかひぶつかハきれまかり
いませ。記上。よぞひろかてかよハせ　以上こそある歎の詞也。短
歌ハ方三。家さかりいますそこ紀りをとらみうま山かへりつれ
たまひなしとよあり。是たすら未已自動に属せる辞也。

未来自動

如着類（ゴトキルイ）古序。いかであき人のよそきぬきてらむがめし。
雍也天厭之天厭之
まさ万葉ふんを轉じてめといふこそあはし。二。たがあひぶあ
らめ　三。あまあひさらめ　四。あくもいふぶうらめ　七。いづち

ゆかめと。十三。あひかくらめを。十四。つらそがめうる。十五。
こくらめかをなりてざるらめ　十六。なませんみちを絶そら
めや　一せいかさなぶなるなりきめう。四。いかそかりおすひ
きめうも。此例書紀ある後の歌にもありさてらめハ現在格きめ
ハ過去格なれども。ついでにこゝにハ志るせるのぞ。
すべて未来活用言ハ。れさくか他に見る類とてありいうるとい
ふに未来用言ハ下に受る助辞なければなにとく語をさきぬえ。多
とへバきうん皆うんすぐらふ辞をきかはかとのこいひてハ語
をなさぬがめし。但うきん皆きんハうきといへバ体言となり。皆
きそのへぞ使令法になり。かきんきんハかききといへバ過去用
言にもありすこし体言にもあり。こせんせんハこせといへバ使令法
になることそ。

有情活用言

すべて三動言此中に人にあづかる辞ハ動他。被動自動にわかる。
物にあづかる辞ハ自動のこ也。

留ル、有情

忘類（ワスルルイ）古今秋の田此ほのうへをてらしいる萬此ひかりのまにも
家やとまるらし　大宛傳。鳥嗛肉蜚其上。狼徃乳之。

非情活用言

物にあづかる辞ハ自動のこなれども非情の物を有情に轉じて
いふ辞あり。そハ古今春梅花にほふ春べハとやうに自動にいふ
置き辞を。同秋。くる秋ごとにおるべをにほハもとやうに動他の格
になすうり。このさぐひあげさありすぐふべうる也。

しい。非情　降類 古冬。梢あそきともえんほひさうされ。あまぎる雪みなべて
ふりてバ。　李斯傳。秋霜降者草花落

配合活用言

すべて用言と用言とあひ重なれる辞是也。古ありゆく後ありゆ
るバ。古さりあへぞ同ききあへぼ同行き過ぎぬゆきやらで拾そ
むきりぬらんまさ古ゆりはる同のどかなる。方なりゆ同思ひのぞゆ
ねむりす同をさずる古てらせる同ちらしいうつる花そしむる
あげもなき配合活用の例也。但と免ひと免りハ他のまたくの
類ハ常ある辞の類にして配合にハあらざる也。

現在配合　行過類（ユキスグル） 古秋をミなへしうしと見つつぞゆき過る　同友哉
叫生るとぞ詠それ此山の時鳥之ハ連件言の配合なり。

全過配合　落積（オチツモリ） 古衣つくは紅の雪のあみぢ葉おちつもり志られも志ら
ぬもみべてかなしも。同長おそれくとなきわ留り

未過配合　明立類（アケタタバ） 古悉河たてバ蝉の鳴りそへ唱くらし。同思こひ
志ほともろまざあらしハ使令の言也。

未来配合　将帰来類（カヘリコム） 古離別立わかれいなぜ此山の峯におふるまつとしき
くバそくへりこむ

配合の例、漢語ニ尤モ多し。現在ニハ、五宗豪上常寛釈之。過去ニ
ハ滑稽傳、騶恐懼待伏所飲不過一斗径酔矣。未来ニハ、項羽紀、今
戦能勝高必疾妒吾功、以上此三動云まさ三世の助辞を得て以
よく活用の妙をなせり。下卷用云助辞三格の條ニ詳也。

活用言九法（ハタラキコトバノコヽノノリ）

活用言ニ直説、許可、附説、第二附説、不定、使令、疑問、不無、不有の九法
ありこのうち附説第二附説ハ直説なれ、許可ハも附説なる也。此
九法ハ作文の要領にして、天下万国一切の言語これに依らずといふこ
とあることなし。其法なるといへバ鳴くといふ辞にていへバ、直鳴
くといふハ直説也。なくべしと云ハ許可也。なけバと云ハ附説也。
なくともと云ハ第二附説也。なかんと云ハ不定也。なけと云ハ使
令也。なくやと云ハ疑問也。なくまじと云ハ不無也。なかれと云ハ
不有也。これすべて九つ也。然るにこハ只用言のことなれバ、いか
さまにも上に件言及件言助辞などありて當ぞなくなどいふべ
し。既に此法あらバ、當ぞ音をなくめるとも、いふべし。當ハ実件言。
ぞハ第二能格、音ハすさ実件言をハ所役格、なくハ直説法、めらハ
現在格也。かくて能格を君とし所格を臣とし結辞を民とほこれ
を君臣民の三法といふ。すべて九法の位置これを準則とすべし。
それ我国の語法も同じことなり。但我國語ハ、その君臣民の三法の
位置おろかく君民臣となることなり。論語、吾從衆のごとき吾ハ能格に
て君也。從ハ結辞にて民也。衆ハ所格にて臣也。西洋語も大低これ
にひとしくならへバ彼ハ彼等ノ官職ヲ能ク知レリといふ也。然れどもその其義
を彼ハ知レリ彼等ノ官職ヲ能クとやうにいふ也。然れどもの順序
ハ皇國言ニ異なる事なり。九法ハ文理圓活の妙用なれバ此急
ニ学者ことにこれをそぐへし。以まま古今の序文と論語とを引て

文例とはまさ近世の誹諧の句をも附出せる　ハ是強く雅俗ヌ渉
ることをさとさんとてしるあやしるぞ。

直説

鳴類　古序やすくうごとハ人の心をゆきとてよろづのことのれそ
鳴類とぞなきける。一語ゐていへバ鳴くの類え下准之。

學而學而時習之不亦説乎。
ある時をとまてにならふまでみるす。

附説

鳴則類　世中にある人おとこゞ志筆記りのなきバむふありふて
とを見ぬりのきく物よ注章ていひいださせるなり。

学而有朋自遠方来不亦樂乎。友が訪ヒ来ル丁有レバのこ。
それ等てさ来ぬ時とあればおぼろあり。

第二附説

雖鳴類　あとひときうつりさそりさのて色ゞ形ゞびゆきうゐ
とも　め附説ヌ雖字のこあれバ第二ハ則字此こと。

学而人不知而不慍不亦君子乎。人知ラザレ圧。又人ハ不知圧のこ
おうくといへ共ゞくやゆきのうぜおう心ゞくハをてん。

許可

應鳴類　さやきさと孫もいでゝ川あしりゆよりぞじありてすゝこ
のあるかくれてとくなるべし

八佾。夏礼吾能言之。杞不足徵也。吾ヨク言フベシのこ。
ゆきをや鬼もうひな紙いざそべう

許可附説。八佾。文献不足故也。足ラザレバナリのこ。
許可第二附説同　足則吾能徵之矣。則字第二附説ヌあり。

使令

鳴類　いすへ乃事御ゐ見えじぬり　わしすを見おうし琵ゐて
下。今も見ぞ彼りし。侍の世ゞ手なられそて。

陽貨居吾語女。
ゆうれのそら時ひとけ傍とぎそ。

不定

將鳴類　あれさ気をも志うおとの気をえうらむ人も大ぞうれ月
御ゐるがおとく比右を有ゆぎてし今を忘ぎるぬうも。

八佾爲力不同科。カノ科ヲ同ウセザランガ爲ナリのこ。
うの見の独る書うんやとみらぞ。

疑問

鳴與類　あれあしさ吉野山乃はらうハ人よ源がこゝろ又ハ雲の
とのうらんおふえまる。

学而求之與抑與之與
聞まゐといかの楽山子のうし力。

不無

鳴也類　をとこ女のまうをもやもうぞあけさりのゝあのこゝろ
御も形ぐさひる　ハうさなり

泰伯巍巍乎。唯天爲大。唯堯則之。有字を用ゐる者ハおのよりこ。
いろくの他とあらなでむぎのあ也。

不有

不鳴類　今ハ姉じ此山もそふり為ぐ坂あり。形がらの樗すつゐる
形りときくんハ。

子罕。鳳鳥不至。河不出圖。吾已矣夫。
あそぶとや行とも忘らぬつぞ然う経。

使令餘論

使令法ハ下知の詞なり。こハ此世で仰へめえ哉とちぎるさすきハ呼格よやの辞を添ていひ、きさハこそ知んぞ等あぐと云。

計使令　吹類　古今。春風ハ花のあたりをよきて[ふけ]心づからやうつろふと見む。

世使令　残類　古今。ちりぬとも香をだに[のこせ]梅の花恋しき時の思ひ出にせむ。

弖使令　立類　古哀傷。空蝉ハからを見つゝも慰めつ深草の山煙だに[たて]

閉使令　句類　古冬。えそ子花ハゆきふりしきてとぞとも香をだに[にほ]へ人のあるべく。同雑。門さ[せり][て][へ]てへハといへの約なり。

免使令　盗類　古春。霞の色ハうすみゆこ花を見てとも香をだに[ぬすめ]てゆくこちれあ。

延使令　然類　古誹諧。此稿のならぬ思ひよめえバ[けえ]神ぞ云きこぬ。寛一燈誦。風俗も世波[よせ]わどくも同じ東語。ヨセバヨセロ

礼使令　折類　古恋。なてといちぐ稿てもゆか形ひ志ひてゆくこまれあ[をれ]まへのるみそし。

呼格使令　定類　古哀。見るつてとハ世人[さだめよ]　同離別。君を[とゞめよ]　同春。それ[すつそれよ]　同羇旅。人又ハ[つぎよ]

恨類　古哀。此風を吹て[うらみよ]　同哀傷。山乃こほみをはなれと[うらみ]ハ[てんよ]

隠類　古秋。君渡らバうぢ[かくしてよ]　伊勢物語。今ハや[見てよ]　新古[見つてよ]とや　玉葉[思ひ出よ]夕暮の空

鳴類　古夏。数あれど[なけや]すゞ　拾遺[なきや]あけ出る山の山のほとゝぎす。

来類　後拾遺のくれの[こや]とも人をらふべきに　新来ためる　ひぞり[よりこや]ひぞり。

古曽使令

見古曽類　万四、又五。君に[見てこそ]　五、ちらバ[あまたこそ]　六、又万　七、我に[つぎこそ]　十[わびこそ]　十二　やまぞ[見てこそ]　そやく[ゆきこそ]吾等のあそこそ與会　社欲得　記上[あせこそ]　いま縁層　欲すぐ出てこ子知ふさの使令也。に[つぎこせ]とし、やまと万八、又十五[ちりおきなゆき]などハ今ぞと知ふさの使令也。

奈武使令

言奈武類　古哀。しめる余いきめやすりところ見ゆるをぞ　又後撰　いもとのめしをもあるものをそきれバこそに[われそれ]　やまと万一[このね]ハ知んの中間の音あて[いそすむ]こハ知ふさのおんなり。あそこあん又同じ　かやを[かるさね]又九。子が名[のるさね]　又二。塩干子なりそ　ねぎらのねも同さ。それハ嫌と書なり。

疑問餘論

疑問法ハ疑辞のぞやかなどにこれをさ第二結格と同じ。但彼ハ結びあり、こまま八結び子きを異とす。

叙疑問

如何類（イカデノ）［いつかぞ］拾遺ちくにぶに浅ぐとふく鳴るましてくひの杜ハ

後撰堂れききとふく［琴が音ぞ］の類同じ

ぞを手ねるハ．新古．うた人の月ハ［なにぞのゆくへかぞ］と思ひ子

がくもうちながめつ．此何ぞハ．いくその等ハ．ア之．ぞは古

春．ゐが袖ふれし宿の［梅ぞも］ぞや拾遺．い出ましは土．此あへ

［いづくぞや］侍めぐるとてゑといひしぞ

也疑問

所聞歟類（キコヤ）［きこゆや］後撰．かぞうるぬ日がミ山べの時鳥木隠がくれの声ハ

古．恋．ちのがそむ聲の［と思ふぞや］万二．

聲のうへのうそ花［色ふきかぞや］の類同じ．やをみをする八新

古．れ紫のちし八［ちるやちるぞや］とや．後拾．多ふのわそ布［むすて］

［かけどとや］とやを手するハ．千載［ゐの名］とやいふと［や］いう

にいふ船の．やとぞとを手するハ．後撰．君がいう［かざや］い

［づこ］越え行雪れ．千載［あぞや］かくさまも善ござ花［天の岩］あが上

川こと八ゑ［も思うぞや］や何ぬ撰かく不思ひまかるぬ［やす］

［ぞ］同．ぞらふぞうりの宮［や何］なれ古．来ける．がすそ立てる［や］

［いづこ］同雑．めし［やあれ］らへど志ら．ゑいともかくに．又．ゑあれ

れかが名［やいづら］ゑ紫．みやこ［や宮日］まの〜かや杯拾遺．恋

堂．ちう雪れいのる［やなみ］の手向してなど．やハ古．恋．命［や］ハ何

ぞ［いはのあぶまのを］やも万三．ちくあって［逢やまいづく］又

ゑハみぐれてありと［いそぞやも］同四．うくきこれ［上やまぬ］さ

ゆく．同六［ものこやしむ］おしかるべき．うや散木ひとつまこ

えぞ語よ行る［かや］

加疑問

涙歟類（ナミダカ）古．春．春るのふらハ［浅う］同秋．あおの聲の菜此［思ひとう］

花ぞく紀．加を重ねるハ．古．恋．君やらう露やゆきゝ多

かめむゝぞ［恋ひうつゝ］ゝかねてかさめて［う］とう古．秋．れつゝね

紫の袖を［見しらう］ぞか拾遺．おとゝみてくの［袖ぬよあれバ］か

ぞふ適ふか万四．あらでし八［ゐがらうにあるか］かハ古．恋．あき

いびとぶれくべき［きうか八］同．恋［あれか八］恋をうらみてたる．

かも古．羇旅．［三笠の山］まいでし［月かも］また万十二．色みし恋や

みぐれ［こんかも］新續古．君のこゝや［あうぼうも］こんまた万之．

河の瀬の名ぎりを見ればか［色あき］ちりみぐれかる［川ども］

堂らやとかもと重なりかもとかもと帝まれり．疑問法ゆゑ他の

例と異なるか．

すべて使令疑問の二法ハ．才一能格はこれをとぢむる格なで．なぞ

はも此結辞のごとし．古．羇旅．人はハつぎよあ娘のつゐふね．同

喜ぞるさ名のふるハおみぞうなぞれぬし．

明の盧允武が説ま．也者．二字連下必有後句應接解釈之孝弟［也者］

其為仁之本與といへるハ．此疑問法まあてれり．

○形容言（サマコトバ）第六　形容言ハ用言に活くさまを先形容していふことばに
てもともひ多く此辞をへだつるものなりば下の用言に
でうろなりされバ此形容字面ハ漢籍よみにてハおほく二度
よみなる例也　マサニ〜セントス　マサニ〜スベシ　ヨロシク〜
スベシ　スベカラク〜スベシ　テ〜セシム　又イマダ〜セズ
ナホ〜ノゴトシ等也　又なさきそいさしなどもみな二度よ
みのこゝろ也　是ハ状態時令處在商量負數次第含有不有顯示勸
奬同等併合除去選取禁止料度疑問比較など十八等あり

状態形容言（ワザノサマノコトバ）　すべて形容言ハいつもよくあらはるまでなどいふ辞なるハはも
そのやこそにとてなどの助辞をふくてその形容をいふ辞なるさ
ハおもくみげなはなどきらのまよりまでうぬなんごとめて
おそげなしげてしぞうりまゝつ等の辞を添てその
形容をいふ辞又ハまたにくゝもかへもくまなどやうの類
辞なりことに状態形容にハ是詞いとひろし今ハ其大旨也

且（カツ）状態　且見（カツミル）類　古今ゆり見る人よ恋やわたらん　同序かつハ人のみと
かつそなる也

能（ヨク）状態　能不知（ヨクシラズ）類　古序かまこまをかよりてよくしらば　やまとべくな
くそうおくなどもこのよくと同じ格也

専（モハラ）状態　専絶（モハラタユル）類　古恋ゆふするのおもひ絶ぬる時まてそ人の恋しきものとも

轉（ウタテ）状態　轉憎（ウタテニクシ）類　古恋まゝろこ性さてふくに継　漢籍よみにウタヽと
いふもこのうたてなり

履（シバ）波状態　起則歎（オキハナゲキ）類　古恋ぬきまなききくをや祢さく白髪のおくとハなげき
ぬとハ忘のぞむ

履（シバ）毛（モ）状態　辛苦（カラクモ）類　古雑おしてる也難波のみ川よやくしおのからくも気ハ
老ぬるらん

履（シバ）叙（ゾ）状態　且消（カツゾキユル）類　古冬ゆふる雪ハかつぞ消ぬらし河ぎきの山乃瀧川世音
なるなまなり

履（シバ）也（ヤ）状態　多為尚生茂類　古恋さふまどもけふ秋の手きハ恋草まさればよへ
やおひ志げるらん

許（コソ）曽（ソ）状態　思耳詐類　古恋人志きぬおもひのえてそもひしと気まさ念ずなきを
ハ見れのこそ志る

履（シバ）尓（ニ）状態　俄増類　古恋なされうちつけよ恋まさるらむ　又いでがてにふる
なれども同格也　あさよするべきなミの行ハサニのさま

履（シバ）登（ト）状態　朗然明來類　古恋志のゝ名にもかがりくと行手ゆきバ　同羈旅に
のぐとありれうろろてハいひうる也

履（シバ）弖（テ）状態　打延而恋類　古秋ゆふぐれにうつろふものうちそへて手れを長
くこひや渡らむこまらハ形容言を手書するなり

いとおそし　又同秋山志さとよみ原の秋くらむ　同友うちそ
ふきそま鳴なむなどの形容言ハ、ゝまでめぐをふむ格よ同じ

還上 状無　奈我良類（ナガラノ）古秋ぬゆかてさらふやとハんのみちぞのふりうらん　ふともえまかりぬ色と見えよあるハ必ず上へ還るし。

物加良類（モカラノ）古友かりしぎりそ手が如く里に在まさ行きハ家がらと　よれぬるりふりのうち　色ハ巴の句へうへるし。

物由恵類（モユエノ）古秋　あきぎかりて行ふことめくさき　女郎花の川原に　か　ひぬものゆゑ

万尓万尓類（マニマニノ）古離別　ひうれをは山のさくらにまかりせてんとめむ　ともがら八花のまにまに　色ハ三の句へうへるし。

顔淵忠告而善道之　子張博学而篤志切問而近思　述而竊比於我老彭　先進鏗爾舎瑟而作　陽貨莞爾而笑　泰伯洋々乎盈耳哉　淮陰侯傳上因怒因喜　同上常從容與信言諸將能不　范蔡傳唐擧孰視而笑曰　留侯家戚夫人嘘唏流涕

時令形容言（トキノサマコトバ）　こハ時令よあづうる　まごとに　ほどなく　ようやく　ほのか　なまなく　なふさへ　いまハ　よもすがら　などくし。形容云ハ事をひ多くれ語をへだてても心うあらく其下の用言近う　うち格手故が故よ漢語みてハ多く直よ用言と熟せるし。

無間時令（ナクマトキ）　ナクマなく　古恋　ほ如くちるとも我ハ忘さらじ。　同雑　ま如くあち　云ふる散類るし神のきぞきに。

朝々時令（アサナサナ）　アサナサナ　古俳諧までの　あさなさな呼ぶ者　まだ長をおもふくよ　同恋　ゆさなくくるハ　はざまのとも。

履波時令（ハ）　今則絶類（イマハタエ）　古恋　今ハゐゆとや吹風の　かいて我ふかく忘れ　同恋　おもふ　よ

履毛時令（モ）　一日無類（ヒトヒモナシ）　古恋　ちハやぶる　かもし部ろのゆふ　ござを　一日も　君を　かきぬ日ハなし

履尓時令（ニ）　今更拂類（イマサラニ）　古恋　そらりえと行まうり　床を今さらにちらりぐ　神や　住ろ紀なむ。　同我名　かく升庭日のまれなる人を

履弖時令（テ）　不絶仕類（タエズツカヘテ）　古大秋みの　いま実をふちり　咲きして　君よつかへむ　代よさでを　同恋　今ハとてりへむこそのそ

還上時令　万傳以（マデ）拾遺恋　る寺よ　ほどハ重なるにありぬとも　続きりふりのめぐ　行ふまでよ

学而学而時習之　里仁朝聞道夕死可矣　子罕文王既没　泰伯　嘗從事於斯矣　高祖紀適從旁舎来　張儀傳日夜悪張儀来邑

處在形容云（トコロノサマコトバ）　こハ処在よあづうる　こなた　かなた　このもりのもと　よそそこ　そうち　などくし。

履尓処在（ニ）　於此方経（コナタニ）古恋　青柳山おもにはつゝ行ふ坂の実れ　己如きに手を　ふり　うち。　同離別　こなたかなたに立ちまよ　みちハかくぐとりるともこの　かくぐなども如を流て世くさし。

履弖処在（テ）　於他処恋類（ヨソニコヒ）　古恋　よそにありてこひれバ　くるし。　同恋　充ぐのとしてかるこそハ。

省用云格　万傳下省用言類　千載集までハ一よ二[illegible]ざれど[illegible]
のところせきまで　上へうつらざるバ下の
用云をそぶるゝ是らハその[illegible]用云を添てきく云ゝ。
學而有朋自遠方來
商量形容言　こハ ふかく あさく とほく ちかく はやく おそく たかく ひきく [illegible]
そつき こゝら いくそばく 山高き 風さむき など量る辞ぞ。
深商量　深添類 古[illegible]ハ ふかく添てきむ。同[illegible]ふかく思ひし
近商量　近植類 古春[illegible]ちかく 梅の花[illegible]人の[illegible]あやまれん也。同[illegible]秋 ちかう [illegible]とも。
幾許商量　幾許思類 古[illegible]名。花おほくに[illegible]ちらし[illegible]同春[illegible]こゝら鳴らん
履尔商量　僅見類 古[illegible]君ハも。同序[illegible]ひとり[illegible]とも。
陽貨 多識於鳥獸草木之名。呂不韋傳 乃引與坐 深語　滑稽傳 徴
聞鄉澤　上林賦 牢落陸離 爛曼遠遷　張馮傳 上大怒曰
貞數形容云　こハ 一 ふたつ みつ よつ いつゝ [illegible]ひとつ[illegible]
一度貞數　一度來經 古羇旅 ひとたび[illegible]きませ[illegible]同秋。
[illegible]をに[illegible]びおもふ とも。

履毛貞數　屢見類 古雜[illegible]浪のまにまに[illegible]
先進 屢空　学而 吾日三省吾身　里仁 一則以喜 一則以懼　平準
書 於是弘羊賜爵左庶長黄金再百斤焉　趙世家 欲兩王之
次第形容云　こハ まづ まで つひに つひハ などゝ　まざきハ古[illegible]
[illegible]とあり。
先次第　先咲類 古[illegible]同[illegible]
遂次第　遂往類 古哀傷[illegible]同[illegible]
微子 孰先傳焉 孰後倦焉　伍子胥傳 終不肯告其戸處 遂自言石乞
會有形容云　こハ うべ [illegible] まさしく [illegible]ハエツクラムまで會有云　同中延須々美伎とも　記中 得作
宜會有　宜謂類 古秋[illegible]漢籍二度讀む字多くハ會有不有同等云。
履也會有　有理哉被寢覺類 新古秋[illegible]
里仁 遊必有方　學而 吾必謂之學矣　述而 語吾將問之　張儀傳
我顧且盜而城　楚世家 祇取辱耳　袁盎傳 適爲守盎校尉司馬。

不有形容云　こハいさ・いなや・えぞ・えこそ・いはじ・踏て・あへぞ・とひこで　などいふ。俗語にてイヤまさトンドなどいふさぐひえ。

不不有　不知類　古　美人ハいさ心も知らずふるさとハ花ぞむかしの香ににほひける。

未不有　未来類　万四　清らぬまいまだも来ぬがちかぢめあらぶる君を見るが如しさ、称その上よなき未なきハ流て安くえ。

不得不有　不得渡類　古　恋　思へども人目つゝみの高けれバ川と見ながらえこそ渡らね

還上不有　無尓類　古　美　山吹ハあやなな咲きそ花見んと植ゑけん人のこよひさおく之よし。就出見れとハあしよ意も不在の格之。

不傳類　古　恋　いつへよなるとふらるゝむあなひしきごとに駕　見すれせで上

里仁　未足與議也。高祖紀　吾不敢當帝位　項羽紀　齊遂不肯發兵助楚。商君傳　僕弗敢願也。

顯示形容云　こハ見よとさく・見よとてしもなどいふ詞となりしまさ漢語の粤などもこの形容云なるべし。

履登顯示　見登咲類　古　哀傷　なきみんと花さきるらん　同　秋　よるさへ見よと　とてしもを用らず。記上　神於是有

微子　曰是魯孔丘與　曰是也　曰是知津矣。集韻　粤或作䙾　通作曰　孔氏尚書　曰若稽古　亦通作越　尚書　越君采史漢越皆作粤

勧奨形容云　こハあえて・おひて・なしまさべくなどのぬぐひえ。かねがねもぐしお似る辞すれどもこハかなの格なそ要須感動云なる。

肯勧奨　肯来類　後撰　君が代ハ鶴の郡よゆえてきまさまさじなきよれるがひぬなく。

強勧奨　強思類　古　恋　思ひぬまバおひて思へども人ぞの見ゆる

還上勧奨　賀志類　拾遺　いそぎがちふらハ淀ききらわかバ悩ましがてなう秋来れる之。にきてもみよがし上　このがしハ要須感動云なる。

倍久類　古　冬　花のいろハ雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく上

晉語　勸重耳趣行。文君　第毋會。刺客傳　時惶急劍堅　故不可立拔

同等形容云　こハ如のされどとのごとの・ごとく・がごとく・さこそなどいふ詞なり。まさ駕の・の

登同等　如鶯鳴類　古　恋　のさや鶯の鳴きならびむ　同意　くもりけの

乃同等　如霜置類　古　雜　なよ秋のよも起うへよ初霜のおきゐて　同意　君まさあしさの霜のおきて　いれど

同雜　むまをうれいまよりがありの世よりまじてきまり夕时の雪れありきるが絶えて、あのがおひハこの雪れぬくなむ流まれ

るといひけるをりにふれて見る君が心の常なきをしらば我やかれなん妻
よりねは行くしとなんへぞ。又万ゑ行先つちのとめにえつく
いひつぎてあり 古意秋ぎりのとぢにいでてとゆすに
同じまき後撰つくそ此ふ字より落るみなれる川云このみなれ
川乃下にハ同等形容云れのをそふきる、みなれ川のぬくまれ
さこ。のハめし獨立代名云なればゆゑに同等形容するもあるぞ。

左同等

左許曽見類 拾遺人をしれ花ハさこそあろらめ 金葉さてそハか
りの人ハ侘られ 左ハめし汎称代名云こ。
左毛許曽有類 古意うつゝわそさもてそ行らめ 拾遺さもこそ
八逢えんことしうきかゝめ
左叙奈登思類 千載あまりみなきぞなむうし此笑そぞとなりぬ
ぬうら行さより花りぬ。又和泉式部さぞや
先進回也視予猶父也予不得視猶子 倉公傳巳熱知以俗語ニ云
ウドといふをこの猶字如字等のさこ 孔子家東門有人其顙似
堯其項類皇陶其肩類子産然自要以下不及禹三寸纍纍若喪家之
狗 陳陟家等処ニ国可乎 始皇紀而天下響應

併合形容言 こハともにまべよまことにめろともになべてまどくし、

履尓併合 並来類 古秋我門ゝ稲おふせまの那くまべよねさかく風ゝ居ハ
きめそり

履豆併合 並替類 古意秋風のわきそ吹ぬるむさし野ハなべてくさ葉の色
か八ひとつ也
述而互郷難與言 憲問見其與先生並行也 始皇紀山東豪俊遂
並起而亡秦族矣 孟嘗君傳相與語 淮南傳拜遠治王

除去形容云 こハわきてすしてあとにすりあとにすりおにすぎし、

殊除去 殊実類古秋あ花の秋ハ露こそあとに重うらし 同意洗達より
ことにまさる我意

分除去 分立寄類古秋立び人の色花て立よりこのかハ秋むらぎ那くね
猗ちり為む
卿黨使々言唯謹爾 越家至其母及邑人盡哀之 唯朱公獨笑曰云ゝ

選取形容云 こハえらねばまどいふ辞ゝて俗語ゝてトテモナラ又イツソ
まどいそんずごとし漢字の寧ゝあさ彼そぞそ、

還上選取 奈良祢婆類 新後拾なぎうじよ久米此いそ橋とてもよをを渡りそ
つべき家をあらねば こハ我身あらねバイツソなぎ
うじよの言あり。まる古秋天の川浅瀬しら浪たどりつゝわさ
きを祢ぞあきぞ思まる。こハ祢君の下ゝ思ハ又ニとらふ辞
を添てまくまうそ、やゞて万八ゝ八ゝ妻をいかにも祢を見へハ
ぬゝ妻る此里よう免の色ゑつとよありされバいそうら哭らし。

魯鄒傳吾與富貴而詘於人寧貧賤而輕世肆志焉　酷吏傳寧見乳
虎無値寧成之怒

禁止形容云（イマシムルサマコトバ）　こハなやきそちたるをいかにゆめゆめなのりそやなどの辞に
して漢字に毋勿莫等をあてたり

戴奈禁止（ナ）

莫鳴類（ナナキソ）　古秋きぎなく鹿いたくなくきそ　同妻ごひそが声ハなにも
まさ山住ハいやおぼさ紀そ　万七妹がいふさ
りこが袖ふりん木のよりいでゝくる月に雲な隠そひき　同十七
ゑなりしとなこびこがせこ見らハ下の粉をそでかへり　拾遺家さ
いかれそとハ剣を雲隠て下をそでとといへり。それハそで手を袖り
てなありともいふべし。え浦集ハ、妻がもみたちなかくよりそ
とよめり。夫木角紹れバとてわ後ハたのみそこハひがことゝ
新拾ゆめなのりそやゝまりぞをるこハ上はゆめを治なり。

扇奈禁止（ナ）

勿語類（ナカタリソ）　なかたるな　古秋てんおちふきと人にかたるな　同意今さらに出べ
雑也毋以ナモチヰのゝ。同意にはゆめなにおゆかな
親子。弟莫可使王斉矣ナヨクヲタラシメソのゝ。顔淵非礼勿視非礼勿聴云々　高祖紀非

料度形容云（オシハカルサマコトバ）　こハ天うさハなどのさぐひにして、おしそうな辞之。

大氐料度（オホカタ）

大方帰類（オホカタカヘラン）　古離別人より先さかりとくに天うさハいきろしとい
ひらざかへりまむ。同雑天うさハ月をめでじ。

里仁蓋有之矣　季氏吾恐季孫之憂不在顓臾而在蕭牆之内也。
淮陰侯傳顧王策安所決耳。

疑問形容云（ウタガフサマコトバ）　こハ疑問代名云の何誰等の辞は如何にやかなどゝてなどの助辞をふ
くみて形容云と云まるを。万三あになりめやを見も疑問形容を。　後撰

歟疑問（ヤ）

涼歟登立寄類（スゞシヤトタチヨルノ）　六帖すゞしやなむとにさちよれバ
くやくとらん川夕されと。

何疑問（十二）

奈尓騰類（ナニサラスノ）　古雑なにか山びめに布さらすらむ　同意夜もしをなお　後撰
らいひれむ　同雑うまく紀をなすくつまむ　六帖なます　後撰
なふきん同じ。古序なふうハ雲を知とあざむく　新勅何それなおに思ひ初らん
兼さそ見らへし何おふらん　後撰なふとて人は何つと
新續古なふと嵐のとこそらふらん　後捨何しうえ人ハ
えつらん　古意何しうし人を思ひそめらん　後捨何しうえ人ハ
きてくむ　万二をなにしうも此方六句よろし紀君が紀家を忘
きすふや夕家を捜むき臨ふやかく形容云ハ、うら句をへぞて
し乳下に用云をかゝる心。御らよ先達の説又あきハ剣あしかれ
ふて切きくりかふやのやへうけて見べうにとらへるハくハ
しうらざるゝ。古意なすしうもひと見つくこれせ紀とでむらん
とまよめり。躬恒集ゆきやらぬんやすみぞこハ何そめきやら
ぬのさ。古離別かへる山何ぞハ有てこハとあらぬ又物らい
せ物語志らむら何ぞと人のとひし時。古意ほれ生のなふそ見

せばこハ難波よりいひかけたり。狭衣まどふさかに思ひなやま
る　古今まどかるに忘れてをせん　駿河歌安世加ね同じ。後
れまどてゆく雲かくるらむ　同まどてハ百まもそる名付ね
らん　風雅たがゆくへともまどやふきこぬ　古今まぞ花かく
後の何よう紀てめゆらん　新後まぞしぬ海の奥のうりがま
續古まぞやうく惑べバくるし　古今恋るしぬき思ひやまぞと
万四こぐらめかをよまりこざるらめ　新古何かそひ恋ていか
ならむ　古今みよれ山いかにまちみむ　万八いかよつぎきや
夫木後をもいかにいかにせん　拾遺いかふやいかよめんとも
蕊　古今いかぞうり人の玄の生嬉しうらまし　万二をいかさ
爰に思ひを達ろ　拾遺いかで家身を人ね忘らせん　同いかで
いかであやる心を。古秋山ろいかでかめみぢそめるむ　拾遺
いかでかと思ふ心のあるを紀ハ。夫木いかでをと思ふ心ハ。
古抄名いかぞさ紀ちる花と見ざらむ　新古いかバハるべき袖
の恋づくを。古秋いづらハ秋の色してふ殺ハ。後撰ふるさと
に君ハいづらとまちとそぞ　ゆふさ新古いつとき　とてか恋しか
るらんこハ時令よあづかる疑問形容云之。いつかいつしかまで
同じ。ゆふさ古今心をいづちやらバ　色をませむこハ処在にあづか
る疑問形容云之。いづこいづくまど同じ。ゆふさ新古いく紀ぐ里
空紀岸まへぞてきぬさハ負數よあづかる疑問形容云なり。

誰疑問

誰見類　万五　みさをしせりしいけをぬれ見ぎこの哉ハ志を守し
をむなしとハたまうらふ　後撰都よハたまをか君ハ思ひいづ
ろ　大和物語ぞかみ派もたれとゑりてか恋らむ。　古春たま
かハ妻流うらみそてたる　記下さまぞ大まへよまをそこれを
書紀よハさまかこのすおなまへよ又ををと為。催馬楽さまぞ
此中人よそてみかと乃かさちせらそうしとぶらひまくろや
色琢秋已がよされぞつまあらん　古雜ゐまをうもゑる人よを
ん　同春ゐれしかもとめて私ほる　同恋たまゆゑよみぶれん
と思ふ　六帖たれふより思ひみぶるし心ぞハ。古秋たがぬぎ
かもし着ぞか破ぞも。
八佾奚取於三家之堂。為政人焉廋哉　顔淵盍徹乎盍ハ何不之。
子路又何加焉　張儀傳儀何敢言儀寧渠能乎　魏豹何待吾哉。
刺客傳子將何欲　淮陰侯傳何為斬壯士。蒙恬傳何乃罪地脈哉
鄭家此與晉之里克何異　魏豹豈得與魏成子比也　張儀傳吾寧
不能言而富貴子。黥布傳何其拔興之暴也　始皇紀豈世〻賢哉

比較形容云　こハよりをくより近くよりちくよりみじかくよりとくよりる
そくなぐ〻手物を比較する形容云之。

自先比較

自答先類　古秋おや紀の家あやか紀りハくさしてむ花よりさ紀
とならぬ家身を。同恋するよりさきにゑきえじめつる

同意つゝきくよりまづおもえじとて
爲政先行其言而後從之　をしきもまづもさうもいとくもまこともいすゞもあくたく

通用形容言毛類

もそれやも　まさしくも　志ましくも
美類　古意とひがるゝて　ちぢりぬ竜ゝ　まこおよしをゐく　後撰又万十まつよゝるゝ　同歌そのよ　又万いぶ
ひゝとゝをしゝと。又袖のひゝれをめさゝて　又山さゝ風
そやゝ　又風をいさゝ浪をそやゝ足らのみみおせ山のさゝ
後撰為ぞうはきるくまこや　古意けさゝてそ袖八ひづらめ
まさ万十七たとゑゝとりふ辞あり。此類の辞ょたまとゝり西や
そくゐてそれてまさかあをかぐろしがやそしおどりふもあり。
られまさ形容玄の属と志るべし。まさ後撰神無月ありゝふら
ぞゝさゞめみきさのゝ八もゝ反ゝまてやがてりのきおるべ
し降ましふ降ましゝ万十八ゐゝゝゐおれもともあり徴をべし。
カロ利類カリ　万十二。ゝ紀もこふ意をべまか里むをやきこ八加利反
キ知てそべおきなとりふさと字のゝ清てよむべし。
志類シ　万一家し志ぬぞゆ　ありいゐしかりねゆ　三子みぶしを
ゞら　四神しまさん　六ゝべし神代ゆさぶめゆらしを
味が袖しおまるゆるかも　ふぜ記しまさる　ヒおのゝしゝ思へ
ぞ　大家人しうさりさゝしを　八おくゞのゝしまるくまし

十今しちるらん　十二まそゝしおゝび　卅しりゝそも　十三孫
のこしなりゆ　十七清きかくしなん　十八あひし見ゑてば
十九轄し志ぬぞゆ　二十今しとゝしも　昔此人しおもおゆる
かゞ　古意君こふる　ゑゝぶしなくば　又万二ゝが名しまし紀
三四しみがなし　川しさやけし　まさ助辞ま志をつきくる八
万四妻なしみゆる　思ふぬし家身八やせぬ　ゝまくあし袖さへ
ぬきぬ　六ちゝむ時ましおてたむるん　まちぬしゆらん　八
妻ゐしゝつゝ　此ゐるゐゝゐるし　古妻ゐくゝしとまる為
あらば　同離別志られてきまし此の　ゝゝし　ゝゝば此上のゆ
しは色去る　万十二見ふゐしゐよりゐしりば此外のゐしは色
去る　古離別見べき君としゝゝれまさば　後撰人のうへのことゞ
くしいへぞ志らぬ卯　万五君をしまさむ　七かきつむるをし
多にとしろを　十九名をしたつべし　古妻色をしそれば物思
ひまなし　万十九かひてしゆくも　古春深くそ色てしをりき
れぞ　まさちゝでしと喚る物ましば。まさゐをふよし　ゐさま
ましおぞ八呼格のよふ志を添ふり。やしも同じ。まさ志を帝達
くる八、万四今しくし　九かくのこしらひし後見ば　十九忍見
しやゝて　志とをしこを重屋する八、万十五命をしゐすさくし江
らば　古戦猿がし衣きつしまれまし嘉しめれば　そろゞしきぬる
猿をしぞ思ゆ　まさ志ふ助辞を添さる八、古意今志ゐりと色びゐ

しわを　万七　梶しかれかへさん　古意なもれ志らせん　万一公
そこばにそこにつれども　古意きさこしも　万七雲ふりしをつれ
や　古意ふこゝろしも　万十八およびをひも何やに雨のとぶ
古友本宿をしも　同意秋風ハ身をしみて志もふかなくに　後撰
かゝまとてしもまさるでぞやきん　千尋る室松ふと志きハか
いまそめきん　志おもをききたるハ拾遺とき志もあき秋志も人
のこゝろしれバ　万四旅のこゝしぞかく　八まく日しぞおもき
古醜猿形をしぞ思ふ　猿をしぞ思ふ　同意あふゆかし人を　同
妻子ぬれしかも　同意子すりかも　同大狄かふこしこそ子まをか
きてたのしきを〔へめ〕　いせ物語うべしこそきみがみもしとた
てまつりなき
ゆきさへこしまらしめぐれこの志のめぐひの形容云ゑ.
ましハシカシゑらしハランカシゑ　金葉ものとりに[illegible]と思へ
山ざとはそまなかのこ志る人もなし上こハ上へかへる例ゑ.
古秋おく山のいそがきめみぢちりぬべしてるひのひかりみる
時なくて　同春なふこぞハあすハ雪とぞふりぬまじきえずハ
ねとも花と見まじや　よしの下にハうつろぞ又をしやとらねども
形容云の格ゑ.　るや侍集さか思ふを地かまし　いふる　をしゆく
しらのどなき春のそなかる　古冬みそらしのゝ山の白雲つある
らしあるさとさびくなりぬるゑ

シク
久類　志くとりよハ.万七ひもひもひ志くつま恋らえむ　応神紀祢
しくをしぞ　万七今志くハ見めやと思ひし　千はひ志く
いハこ志くも志かくつぐる君かも　四思へり志くし　おもか
げよ見め　廃帝紀の宣命今之紀乃間方比之紀もこの志くと
同じ辞なるべしといへり.　あくとりよハ雨ひしきくこひしき
くるしきくやまきくいさきくうるしきくいしろきく弥さきく
うれしきくつしきくなど万葉にみゆ.　古雑まえなれどもふぞ
ハよきくかるかやのみだれてあれどわしきくめかし　後撰を
しきくかなし　大和物語ながきくれ　古雑世中ハうきくにあ
きぬなど　まさいそくうよハくみらくさならくなどもいへり.
万十いまぞまうでバよのあけぬらく　古意みらくさなくさくこ
ふらくのおそれき　おさなくべくなどもいへり　国基集をちの堂
でふハ人のすゑまく　古墨滅人のさるべくまかこひ絶やん.
同離別雪みるべくもあらぬ我身ハ.
ゲシ
分類　古春わさらバをしげりけるもみぢ　桜図　後撰子ころありけれ
みしぬなを.　雑しげきを俗語にハカタジケナシといふ.
ダニ
太尔類　古春み山にハ松の雪だにきえなくに　同意おやめざに
こぬ人まちむ
サヘ
左閑類　古意身さへながるときかバ雨のまむ.　同秋ゆきかふ人
の袖さへぞてる

須良類 曽丹集 とけてすゝめるわどもなき身り命をねざめがちふてありけるころかな。

乃美類 古今 人しれぬ思ひのみこそわびしけれ　やまと家歌きをさゝれなむ

余利類 古今 いまこんといひてはかりしあしたよりかなしかる

万傳類 古雑 みやこまで音にきかよへるかくこそハ　同哀いそわとをりてこゑのむまでは下まハ日世と詞を添へし

加良類 古雑 我身から うき世中となげきつく　同秋みくらしに秋の草木の色をとられバ　源氏こうどの娘子あはれんから

に 哀歌 女藁の谷のふところにわかうしにその花いやしかるべく

古今 いつそりとわかまりつゝ　同哀ひつりしや

由恵類 古今 人めゆゑのちにあふひのとがけくハ　おきゆきて

いきめるものゆゑ

那武類 古物名 さすとよりそされて玉紙つくよめやこれおなむそ

れとうつゝえんかし。

基登類 古今 冬ふきバ木ごとに花ぞさきなれる　同恋ふくお

とにねおもひぞつく

毛豆類 古序 そちすぐのよごりにしすめ紐をて　拾遺組まてち

らんざるこそをしからめ。

志豆類 古雑 ハ重むぐらして門させりて八　伊勢物語姫よりし

てもそひしひかをとりして。新古宿ハ手くりて

加保類 後撰 字ありがほにこひしきやなぞ。金葉おりしそしあ

るじがわりて梅がえれ君ごに我そそのかさりせさ

奈賀良類 古秋 さしてむ人ハ枝ながらみよ　續後撰つらきなが

られさのこまるべきこハ係云まいひすしたるに。

賀豆類 古雑 などか我身のいでがてにする　同哀すぎがてまの

こ人のらうしん　近昔語行がての八係云の格に。

賀豆良類 古今 ぬきろへがてらよるこそハきめ　後撰こぬ人の

うさゝがてらいをろげりき

婆加利類 古今 忘ぬるか命いきかやきるところこゝ玉のをバか

ア之むどいそなむ。

万ゝ類 後撰 時ほうぼ序か雪うともえやすでまかきねのまくにさ

きるうのそな。古雑 あしびの山のまにくかられなむ

都ゝ類 古秋 おでとに秋ぞ出し紀あみぢつゝうつろひゆくを照

ひと居へバ。同雑流くそ序のこのみとごとま空ぞよる

ちるのとやまのうけをこひ川にこハ上へかへりし。同春をち

がそみたてるやいげこみそし時々吉野の山雪ハふりつゝこ

ハ下ま春足見エ又者ラといへ詞をふくめり。餘情てとりかハ

皆えこまき子形容云のまぎれゑ。

○接続詞(ツヅケコトバ)第七　接続詞ハ、切たる辞の下にかきて上下を連ねつゞくる辞也。されバ接続詞よりあへバ定まれる結辞も格を要せず、下につゞくることあり。これ接続詞の格也。是に合連、分裂、含説、違戻、原因、議定、設令、選取、除去、逮及、敢保、説明の十二等あり。

合連接続詞(アハスルツヅケコトバ)　こハ上下をあハせつらぬる也。[と][も][とも][も][にも]などの辞也。むかし家持が風[に]座の月影式知ハ與とよめり。

登合連(ト)

登類(トノ)　古秋、むぐらしの鳴つるなべに夕日さすかげぬ[と]思ふハ山の陰にぞ有ける。後拾、かなしくぞ思ひ[と]わかれども　後撰、ともかくも見ぬ[と]すがる人の是らハ定まれる格にて切たる語をつゞくると也。古今、おもしき人のあはれとぞ思ふ。こハ辞と流て[ランと]思ひしハ、流る[と]聞えが[と]ことをつゞくると也。古秋、秋のよの露をハ露[と]云ひながらこハ体言を下につゞくると也。ハトイへの約なり。古秋、木こりのかへのちり[と]までの[て]へて、又、同秋、あき風の吹[と]吹ぬるむさしのハ、これらおなじ合連の一つの格也。後撰、みるめかることぞかたふくにあ[と]きくこハぞの辞の結び辞の[き]を[ぞ]に転じて下へつゞくると也。又同志のかり先に行かでとまりし袂をぞ露やときし[と]人のこがむる。新古、影とめる露の身ぞ秋をかきて時ぞ捨あれ[と]さやけかりける是らハ二重にすぐる帝尓乎波をつゞくると也。

すべてぬる是二重にすぐるのみぞる帝尓乎波又ハ、うれしとぞ[と]とてつづくる格也。新古、まがれ木[と]立去らぬ[と]やく志ぞ[と]是ハ與とる也。古書、くる[と]わく[と]こハとてのことのと也。

尓合連(ニ)

登毛類(トモ)　古雑、かく思ふ又ハ門させり[と]も見えなくに。書紀神[とも]誤る。万十九、いきるともあるハ是の誤り。

尓類(テ)　後撰、花と[尓]きこえて、後拾、かなしれ、此類多し。又後撰、逢ひてがなぐさむやとぞ思ひし[と]云々。

尓毛類(ニモ)　古序、をとこ山のむかし思ひいでて、をみなべしの一ときをくねる[尓も]あをひいでてぞなぐさめける。

毛合連(モ)

毛類(モノ)　古冬、雪ふれバ冬ごもりせる草[も]木[も]春に知られぬ花ぞさかれる。同序、是ハ君[も]人[も]身をあはせたりと云ふなるべし。

還上合連

登類(トノ)　古雑、かくみ山いざ立よりて見てゆかむ春へめぐるかハかいやしぬる[と]まさきりてうさくん老りくれや[と]

分裂接続詞(ワカルヽツヅケコトバ)　こハ上下を分つ義あるや[と]そもそも[と]ある[ハ]そも[く]などくさ。文秦歟漢歟[料]近代歟の料字にてわかるべし。

為政、吾[與]回言終日、学而[不亦]陳丞家、嗟乎使平得宰天下[亦]如是肉矣　小説也字も亦字も同じ。

又分裂(マタ)

万多類(マタノ)　古戦場　古序[又]春これあしくふ色のちる秋の夕暮にこのそれかつるをきゝて　同じうてまがうてまさ　又ハ合き也。

将分裂

波多類後撰、秋風のふきはさすがにわびしきぞ[そらさ]よのおくわかと思ふなるらん。新勅[さるさや]こよひも我ひとりねん。

或分裂

阿留波類古序、[行る]ハこしおくふかくこれ給ふ見ゆる雪と涙とをまなぶべき。

柳分裂

曽毛曽毛類古序、[そもそも]これさるなりけるものかうのうきふもかくぞあるべき。

述而、若聖與仁則吾豈敢[抑]為之不厭誨人不倦則可謂云爾已矣。孟嘗君傳、馮先生甚貧猶有一劔耳[又]蒯緱。左傳昭八[抑]臣[又]聞之。

舎説接續云

●ハ上を捨て下を説く[雖とも][あらひ]あるくもさて云とも又清むと濁るとありこくハ清むもさして未然のともあり。

登毛舎説

登毛類古雜、住吉と云ハつぐ[とも]ながるそふ人わきまへなふと云之。新古、人をまつちの山まり[とは]とはとおれ立ぬ。

縦舎説

多登比類古序、くちおくなりかさまどなれのこいやれるかれ[あとひ]時うつりてきさりきこのびかねしびおふ[とも]。

還上舎説

登毛類古秋、萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてをゆかんさよハふく[とも]。

子罕、拜下礼也今拜乎上泰也[雖]違衆吾從下。項羽紀[縱]江東父兄憐而王我我何面目見之[縱]彼不言籍獨不愧於心乎[籍使]も同じ。

違戻接續云

こハ上よさがひもとる[ぞ][ども]すべいふ辭まで濁りてよむ既然のかぎり也。

土違戻

礼土類古序詠式、これハ隠れたる処なんなきに[ちまど]そら光のそへなと同じやうなれバ妙しき色をかへくなるる隔て。同表ぬれバよいひをかいぬ[志か]ハあまどもをしかれバ粉居ひあまり。玉勝ちぎりもらし君こそとハぞあまりぬ[起ど]こハ定まれる格ゆて切れたる語をつゞくる格之。同恋りとぞよ揚[にたつ]れどさくらぞなこハるをれよ揚るる格之。

免土類古表さも思も同じむつ[にさくらめど]手婦る人ぞ行くこまやかなることハんをめよ揚じるる格之。

志加土類古雜つひよゆくをとハかね[て]きく[志かど]この志かハこその結びの志かと一つなり。

計土類万十五[ずくれ]大路ハゆき[よ多ど]五又十七[をりきど]こハまれどのれをそぶきるるきいえ。

土毛違戻

礼土毛類古序、式ふ行ふつちのるきそじま重きる時よりいできになり[志か行きども]世よ流さりるちとハ云。同雜詞かきやうふのこまりゆきんなり[けりなれども]流らげするきしきまへしてなく。

祢土毛類後拾、伝法する法の末にこぞ[あらぱども]

志加土毛類古恋、祢よおきて[ひ]ちに[志かども]

免土毛類古物名、花の木よ[行く]ざらめども

計土毛類万四、又十七[とみきど][も]けどく同じ。

還上違戾

祢土類（ネドノ）古秋。用ゐれバ祢どふりのまそかありなれ巳がミゑとつの秋又ハあら祢ど上

礼土毛類（レドモノ）後撰。ヒ留千鳥がひまうりな宮にも斉き人のおもより ハ斉紀ろうれども上

季氏。遠人不服而不能來也云々。石張傳。不疑狀貌甚美然獨無奈其善盜嫂何也。礼記。雖然吾君老矣。

原因接續云（ヨルツヅケコトバ）こハ故字のうれなどゝ。曲礼。故君子式黄髮。註。發句言故明此衆篇雜辭也。疏。連上至下所以有故。

故原因

加礼類（カレノ）記中。註。其河謂佐草河者。於其河邊山由理草多在故取其山由理草之名號佐草河也。山由理草之本名云佐草也。子罕。吾不試故藝。游俠傳。解冒因求出関。先進。其言不讓是故哂之。呉王傳。呉王由此稍失藩臣之礼。河渠書。於是卒塞瓠子。

議定接續云（サダムルツヅケコトバ）こハ所説をさだむるさらバ志うれバなどゝ。此バヌ未色と未来との二つあり。志うれバて未色之さらげて未来之。

良婆議定

左良婆類（サラバノ）古雜。ぬ一やあ色とへど志らむいそ形くまさらバなべてやおハ色と思ふむ。そべてかさよ新川まらより変さるぞハこなこのさらバと同格ふして。未来の事をうけていふ議定接續之。詞さらバありなバなども同じ。

志加婆類（シカバノ）古慈。ゆろうしも冥にあらぞ近うり紀。こバ色去格のしを受ゝるふて色去とあるこ。宛りうバてしうバとも。

万志加婆類（マシカバノ）古慈。人志色ぞ見えなましかぞ巳びつくもなき名ぞとゞにいゑまし。ましをこハ上をうけしかもとつゞきて下ふまさましといへり。これぞ斉ハち接續云此例と志るべし。すべてこのかぞらぞ及てぞせぞのぞハ未来格のぞふて。これら此ゆふハおふくうすびましといふ之。古表色のごとよの為あらバ色て昔ハまさも悔りきなまし。こハあらバの例之。

加婆類（カバノ）万十四。思比とおかぞますかしよかぞこハ至からバ上からバとりふらむそぶうりくるきのなり。

弖婆議定

弖婆類（テバノ）古美。梅がまをを袖まうつしてとゞめてぞ妻ハまぐ殊かさゝなうまし。此てぞを渚てよむハ巳ろし。濁るべし。

世婆類（セバノ）古表。芸中に見えてはくろのなりりせぞ妻の心ハのどきからまし。このせバも上のてバと同じ格之。

万世婆類（マセバノ）後撰。愛路ふ兆宿かさ人のあらませぞ祢ざめに客ハそいふハくりうるンナリセバの約まりたるふてそゝう上のせバとはじさてこのてぞせぞませぞもこなたにすさ結ましといへり。おしまさとぢめに是らの辞あれバ上へかへりて結ましとゐふこしこまする接續云の格なるがゆゑ之。

礼婆議定

奈礼婆類（ナレバノ）古序。世中にある人ことわざ志げきものなれバかく様ヌけせてねへめきより見るバくこなた未色の議定之。

袮婆類　古秋　天の川浅瀬しら浪たどりつゝわたりはてねバ　又三　明ぞしにける。袮バの下に辞を添て心得べし。既にいへり。思ハ

還上議定

奈婆類　古恋　我のミや世を鶯となきなん人の心の花とちりなバ　後撰　思ひ出てとふ言の葉をたれ見まし身の白雲となりなバ

礼婆類　古恋　残りなく散ぞめでたき桜花ありて世中はてのうけれバ　同　下　忘草種とらましを逢ことのいとかく難き物としりせバ

八佾　然則管仲知礼乎。魯鄒傳　臣聞之者何則無因而至前也。李斯傳　何也則能罰之加焉必也。越承　由是觀之何處不爲福乎。

設令接續云　こハ事を設きて説く時の詞にて、漢字に若還設或儻などをあてたり。

若有設令　若留礼良婆類　古序　このうたもじあをやぎの糸たえず、松の葉のちりうせずして、まさきのかづらながくつたはり、鳥のあと久しくとゞまれらバ　こハ若不絶長久ニ留マル事有バの意也。本にもじの下にあるをやといふ四もじあるハ衍文なり。

千一有婆類　古雜　わくらバにとふ人あらバ須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ。

雍也　善爲我辭焉如有復我者則吾必在汶上矣。滑稽傳　若親有嚴客。張馮傳　今盜宗廟器而族之有如萬分之一假令愚民取長陵一杯土陛下何以加其法乎。伯夷傳　儻所謂天道是耶非耶。

選取接續云　こハえらびとるゆハよりハなどいふ。

自波選取　由波類　万八　むきける命にむかひ恋んゆハ君がは松のかたちあらふを。

與利波類　古秋　ひとりのミながむるよりハ女郎花我すむ宿にうゑて見ましを。

受波類　万二　かくバかり恋ひつゝあらずハ高山の岩根しまきて死なまし物を。試むにヨリハの意也。

還上選取　與利波類　後撰　まぢかくてつらきを見るハうけれどもうきハ物かハ恋しきよりハ　上下

微子　且而與其從辟人之士也豈若從辟世之士哉。

除去接續云　こハとりのぞくる意のよりほかによりハよりまさよりそなどいふ。

自外除去　與利外尓類　古秋　ひぐらしの鳴く山里の夕暮ハ風よりほかにとふ人もなし。同物名　ありのまゝよりそとまでにをつきよめや。こハヨリ外ニ離レテの意也。同恋　きゝそめしそれもヨリ外ニハ又の意也。同恋　よりほかに又しる人もなき。

自後除去　與利後波類　古雜　咲そめし時よりのちハうちはへて世ハ春なれや色のつねなる。

八佾。諡自旣灌而往者。鄭陸傳曰天地剖判。未始有也。平準書。輿利之臣自此始也。范蔡傳。先生之壽。從今以往者四十三歲。

遠及接續云 こハ下文にかゝりて、さて、かくて、すべて漢字の而にあたり。訓蒙題式ニ血脉貫通非此字不可とあるも、遠及のことなり。

弖遠及

弖類 古雑。清滋ましの吉かけるあて山かきになてきゆり。

を。子は石の宸するハ菱ほの、うはなりきて古意。起すせむ猿も正で来ほめしてハ妻のねとて詠すつ。同雑。見れ足てもえしくなりぬ。同意。考での山もみとを見てぞうへ思ゆし。新續古う紀すにも鞍りなてや到どすらん。古意。山より厚のいでこそくれ。

尓弖類 後撰。等此給ある部ハ昔みて已がなひとつのあらばあそうに。古雑。志うりとてそむかれなくに。同。長久うこのひるよるわかずけりめとてかへりこめを我やどの。後撰。彼うくちんなくこ意りて万三。面影みて見ゆとふ名を。

左弖類 後拾。いのでまんあとハ旻ほてかぎりてよさても違てふ名こそ哀しかれ。古意。さてめやう紀と世をこそろこむ。

加久弖類 古序。かくてぞ花をめでて鳥をうらやミ云々。

還上遠及

弖類 上 古褒。代是にゑひ詠しぬ番。櫻ちり此まがひ外家路忘れみてとて、かしてみしてより上へかへる例こ。

學而。學而時習之。高祖紀。始大人常以云々今云々。五宗系。及憲王病甚云々及王薨云々。雍也。文質彬々。然後君子。

敢保接續云 こハこひしくハ、なまじくハ、詠がハくハ、すべくもまよ詠がふたあ。辞なり。このくハの下ぶ。求一縫格の附よきバ清てよむでし。

請敢保

、許志久波類 古雑。已がいまハみ且此山乎ふ恋しくハとふもひきませ秋ふそ杉門この恋しくハてふ辞ハコフラクハといふ。されヤ。ぼ、我庵ハ三輪ノ山本ナリ。請ラクハ訪ヒ来レとい常さん。コヒシイナラバ也りふさみハあらば。

顏淵。請事斯語矣。韓𠂢事急。願公雖病爲一宿之行。

說明接續云 こハ上文の義を說明をとハ、そまハち、毎とへバ、いはゞ、すべく也。

登波說明

登波類 古序。あさてつる主見とハあ絶ほかみこれめあり。

趣說明

須奈波知類 古序。その花うふちうきとりまその名きこえける人也。そまハち僧正遍昭ハ云々。

譬說明

多登閉波類 古序。そまハち僧正遍昭ハ云々。毎とへバ恵まか書うをうあをえてけるづう出色をうごうんがぬし。

曰說明

伊波婆 古序。ぬん鳥れやをそぎでハ詞ハあくみすてそのさま身におそぞいそぶおき人のよきうぬきつうんがおとし。

還上説明　登波類　古状ちハやぶる神世もきかず竜田川からくれなゐに
水くゝるとハ　同雑にまれて八千とせのしぞ思ふおもひき
やなるをかくして君をみむとは　又業平朝臣の歌　あだにちるかひさやふ
ちのこゝろを得どもおくぬき川瀬にて流なんとこのとハと
ハのまゝ、
八佾　周人以栗曰使民戰栗、爲政　爲政以德譬如北辰居其所而衆
星共之、南越傳成敗之轉譬若糾墨、高祖紀其以下兵於諸侯譬
猶居高屋之上建瓴水也、

接續言餘論登受連体言類　すべて疑問法のやの上と、接續言のとの上と八切れる辭よりうけて、ゆりやすりやきゆやきこゆやありし、すしとあくとの川とく様なりのが定格也、さるうちに此格をそづきて、續後拾遺にもとも哉にあくるとききけど明るすどよあるハ古今集夜に唱一つあるあくるまのく絶とあるなどをとりてよめる格にて、また獨立代名言此のはじめて本事を本意に委しき格とはじ漢文にてもこれに似たる格多くあり、左傳の裏が二十五年の文を韓詩外傳にかすを左傳に委して截略して記をる類也、すこし疑問法のかれ上ハ連体言よりうけてあるがなきがきゆるかきこゆるかとりのが定格也、けすハ先達も既にいへり。

○指示言（サシコトバ）ハ指示言ハ、の外をよりなどりにて、所在時刻なくに関りなきことをさし示し及辭をいふ也、の外をより等ハ漢字体言此助辭也、然るに今わかちて指示言乃品と定むるの、漢語にも六格の名ま於乎于等の助辭ありて、此方の仁をより等にあたり、印度の八轉声此うち此方の外に當る辭にも爲声と依声との二つをわかち、西洋の語法にもいはゆる性言と云辭より外に上言と云辭あるがぬし、今かれ爲声依声の差別をいそぐ、古そ契詞仁和のみかどのみこ外ちハし帰しける時に法をその至その契に志ろし浮をさえ外つくまりなるを見てうの法をぞ外かりてよめる、是に外てふ辭五つあり、此上此三つハ二テの意にて依声也、下の二つハ二ナスの意にて爲声也、されバ所为格のにハ爲声とも云べく、指示言此にハ依声とも云ふべくなん、漢字の于と於も相類していさゝかことなる故ありて盧允武が説に、于是指那事物或地名之類而云、故著一于字以指定之、與於字相類、微有軽重之別、于比於意略重、といへるにてさと見べし、やまとにといふ爲ことをとりかことあり、それハ仁徳紀秋に、おほさくにあふやをとめをみちとへバ、万葉にあらちの此母を於おきて、古今離別詞におほかて人をとうれたる時によめるあそびえくり、又をとりふべきことをよりとりふことあり、古事記上、此時箸從其河流下、姓氏録、于時青菜葉自図辺川流下、継体紀、えつせのかそゆ

まがれける。万葉従此鳴度古今来下伺山川より苍の流きけるを
よみたる。源氏次磨たきより舟ぞきのうらひのてしまてこぎゆく
などいへる是らのよりハ今世の語ならバからをといふべし。漢籍よ
みにハよむ於字を或ハをとよみあてゝよむもあてゝよむも叶
ことぞ是等れ子細あるが為よ。この指示云の品をとるべし。

所生指示云（ノトイフサレコトバ） こハのあたりのそらのうへがきさなどいふ辞に。古物名義がごとく まりし通例なりきが。こハ春霞の中にといふことに。

乃所生（ノ） 之上類（ノウヘノ） 古志う紀等此うへをき ぐきるふちさきや 之上類（ガウヘ） 古今ぬがうへ などもありしを。

公治長縲絏之中 李氏蕭牆之内 滑稽傳賜酒大王之前 魯鄒
傳上書而死於年勝公孫詭之間 李斯傳吏舍厠中鼠

所與指示云（ニトイフサレコトバ） こハ志らぬまに池の中にや道なりにて風のうへよ壁べよりと へとよなどのまにけよ等に。

尒所與（ニ） 於年内類（トシノウチニ） 古春年のうちに春ハ来にけり一とせ歌とぞとやいそ とやいそむ。

公治長乗桴浮于海 八佾八佾舞於庭 日者傳居三日宋忠見賈
誼於殿門外 平準書吾有羊上林中

所役指示云（ヲトイフサレコトバ） こハちりはをかきそてむねをハほのうへをすどのまをうちを うへをとえ。

于所役（ヲ） 乎彼家邊類（カレイヘノアタリヲ） 古哀傷詞か此家のあたり離まかりゐるる。

微子喪致乎哀而止 儒林傳董仲舒不觀於舍園

所奪指示言（ヨリトイフサレコトバ） こハ松より流より霞の奥よりかくきぬの志さよりと取り此家 のうさよりあぐの野より志さよりのとぐひ之。

余利所奪（ヨリ） 自挿梅至見雪類（ウメヲサスヨリユキヲミルニイタル） 古序梅をかざすよりそじめて云ふ雪をみるにいたるまで

雍也自牖執其手曰 項羽紀從此道至吾軍不過二十里耳 袁盎
傳丞相從車上謝袁盎 晋家從樓上觀而笑之 張俤傳起於汶山
浮江以下 封禪書天子自帷中望見焉

所格と指示云とのけぢめを漢語にていはゞ。論語子入大廟の如
きハ所與格なり。鼓方叔入於河の如きハ所與指示云なり。
また史記日者傳見賈誼於殿門外とあるをも殿門外ニ於テ賈
誼ヲ見ルぞといふこと又書く時ハ。於字をとぶきて殿門外見賈誼と
やうに書く例も是らをハ。省字指示云の格とみるべし
また在字非字の如き。諸字此上頭にあるときハ。から從所與格
に從ふて在をハニアリ非をハニアラズぞとよむ例に。これハ在于非
于の于をとぶきる格に。それハ書呂刑に廢民罔有令政在于天下と
あるをんてさしとる所も但書在治忽などの在ハ察スルことにて是に。

○感動云才九　感動云ハ、すべてうれしきにつきても、かなしきにつきても、ふかく感ぜらる時のなげきの声「あな」「やよ」「はや」「なよ」等を、謦欬警蹕などし。漢語の歎声於乎嗚呼於戲噫嘻吁咨嗟等ことごとく、或ハ發語に噫字を置て下にかゝるを傷え、或ハ篇終に噫すること吁字等を置て前にあるを恨む。皆な悲哀歡喜驚駭示威祝賀要須讃美辱罵侮慢發笑招呼哭泣禁止忿怒歡厲恐怖教諭十七等あり。

悲哀感動云　こハ「あなう」「あなうや」「うたて」「あぢきなや」などすべてかなしむことなり。俗語「アヽ」「悲イ」、小說「咯々」「アヽ」え。

阿奈悲哀　阿奈憂類　古雜事「あはれ」よの中。なげかしきぬ　阿南悲類　今昔物語「あなかなし」と云讀きて。

奈悲哀　悲奈類　古事様の發きけバ「かなしき」を　拾遺「あぢきなや」　先進　噫天喪予　雍也　亡之命矣夫　魏武傳　嗚呼哀哉　云　嗚呼哀哉　禍所從來矣　韓盧傳「於戲悲夫」　韻會　刊謬正俗　嗚呼嘆辭也　或喜其美或傷其悲　末代文士轉爲体例　若哀誄祭文即爲嗚呼　封拜冊命即爲於戲　謂嗚呼爲哀傷　於戲爲歎美　妄爲穿鑿　按詩云　於乎小子未知臧否　豈非傷王不知善否乎　於乎前王不忘　非美先王之見称頌乎　書云　嗚呼曷歸　予懷之悲　此即哀傷之語　嗚呼威克厥愛允濟　此即褒美辭　但古文尚書悉爲於乎字矣

歡喜感動云　こハよろこぶ事「あなうれし」などえ。俗語「オヽ」「ウレシ」

阿奈歡喜　阿奈宇礼志類　源氏葛三条「うれしとあな」女房にあなうれしともうれし　やいそせさり。

驚駭感動云　驚駭感動云ハ發るくこゑ「あな」「こハいかにぞや」など、まさおどろしきことわ辭いあやより出る辭にといへり。あやハあなと同じ。後にハアラとりかえ。今ハヤレともいふ。ヤアも同じ。小說或音ヤイヤアえ。阿呀音アヽヤア。或呀音ヤイヤア。或喲音ヤイヨ。皆アリヤし。

阿也驚駭　阿也類　皇極紀　中大兄見子麻呂等畏入旋威使旋不進曰咄嗟　字彙吐嗟類　補咄通咄　又類聚名義抄にハ咄字を「ヤア」とよまをさり。

叙也驚駭　是何事叙也類　金葉「あさましや」「こハいかにすのさおぞさば」と、あさましやすむ發くてもと思ゆ。生きざりかり。古誹諧「雲それぬおさめのもの」「あさましや」人の心を見てこそやきめ。先達譯アマリケシカラヌキモノツヅレタアヤノよそり。

又虞書帝曰吁嚚訟可哉。註吁者嘆其不然之辭。吁字昔よりヨシノと又嵬瑰魁偶魁怪偉等ハ非人の物を驚嘆する声えと云。

示威感動云　こハたいひ川の事「をゝ」などの類え。俗語「イヤサ」ヽ

警蹕示威　乎志乎志類　枕古事日のかましれうさにおもてのまうるあしもとたうしまい新川など「をし」とうふ影きこゆ。

韓長孺傳　梁王父兄皆帝王所見者大故出稱蹕入言警

祝賀感動云 こハあなめでたきこゝろよりすゝみいはふ声なり。俗語アヽメデタイ 小説恭喜メデタシ〳〵 萬福ハ婦人の辞也。項羽紀楚軍皆呼萬歳

阿奈祝賀 阿奈尊類 催馬楽あなたふと けふのたふとさや

要須感動云 こハ称ふことのうるはしきがうへにうるはしくもあるよし也。俗語ドウガナ 酷吏傳嗟乎令冬月益展一月足吾事矣 要須のこゝろ

加要須 奴加類 万四 なさけれあるも 奴加奈類 古雑 とまりなきよ そなたもひぬらん 同八 おもふらハ 奴加毛類 万六 かのとこいそのたまもぬりも きこえこぬらも

賀要須 毛賀類 古今 これいなしながらの橋 志賀類 古今 歌かひがねをさや もが 同 ともにの心ぞが のはにかくぞふあまもなきあしが 後撰 いせ がこまりぬてしがな人もつむやと 古今 花もさえ 今まぬてし 毛賀奈類 古今 君が八千代よ逢よしもがな 万一 たにをがもな ここをとめふて 古今 歌人よもがもやあらつてやら ん 同雑 たうへそめのにもが 志賀奈類 金葉 秋なくて来よ なや 橋姫をがなハ誤也 なきてしがな 赤染 たまつ集とうれ恋まいりそしがな 古雑 み あ やまれくちあしえてしがな

賀称類 万三 はなん人をかくりつぐがな 同十二 里人もかくり 同八 かりがもきしまかきぬがに 同四 さんのまぬかんも ものがな 逢戸の夕陰草れ白露乃きぬがにとなるゆるかもこのが 称がにハがなのそらきする 辞にて、要須中の一格也。

也要須 婆也類 古今 まつしきなどの花をきくぞや 後拾 おもん人よ それぞや 又きくぞやなそのうまの花とぞ 也毛類 書紀 衣通姫とうへよ 礼也類 万六 なゝのはまやな 君まぬへやも おもんざらん 後拾 あきのほどるよあまや時なるど 一くもの中くうさそらん まこ新勅 しまあれや衣うつなる子に聞えやハべらん

讃美感動云 こハあないみじいやうに賞むる声也。俗語ホヽ、ウデキタ ウマイ〳〵

阿奈讃美 阿奈也須良伎類 駿河歌安奈也須良良 あなやまとやまと あなや まとらけ 祢利の手衣の袖手当て あなやまとらけ

哉也讃美 伊多幾主哉也類 漆家 うちのさきぬ かなや 歌ヘル者哉 音ノヨサヨイシン〳〵ト嘆ラレタリ。又イシクモ 又盛衰記 歌ノ 尭曰啓爾舜天之暦數在爾躬 雍也賢哉回也 刺 容傳嗟乎豫子之為智伯名既成矣 孔子家美哉水洋々乎

辱罵感動云 こハ人を辱しむる声也。小説鳥喝气イマ〳〵シイ 直娘賊クソ ヌスビトメ 賊骨頭ドロボウメ 又咄嗟ハ罵ル声

與辱罵　於礼與加也都與乾云をいとまめくうこの歌ぞかろ記。乾云よかれよ　かやかよ　なれがきてぞ家ハ図よ今川。

也辱罵　阿奈云也類　金葉あるそらぐろの君がかや　六帖あるわづらト　しく人のろ〜ろや　項羽紀嗟豎子不足與謀。

侮慢感動云　こハ人をあざける歌にし。古来志ろしよき袖をもぬるうらけりど　くさのうら等を定るべし。俗語シヤチヨコザイナ

也侮慢　阿々云也類でや　記中阿々音引志夜胡志夜此者嘲咲者也。古誹諧い　也ハ大幣まして。子路噫斗筲之人何足算也。

發笑感動云　笑聲哭聲ハ大氏笑国ミ子同じ。笑聲ハハヒフヘホカキクケコうと重ぬるに。小説呵々笑カラく笑ヿ嘻々的笑ヒイく笑ノ。

波發笑　波登笑類　栄花にもあ。又松うちわらひぬべばみな何となくぞ　とわらふと云うともある。源氏むく〜と笑ふハ口を閉て笑ふ鼻中ﾉ音之。宇治拾遺きやらくと笑ふ　又書紀あらくよ　すゞも笑ふ事えといへり。噱軒渠胡盧又哥ニ並ら亦笑声之。

召呼感動云　こハやよ又やよふ菌ふよゐいを　称唯のヲ〜いまもろものイナウ漢籍よみの并、も定まるべし。俗語ヨイヤイ　やしく式祝詞。

也召呼　戴也類　駿河欲也宇止者未尓。　履也類もがつらや伏見の里　大系やをさかの山へ逢

坂や　いせの海や　志き滑や大和　おしてるや雑波　後拾

鶯や　同ゆゐ志でや　古序雑波つふさくやけ出。同嘉将とく

ぎ次いやさ伊の。後拾いゝみちんへ子あやめくの真の目や

詞花未葉の春みあ里がさのよや　後撰世中いう紀身のまたる

けるもやハナリヤの義之。万十二己だねこや　同十六たんぽを

ちや　古来志ぞや人を。同雑いなや思いど。風雅子あ〜船

く花や君葉を見る程に。万十ずつ人我とくぎ次をやけぞやハ

ヨヤの義し。同十九ゆめよるな人や　後撰よせじものをや

新古中くなりや見らミな召呼　波也類や　記中みまきいりびこそ

感動云乃あぐひなり　同倭建命伝詞あづ

まえや　同古今その大刀そや　允恭紀弥雅人詞う嫁めとやみ

いそや　雄略紀仁賢紀ともあり。拾遺かへりみしとや

毛也類　記下ぬでゆらぐぞや　かきめともや　皇極紀いへも志ら

波りや　万二己まハをややをみこえくり。

加也類　玉葉にゝるべきと紀りやされバかきらてもわが涙みハ

あきぬよのそら。拾遺何とうやく花の盗ハ思えで。

古曽也類　拾遺ともてぞやえぬ人こふるやおもひもせ。

與召呼

履与類　拾遺まろがたねよいくよへぬらん。同衣をつゝてぞま

人のしらぬよ　後拾ともすれず今又かそらぞよ

毛与類　万一こともよ　同ふぐしもよ　五おちるのかゝらハ

しもよ　記上あそもよ　顕宗紀ぬでゆらぐもよなど。

奈召呼　奈東歌者礼奈天乎止ゝ乃部呂奈宇太止ゝ乃部延奈　万一。又奈ゝつゝしのぶ奈　同四。家ハこひん奈　拾遺。老にけるよ奈見え。

惠召呼　惠類　書紀に惠くゝ惠君すゝ何ゝねバ。十一。ゆハよし惠　吉惠や　万四。家ハさぶしけん惠

伊召呼　伊類　書紀きみのそくごい笛ふきのおる。續紀宣命の詞すも見え。万三。志ひいハまをせ。四。紀の案すい　とゞめてんかも。十二。あるゝ妹い　いぶゝし　みもん。吉らハもろ併云の下につけゝり。同三。おのをのちえじい妹とむすびてし。七。花すも川いゐる　歌き

つるかも。吉らハ用云の下につけゝり。いハやゝ通ふてやま同じ。梵語すも例あり。又ゆきそぐゝるをいゆきけゝりるともいへり。

乎召呼　乎類　記上。阿那迩夜志愛袁登古袁　又。夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐袁　万二。よきゝりふけゝし　おろを　三。七春日をかそげれ山の。十一。をとめらを袖ふる山の。用云を承るハ。十二十。も花らみくさにまハきみーを　又十。わぎくぎ夜とや　十五。いのちをし　十一。いまをりもあどあり。又十。舟こゝさせをとよぞへども。こハ俗語に渡セヨイといふま同じ。

以上の奈惠伊乎とまや通ひて召呼感動云に属せり。

刺客傳。乃於邑曰。其是吾弟與。嗟乎嚴仲子知吾矣。

哭泣感動云　哭家ハ大臣喉音三行の音を引て定めかくごとし。小説にも嗚咽々すゝ哽々ハ泣く云なり。

與ゝ哭泣　與ゝ與ゝ與ゝ類　六帖。君すよりよゝよゝよゝとよゝとねをのみぞなくよゝよゝよゝと。俗語コリヤヤカテシイの類。陽貨。女莓

禁止感動云　こハ人を制まれる云之。俗語則爲之ありもこの禁止のさえ。

莫囂禁止　阿奈加万類　おなをおまゐりる人をふえてわらふをおおりおく　とせいそれど。古訓皆あおりしがおし君も一時。

忿怒感動云　日噫嗚嗚敗而公事。いうる云之。俗語ヤオレ・ウヌ　孟子惡是何言也。前奏象漢王輟食吐哺罵

意礼忿怒　伊賀意礼類　記中伊賀此二字以音。所作仕奉於大殿内者意礼此二字以音。先入明白其將爲仕奉之状。

奮厲感動云　こハきゝもるさゝいざすゝいざすどゝ。俗語サア〱　子罕。沽之哉沽之哉我待賈者也。

佐々勸厲　不飽食佐ゝい　記中。神功皇后の歌阿佐受袁勢佐ゝ

伊邪勸厲　伊邪子等　記中。應神御製。伊邪古杼母ぬびるつみにひるつみ。古春。いざさくら家も吾なん。同東歌いざ云ましを。

恐怖感動云　こハおそるゝこゝろあまりにすどゝ之。俗語ヤレコワヤ　東語ヤ〱

阿也恐怖　阿也尓畏類　万葉すとゐ

教諭感動云（サトスナゲキコトバ）にハ切なるぞをそへていふ　そんぞ　これぞ　のたぐひ也
子張　噫云游過矣　大禹謨益曰　吁戒哉

叙教諭（ノベサトス）
叙類（ゾノ）　古雑大かさハ序をもめでじ　これぞこの　万十七序日よみ
叙類つ、妹まつらんぞ　十八はんおしさハ啼るらんぞ　後
撰たのめがことハ忍ぶらんやぞ　古恋ゆきのしゆきふ物思ふ
ころぞ　同秋名ふめでくをれるぞかりぞ　拾遺恋ゆ山ぞかし

通用感動云
加類（カノ）　古恋ゆまもぬかる妻の枘　加毛類（カモノ）古雑見よくれそかし紀む
かこハかなのさ也　津遣かもなきうきのさ也
又人の忘るべく我おもひ絶かも　万三老かハらぬ見ればかなし
きろかも
毛類（モノ）　古恋いや逢ざかる恋すかなしも　万五　鶯すくも　十　ちる
毛類づくらし也　五志かしきかし也
奈類（ナノ）　かなしな　つらしな　ちぎりきな　はずれども　かしな
なかへな　うべなく　後撰かのうき世の恨みつ避しな
千載おきもみなさぞな　むかしの契ぞと　まぎらはしきな
書くしすな　古今思のきハうつりにけりな　新勅人の心ぞう
れよきらしな

以上九品

詞葉の錦下巻

本居大人著　　中橋鶴峯校

○能主格（モスルサダマリ）第一　能主格ハ、うしとにあらぬ助辞なくして、すべて体言此類に並られ助辞を得れバ君位の辞となるこゝ能ハ其のなるやうにて君の如く所ハ其のなすべきやうにてなる臣にぬしなとへバ鳥とりふ体言に能格の助辞をつきて鳥ハとなる鳥ぞといへバ、その鳥といふ詞君位となりて、よく他の臣位の詞を使ふこゝをしまさ所格の助辞をつきて鳥をとなる鳥をといへバその鳥といふ詞臣位となりて他の君位の詞よりつかはるゝ也さればバ能格所格といふこゝさて上に能格のつく也あればバ下にかならずその結辞あり。こまなる民のごとし。これを君臣民の三法といふ。すべ上巻活用云九法の條にさとせるがめしうくて能主格をわかちて三等とし第一波毛第二叙乃也加第三許曽志子ごとくおのく結辞あり。

第一能主格
はもは此うしを第一能主格とす　結辞くきぞじつ畢ぬふむん
ゆるらしましちなつる　及使令法のよ疑問法のかな
んらんなん　てん等ハそのかなあじ　なりありけりせり　めりきり等
ハ其ふかなじ　おきてき等ハらしきふかなず　但流てゆくさのう

かりあり。使令疑問の二法ハ上巻活用言の條にのべたり。て
にをはといふことハ過去格のてと那格のにをとこの能格の
とをとりあはせていへるにて、これを合て六格三格の總名こととなえ
てさだめたるなり。

波受体言格（ハウケタイゲンカク）
妹波類（イモハ）記上 [伊毛波] 和須礼士よ のこゝぐし。受実体言格。 白波類（シラナミハ）風俗 かひが祢に [之呂支] [波] ゆきかゝや。受虚体言格。
此波類（コレハ）記上 そゝゆぎも [許礼ハ] ふさハしぞ。受代名言格。 晴波類（ハレハ）後撰 おきてゆかれし [そゝる] [ハ] うましし。受連体言格。
すべて能格の体言を受るまいとまこれ類こ。妹叙 白叙 此叙 晴叙
妹許曽 白許曽 此許曽 晴許曽などのごとし。

省波格
藤浪類（フヂナミハ）古今 我宿の池の [ふぢなみ] [円] 咲ぬれば [山郭公] [円] いつかき
なかん。是らハなみハを略ていふ之の格こ。

重波格
里波人波類（サトハヒトハ）古秋 [さとハ] あれて [人ハ] ふりにしやどなれや。この二
つのハの結び辞ハ、接續言と連体言とにて係ざうり。

波結辞格
久類（クハ）古今 おくする [ハ] なさ…まくきく [く] 須類（スハ）漢籍よみ 三家 [ハ] 雍ヲ以テ徹 [ス]
受類（ズハ）古今 うつゝには ひとめもらし [ハ] あらぬ [を] 慈類（ジハ）詞花 あやまれもとづ [ハ] くよ [し]
都類（ツハ）古今 [ハ] すてて [つ] …をぞよ もそらさし。 畢奴類（ヌハ）古今 ちりかふ花よ [ハ] など [ひぬ]

布類（フハ）金葉 あさかれさ [ハ] ひゝ てさしそ [ふ] 武類（ムハ）いせ物語 いありかほきたる での国を [ハ] …さの [む]
咋類（クハ）古離別 ちれおにく […と] [ハ] ちづねん 新古今 まくとも露 [ハ] をまぎ [ん] 同秋 …たの系 [ハ] まみぢちぬらん
由類（ユハ）拾遺 かきくの柳も [ハ] みゆ [ゆ] 留類（ルハ）後撰 三芳野のやま [ハ] ゆきふる [る]
利類（リハ）古誹諧 人まあもん月れ まきいほ [ハ] 思ひおきてもまち 里史 まやけをり [り] 金葉 苗代の [ハ] いまの井にまかり [ほり]
幾類（イクハ）後撰 かりこあかぬまた [ハ] うかりき [き] 現志類（ゲンシハ）後撰 秋ぎれぬ [ハ] うまし
万志類（マシハ）古春 そろそ [ハ] のどき うらまし [まし] 良志類（ラシハ）六帖 心のかみぢもいま [ハ] あるらし [らし]
加奈類（カナハ）古雜 かりくも [ハ] 老又 なる [かな] 都々類（ツツハ）古今 山まき [ハ] ふり [つゝ]
後拾 よもたぐふて [ハ] やま里の里 こハやまとといふをいひかきつるこ。新古今 うきこと [ハ] おもぞらのさとこハおもとい
ふをいひかきつるこ。すさ菅家万下をとめらが言うぎのうへ まふる雪 [ハ] 谷のまがめにいづれたが [へり] うつりむら君し
をよそにみる [ハ] ますま [まさ] 是らを変格ともいふハひがことこ。ハの
うへ里と結べる正格こ。

還上波格　我身波類　古離別よそにのみこひやわたらんしら山のゆきみるべくもあらぬ我身ハ　又添て心くるのハら還るも同じ。

波属合助辞尓波類　後撰ねのみそう紙こそぎみハせよ使令法也。　登波類　古哀傷山のゝすミ紙河りれとハみんよ同上。

乎波類　古離別わかれをハ山のさくらに似りをてん　互波類　古恋をでよるをあ

ハきいろそてみをそふぐのそのめくうちしげてハけをハてハの

さてすべて合助辞ハかろく接續云にある格也。

重合助辞格　花乎波君乎波類　古離別秋萩の花をそあにぬらせどもきみをハよしてをしとこそおもへ。

合助辞省波尓波類　係る菜咲ぐれハいづくの雪れうる社也。　登類　後撰我袖と秋の紅葉と八いづれまさりめり。

省結辞波格　梅花笠類　古雑ぬふてふ笠ハ梅の花がさナリすべてかくも結びたる省ハこゝな添て心得べし。又かくりを結びを省たるハ。記下めゆるいへつまかいへのあたり

洲りいの句又も。奈良ハ七重ナリ七堂がらん八重桜。

能主相重格　波與叙重　古秋叙きく時ぞ秋ハかなしき　波與古曾重　古春吾妻との之丁花ぞちるらめ

すべて才一能格ハ軽く、才二才三能格ハ重し。されバ軽重ある

まバ重きうこれ格まあるがよし。

能主失格　波誤作叙　萱方秋の夜をなかしとひぬといひけるそれおもふ人の心にざりけるかりけるハそおりける

波結辞失格　受誤作奴　風雅ありざりに人ハそろふんむづさにあふんのれく。ハのこさぬ

慈誤作受　拾遺まかられかまするハぬるくともむそびしるハ　今もうそうぞ

都誤作久留　新古かきつくるるそてある諸すれども君げん　人やありてこへ添て心得くまのか右上へ還る也。

過幾誤作ゐ志　風雅なきしかざりしふうきうしみハうつりそつゝく　一みて人のそえたるりのを　新拾ゝも同じ誤也。

毛受仲云格　青菜毛類　記下山がさままたる阿表那母きびくとくおもにつつ　えバ多ぬしくもあるう。もハ接續云するる辞也。

省毛格　岩乃加計道類　古雑よにふれバうさこそまされみよしの岩のかけみちふみなうしてむ。これハもを添て心得べき也。

重毛格　去年毛今年毛類　六帖をとぐしもこぞもことしもをとくひもはも

毛結辞格　久類　古秋山の木の葉もいろつそりゆく　受類　古秋ちそや知る神もきき

慈類　新後拾まさきつぬうらみもあらじ　都類　新古まがくしはまるかつ

畢奴歟 古雑 きこえてはひさしく ふりぬ　布歟 續千 こよひしも雲ゐの月

叱類 古秋 哀しくは見えてはしの 心ん 同恋 わが袂しきてん　由類 金葉 くもれば月の影ぞと 見えん

留歟 後撰 夕ぐれは松にもかゝる 袖ぞ 露ぞ　利歟 古夷 としへまされるする人も まちなり

過幾類 拾遺 たまらぬのを見る 此風もさむかりけり　現志類 古冬 ふるやどは雪ふりし 花ぞ散り

万志類 古恋 逢見てば恋しきこ とぞなかりし　良志歟 新古 思ひとくらし かゝみもこそ

加奈歟 古夷 くひをだすまもなき かなしきあるかな　都々類 古恋 そめぢつく もろみぢもふり

金葉 恋のぶれどかひをなぎさ 河よりおこは おしとりふいひ うきこ やまも風雅いろかへぬ松もなまり 古恋 変まいらし

こまさらざりけり 見え うちさし 記 きのうつりのむそびき 変格

とりふ説よまどふ 匪りけり

還上毛格

住憂加利志毛類 拾遺 くまバとくゆきてかゝらん おかしとの 室 ちのさ峠のそみかりしを

毛属合助辞

波毛歟 万ナ夜 おそふ そもいかつ 照らむ 古そはハ 恋 草のちかれ つにえてし 君ぞも 我葉中にありし

尓毛類 上にもしもにもなき 尓毛類 上ゟまも不をもえあ　登毛類 後撰 いづこ とても 夷の光 ハ立ちまくに

乎毛歟 下ならぬ　弖毛類 上ならぬ

重合助辞格 現尓毛夢尓毛類 新古　色乎毛香乎毛類 古春

合助辞省毛格 登毛類 後拾 いかにとくべし と国 ぬ君かな

省結辞毛格 三芳野山類 新古 花さかりてたゞ栄の戸をさして思ひ なのおくよ みよしのゝ山 なり

能主相重格 毛與叙重 古春 人の心ぞ風引ふ きかへぬ　毛與古曽重 古恋 人を思ふ心木 紫にあらバこそ風

のまにくちりもみぢれめこきらさまきよ此格にさがふこと 上よりくるがごとし

毛結辞失格 受誤作奴 新古 いかにまの橋かとへど 国こさへぬ 風雅にも 同じ誤 有り 又風雅 あるしふ 毛 ふぬ 生も同じ

現志誤作現幾 玉葉 いつかせんえぬあやくらしと山桜 ちりそてぬべき

者字法 為政 三家者以雍徹 同今之孝者是謂能養

也字法 雍也 雍也可使南面 先進 柴也愚参也魯 合類 助語辞

此也字用者字。又曰。者畢其說於前也。釋其意於後以應之。後句有歟乎等字亦同。按者字亦釋其意於後已。

亦字法　八佾。邦君樹塞門。管氏亦樹塞門。

合助字法　學而。孝弟也者其為仁之本與。是疑問法。

省字法　為政。君子不器

子罕。三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也

才二能主格

その・や・ろ・現き・現しき・し・ら・らん これが〳〵やを才二能主格と云。結辞く・き・つ・ぬ・ふ・む・ん・る・らん・けん・てん・らんハんは同じ。る・なる・ける・める・まる・らる・るる・つる・める・ふる・むる・ゆるハ同じ。めしてしハらじは同じ。まさのハいさしく他は異なりて、なり・なり・うなともむすぶ。まさぞの結辞の下はうなを添てりけるあり。但これにも添て皆く云れうく里あり。

敍受件云格　神敍類　古哥。夷の名菓つゝ万代をいふ名ハ詠ぞよる　らん　ぞハ疑問法。疑問形容云。教諭感動云にも渉る。

省敍格　限類　新古。人よりも名のかぎり　露類　万十。ころめでさむく雲ツなかめつる。おきふる。此雲なきふれるを。他の名に考るに。いづれも皆ぞなきに似たるとある所にても是らこなぞを添て皆く云の格なれしとを志るべし。

重敍格　雁敍不足敍類　古覊旅。ふへゆく雁ぞなくなる流まてゝ。故ハたらでぞうへる[illegible]ある。

敍結辞格　久類　古恋。君が来ぬ夜ハあれぞうく　須類　古恋。かろうなる涙ぞ持ハす

都類　後撰。秋の七日の名をしぞまつ　不類　古春。人の名ぞ風に知へぬ

布類　拾遺。呉本。ころし後くして　なりどぞ見ふつる　武類　古雑。[illegible]の名を志る人ぞくむ

吽類　拾遺。ごぬきいぞあの　そても君ぞ見ん　留類　古雑。つくそ手のこれめくごとに生ちぞよる

流類　古秋。ひうすとぐめだ月ぞなかりし　同。なき思ひハわまぞまされる　又六帖。桃ハさりける。ハ桃にぞ立へる之

現幾類　古東。のうりなくちるぞめでたき　現志幾類　古秋。むしの声きけバなげぞうなしき

過志類　後撰。ぞよるべきなき　もちせし　万志類　古春。名ぞこそハ行ぞハ雪とぞふりかす

良志類　古冬。ふるゆきハうつぞけぬらし

拾遺。わうれバ名をのこぞつらし。樹こハつくれのいひうを

新古。えぞやま志ろの井手の志がらみ。こハやまぬのひうきゑ。

敍属合助辞　波敍類　万十二。己まえぞこゆる　六帖。我ぞぞまうる　毛敍類　後撰。よそへておやなう　らみすぞまさる　万一。去。

む藻をぞ氣ゆれぞおもひ川藻めぞかゝれバもゆる　同長よき
くをぞなき　十一立てなもひみてをぞなみ　古妻恋しき我
尓叙較ぞふぞうる　古雑世のうち紀時のなみ　登叙較上ヌ兄ゆ
乎叙較拾遺そらめ那ぞ君ハミさらし河のみいひうけ　呈叙較ふみてぞおそあ土左日記ヘハ十文字
叙波較ハ古離別りへる山まよぞありて　叙毛較万十萩のそなぞ見いまざさうぼる
合助辞省叙毛類古ある名ちりとハきけど見るより☒なき　第その之☒☒まぐ志き　むなぼめうれ
尓類☒後撰この末ぐて☒☒ね玉てゝある　千載袖さへ浪の下に
くちぬる　拾遺てが舟ひと列☒☒恋を志りぬる　新後
拾いそぐ渡り☒☒ねをかしつる　後拾あきの紋☒☒舟てかゝ
見し　添ぼむり波をぞえの橋☒☒ぬとまぐひゝる　万九おく
に☒よりよる　十九花ちる時☒☒きまきよめる　むな中列
とハまし☒☒志づむなき　風雅秋よりさ紀☒☒うきてまぐ志
きぬかおまさおりと子同格之志うるに詞の☒のゝことらを変
格よしハてふをはふ調なるとし変格なるきハいづきなきぬ猶
りの句に歎息の意ありて萬りの下にうるヌよふでいふ辞をか
へて意くきとて添氏ぼむ波のあとりて猶をとりされども

たゝりなる中ニ前格の辞辞をもて、別ようあゝどを添てきゝ
んらとりゝ、ぬまさすべてらに歎息のさまさハあらざるべく
れバよりを加へてさくきてともさらめがうし。こハ尓ぞとりか
合助辞のぞを尓にこめたるそのあ較をや。
登類☒後撰矣来又ぞりと☒おどろかれぬる　拾遺くるしき砌と
☒恋を志りぬる　後拾麻のまきりぬ程べと☒まりつる
千載ね葉を海の砌と☒ありつる　後拾たふ衣又かれと☒おも
ハざりぬる　見らとる変格ふあらぼ。又風雅うらみんとそれぞ
そのふしと☒なき　新勅ないぬもハ今まぞくりと☒思ひこ志
見らまさてみをそふ調ふあらぼ。但万十一見つらし紀君をみ
んとぞひさりもの弓とる方のまゆきかきつれこの二句六帖ふ
ハ君見んとこそ思ありこハ誤又こそとぞあるべき。
乎類後撰なる紀あなぎさを☒思ひこりぬる　千載縫波いさら那☒
とふざうりぬる　同名高れ濱を☒たづまよびぬる
呈類千載ねまとひて☒暮へ忘ぬる　新古あらまきのゝ袖に露
見まて☒こが思ふ人ハ高づきもきぬ　万十君が名うけて☒
☒河を待しなくるなくるハ十カスルゝ　千載まの列の浜まて☒
ゝふハくれぬる　後撰恋ひうちふて☒さもふぼもなき
婆較詞苍志げし経きバ☒なちてみざるる　万十九流りへまの川
まバ☒きへとくうれしき

傳類　拾遺　すゞ川のきしまで図　ふきもきすめり　新古　かなひかもよりで図
宿をか里なら　續拾　あかつきをたで図　人をこひなる

左閉類　源をとめきへつる舟のきさへ図　りそうこぬ　玉葉　よ桜に
路らく春きへ図　そうあき　古来　やどる月さへ図　めるく　龍
なる　新古　ふる松さへ図　峯にさびしきらくさきへ　の下ふぞ
を添て　ゆくきのうへ里え　後よに此新古そなる　もあなくをみずり
とてふをはふ例なともるハ必りにぞや　此なハ新古今の中のえ
くづえといふさゞハありて　つまくまるも上つるのところき　へえ
とやうにいへり。それハ向けさゞまこと知あもしめ　あとうてよをはふ
調とはいふさぶむ歯かし。

万傳類　後拾　ちぬまで図　うつろ　乃美類　玉葉　こが立ぬまし　世の
つる
婆加利類　新古　ふれと　ぞうま図　りひてやまぬ

省合助辞格　杜言葉類　金葉　家風　ふりぬりのゆゑをかりし　此杜の云此葉下図
省結辞叙格　此類　古雜　辞云　丹志ぐれ　ふりかなる　あもの紫此名をあふ家れふ
ることぞこれ　ナル
叙結轄変格　現幾轄為現志類　後撰　えるめうるかくぞ　あふこまあしてさくくハ接續云ことふよりて轄じくるへ

能主失格　叙不調類　六帖　春ハすゞ川余波よりぞ又来此きくのたつてよむさ
し秋の風　續正集　夜此よも涼しうまれる山川ぞ浪の
底まや秋ハやどまる。保来抜云　かく夜君が秋の涼らる禮バ故
まうくぞそれどらつくのこ。 躬恒集　花かとぞ見ゆ。 拾遺愚草　袖
りとぞ見ゆ。万二十。袖も志ぼらしにまきしぞをえゆ。是らハえま
ぞめどとくのハざるらく先達の説此ごとし　後拾やく集さらう
でおとよあまりにちるとしのう紀をぞ見るかれをつるうまこ
ハ一つの格なや

乃受件云格　山乃類ハうそめる。 古来　あふ坂の関をや　夷をこえつらんかとぞ此山のけさ
すべての　能主格なるも　所生格なるも同
等形容云なるも　獨立代名云なるとの差別あり。件云と用云との
間なるのハ能主格と常のなく山のうす絶るなどのごとしまこ
ふるとひるを殊ぞてかこ。又これ下此用云まで及ぶハ能主格此の
こ古夜なかの夜のふをうとられバ夢云、寫一郎にかくるきのく
めこハあくるまでさ及べり。さてのくくまをハなりまりろ
まとも結びやう件云あても結ぶ格え。

乃結辞格　久類　古き　かくまるえぶにろく　都類　かゞよるを
久教ひるのなく　續拾　なうましごとのかも
不奴類　古夜ぞ禮うあしぬうまろ　布類　千載　なきつる袖まつゆの
のうりしぬ　おもひそめ

呻類なる抛後ふけとはこれをもとめてわかれ路のゆきのまに
くるしくもあるかな
留類古秋山のみきのなきバ　留類千載そは咲しより恋
うつりける　のいろなる
現幾類古今いかぞれそよとい　現志幾類後撰ちりぬる花の志
ふく人のまき　ひて恋しき
良志類建保四年歌合そらみ人　計利類新古あはできつきのか
のかざしなるらし　ふぶきのなき
奈利類千載志ぐれ定なかき　加奈類新古れにらぬの見すら
のなくさの里　るゝのでに見られなき
また古今あまぐもにそ爲なきひとの名りゆくなこの加まらむ
なきのかなり。
左也計左類古秋めぬハ見ずとてまのさやけさ　後撰よのみ志
かくてぬる　さびしさ同じ。後拾よみはのこと
常なる　ものはけれハのを誤まれなるを見ハ余言みそ知るべ
る格也。また万三なきの里しきんまのなく　十。いまざま
きまバよのふけぬらく　七。おして路の道のさやけくてきら
か形容言なきバ余言みてむそぶる格とハいまそか笑也。

還上乃格

比登許呂乃人心乃類古今ゆまよふ理の風を重み秋そぎのうつりゆく人
のこゝろなり　また新古下やどる月の袖の露の

どにあり。これらは疑問法也。　また古今あきをまてなる人へ
人のきるべくらく形容言よりうつるのよりうへわとはじ。

乃結轉奈留轉爲奈良波類

古雜みのうへまうかべる秋の君あらバあゝ。
ぞとのりといそのけのを。
奴留軸爲奴礼婆類　古今君なる浅の床はみちぬ是バ是らハこそ
接續言みよりて轉じる也。

能主相重格乃與許曽重

後撰津の国たなかそたくまくあしみれをこまた
く次の下にあがるれ余きうれ此格は志さがふ。

乃属賀格

君賀類古雜のぜふけバたきつ志らはたつさ山よそまや君が名
とりこゆらん。
がハのゝ属まして見そびきそれのゝ格と同じ　まさがなの
さのがあり。こハ要須感動言すて見なり。

賀結辭格

奴留類古雜さかしらにおもハ人まちにそのさやぐ霜よをし
がぬとま見ぬる
和毘志左類古今うつゝにもさゆ了懸ならめ夢まさへ人目をも
るとみるがさびしさ　後撰の洗路のがうさとも。
また万十九。おちん山路を君があえすくハ形容言也。又宇治拾
遺はさるがなをぬぎかくなるうなとめ房のよみなるをけさとい
ひさる待のそらぶちてさぶのとこそいふべきはなぞ見女がけ
ぶがといふ毎きすうといひしをみゆ。

賀結轉変格 現志岐轉ノ爲志导類 後撰秋の田ハいねてふことも知りけるバ思
ひ出るがうきしきをあはし 例の接續云え

也受伴云格 我也類 古今光のなにもあや旦 あそり 疑問法のやに同じ 浅也類 拾遺あさしやふかしそ きハ我かハ

重也格 我也人也類 古今受にさへ花にすかくし都ゆくハ あやいをねぬ人 やほそるう 万叶かくしてや なほやまうらんとも

也結辞格 久也類 古春うつろもんとやちう 須也類 續後撰衛風やとそよ浪こ をて我まの川の

都類 浅こゝにやく人ハお 不奴類 古今厚やあらぬ春やむ うしれちるあらぬ

布也類 後撰邦無厚かぎりとやお をふ 武類 續子やくとハかくるおぼ きをやうむ

叶類 拾遺よそふのえみてやハ らひん 留也類 後撰れとお及来てハさ びとやそ記る

留也類 新古あ子そたハいまや 私ちるし 現也類 千載おめふらと手枝ふ やおぎき

現志岐類 古秋わが袖ぬごとや よるハかなつき 色志類 古今きみやう こまや ゆききん

万志類 古春みちゆきぬりにこ とやつてやのし 良志類 後拾きゝ住るやそ川袮 あれけり

新古からすし秋れこゝやさらた山 後撰これやこの行も
くるもしられつく志のも知らぬもあふ坂れ者紀 新古秋よ
も今や衣をうつうつの山 同おそで月日やをは常盤更に崖
らハよそにひくる書き

まさ後撰我れんやさまいそぐらん 生られさぐひるさやれう
思ん 中さ同そらのバかりの雲やなかやる 生られさぐひハや
のうもをあらと猿べるえ 但知るを者のハ知りとかくり今ハ
異本よう 変格とある説ハひがことそ

也属合助辞 也波類 古春さこそなれあやえか こうし カクレハセヌの意
又ゆくしる思まくるしきるとしぐつきも人の知り行られや

それぬ 何トテアカレヌの意
やそハ感動云とゆうしり 又要ばにわくらまし やえきらの
古雑れ中ハむりしよりやハうかりきん 新古 あやそ人のさ見てきつらん
とやハとする思ふうらん生らのやにくとぞやとは 千載人先てハさし

也毛類 万四うつをされ出やも 波也類 万九れられ(ね)て我とや
ふきゆく こひん

毛也類 古今ざむしろた衣しさしきこよひもや恋しき人まあれ
でのよねん

尓也類 後撰秋とやすのやゆう 登也類 上よみたる
んともらん

乎也格　上にみゆ。

弖也格　上にみゆ。

重合助辞格　吹風尓也波君尓也波類　大和物語　ゆきて　吹風に「やこそ」まふく
「き」みたるし、君に「や」「ハ」いふぬ

去年登也今年登也類　古春　年のうちに春ハ来にけり一とせをこ
ぞ「とや」いはん　こそ「とや」いはん

合助辞にハあらねども　きやの格にくらぶあり。
きぞやのさの「きや」万たとこしへに友をゆき「や」かぞ衣扇をまさ
「ぬ」山にもむ人　まバみやのさの「まや」古秋里ハあまて人をぬり
にし剣ども「まや」産まよぐ紀も秋の神とも「まや」ハのさの「ま」
「や」古せざらん。然るの格べき花の名も「まや」　まやと疑ふきの「ま」
「や」古来風ふをぞ浪らつ露れ中めの「まや」　名ぞのさの「まや」後撰
まきらうゆきてぞうりハまみ「まや」　まやと数くさの「れや」後
撰在中ハう紀めの「まれや」　新古今ふれバ小田れまづらといく
ぬあ「まや」もはじ皆らハ先達の説のごとし。さまど畢竟疑問法と
感動ふとの二つにハ色ざるを。　又んやめやハ大方感動ふを。

省結辞也格　春初卷類　古春うち出る浪「や」奥のちつ花「ナラン」
天の明衣「ナラン」ぬ物「や」まろがすのうさ「ナラン」　好忠集つきと
山とこらくま「ナラン」を添てまくさん。　千五百番これ「や」みなさきをぬ　伊世物語これ「や」この「ナラ」

也結転変格　伊豆呂轉ジ伊豆類　新千　うちつきみ「ひや」りつと古さとの、くハ
まぼいま「や」「何川」いま「や」「何川」とまそやぶる神さぶるまでも君をこ
そまて。こハ接續ふの上に結辞をふくまれる格ぞ。新古人志

也結辞失格　良武誤作都〻　續後撰冬来ぬといふぞかり「や」神無月さハ志
ぐれのふりまさらう

無結辞者。万二十。かしこき紀やみこともぬりぬうゆり「や」へが
いむさまをいむあまして。

也属奈武格　人奈武類　六帖つれくふまみう海のまがるらん人「なん」されをお
りふともまし。

「まむ」ハ「や」の属にして、結びも「や」に同じ。古語に「那毛」とあるを毛ハ
剣ふうよひて、まむとこそまうるとまし。そまくまむハニヤアラ
ン。の約まりくる辞にて、是をそべて三くされ格ありて現在過去
未来の三格に当るなり。ま所併ふ及現在用ふを受るを還
ルまんといふ。次にぞ去用ふを受るを省ルまんといふ。次に未来用

奈武結辞格　訪噺類　古序赤人ハ人まろが下にたくむこくかさく「あん」ともる
ふを受るを省まんといふ。第二能格也属なるハ還ルまんく。
是ハ赤人ハ人まろが下にたくむこくかさくきかるぬ「や」
あら「ん」といふまそうく上にうへるきあるにまりて還ルまんと
ハいふまり。

奈武合助辞　叙奈武哉　土左日記、なかりしもの、そちぞ［ぞなん］来［つる］。是ハそち
ぞ［ぞ］来［つる］に［や］あ［らん］といふ意也。
尓奈武叙類　かぎろふ日記、ありけれ［になん］ぞあ［る］こハありけれ［にぞ］
あ［る］に［や］あ［らん］といふ意也。この還る人のごとく
をぞのされなんといふハなりけりしびちの文例にそもぞなん、
ま［やらん］といふ辞をニヤアランの約まりたるにて、ばなんと
ほど。千五百番歌合がくれ木葉がなれうかれるこそやらん
きづれもき［ぬ］

加受作云格　今日加類　万一なづりれ山を［なふか］このらん。けかハ疑問法の
かとはど。されバ疑問代名云の何誰などのたぐひ、うな
らばけかをつけていふ格し。其例ハ　後撰ハ河までのもぞ秋き
人の云れ紫［か］秋の秋れ風をまつらん。　拾遺いとみがさ何［かハ］
つらきつらさみがてらふ来てを見よりし。　千載きむ
みをおましとハ［られ］［かいさ］堵川る是松や［あれか］見詰びおき
まんこの堵川るなるやとさとと常なりけり聴まどもやハ上
の松をうきうきハ下れあれをうけたり。

重也與加格　此也何加類　千載こま［や］ゆ見いづ［まろ］うつくもりなさをおもひし
かでもいぬ置き［かな］　またま万十二、色すし［なや］ちろ。
れらん［かも］　古支くるす［ひと］見るが何きぬる夜れよをあらば
と［や］なく山影云とも。　まさ万九河の瀬れゐぎつをうれバ鼓を

かまちりみだるるこれ川ど［り］もこの二つみれかもハとくのひ
がくらまん。

省加格　奈土類　狭衣［など］因ふるゑまか　何尓類　古雑うれしきを［なめる］
まりしやまらく、　因つくすむ、
すべてなどか何なかなどのかハちぶきてよむ例多し。これハう
あらばかをそへて聞くさし。但紐鏡に末この格をすべて何のか
しまとお祖張まることゆゑなれくハしくさとを見よ。　古恋あ
ハぞ［八］何を立れ詰かせ［ん］こハ花のうらまし。　風雅ふるへぬ松
［そなよ］［なり］ハ花のうらりし。　古恋［か］まじ次よ行らぬ思ひをふ
［ぞ］もかく瀬の川よ淀てとゆ［らん］ハそのうらまし。　旧秋［たが］ぬ
ぎりみし［き］海ぞもハかのうらりし。　後撰そらふぞうりの
［露や］なよ［なる］ハやのうらりし。けなるを許よなりとうらるハ誤
りし。呉竹なる［なる］とあるかあらくがふべし。その詰よ。万葉下と
とめらがひらげの上よある雪ハ花のまがふよらづきなが［へり］
とあるをを引て、やのむすびの［なる］をなりとささ見ゆるハただ
へるあがつらひし。菅家万葉なる［らず］きぬが［へり］とりふ、上の
ある雪ハのむすびおもていへるとりふ詞のむすびふハあらざ
るし。すべて何誰なぞハ、疑問代名云ふて助辞ふハあらざるし。

加結辞格　久哉　後撰ささまちふよそてぬ　色志哉　新勅撰の見［る］なき［く］来
と［うき］［く］　のかや山。

留ハ類 千載 秋の更ぬる子るまくなり。 吽ハ類 古意 ぬとていとん 意のしげきに。

奈武類 万八 ゆくゝるまちりきまん 良武類 新古今 さくらん 山ぶきのそ形、

加属合助辞

尓加類 万一 よひに置てけるかなしなぞりけり ききよがき妹 がいありけりきん

登加類 万三 海士とのひろふんた びゆくもれを 乎加類 古物名 法をり 老のきゆ

弖加類 新古 いの川きとてり意 しかなろん 婆加類 千載 いかにうてハりぞ のうむる

加波類 古物名 いくそたび旦が うしとかそ思ふ 加毛類 古臭 いまも つ見 咲ゆか 茅らん

加也類 拾遺 みと うや くれの もがさハ思ふらで

合助辞省加

登類 古意 ぬれぞよ と 囙 そまさ きとらん 登弖類 後撰 いづくとて 囙たづ まきつらん

之字法 學而 夫子之求之也 其諸異乎人之求之與 按之字是第二能格與求字應接也 字是第一能格而章句係疑問法 故將與字押之 雍也 赤之適齊也 乘肥馬衣輕裘 按之字與適字應接也 字與衣字應接

與字法 泰伯 君子人與 君子人也

矣字法 詩 雄雉 展矣君子 柳宗元曰 矣決辞也

夫字法 子罕 逝者如斯夫 不舍晝夜 按者字是第一能格 疑問法 故將夫字押之 夫字是第二能格 乃與不字應接也

孰字法 先進 赤也爲之小 孰能爲之大

第三能主格

こそのかゝりを第三能主格とし 結辞 けせて ねへめ 旦現き 色 志過志りらしまりし 手めらめけめてめハめまはじまれけれて れくれまれつれぬれみれもれゆれ られハ 然まはじ らら まハら はほじ 但これみも係てはなくされうて思あり

能格の三等にわかれて結辞もりと西 記ハわが皇国にて限ありらとふてこれ言霊のさきはふ證するべし すべて外国にハあとへバ者字之字などのけぢめこそあらめ三等にハえわかさぬこそよろし俗語のむすび第一第二のむすびハ大かさ乎やとむそぶを三等のむすびをハ雅語の結辞と同じく用せて通へめ思ふどくむすぶ格こ 可愛ケリヤコソ 神田カラ通へなどのぬし。

許曽受体言

大国主 許曽 記上 やちほこの神のみことや あが淤富久迩奴斯許曽波 をにいませバうちみる嶋のさきざきかきみる磯のさきおちずわかくさのつまもたせ良米。

重許曽格　深許曽色尓許曽類（フカサコソイロニコソ）後拾おうさこそ霞の衣ハおのさるゝめ浅ハお
いろにこそ出め。　よし万六この山北つ
きバのみこそこの河のたえバのみこそをしきれおるゝやど
ころやむ人きれおもえそこハのみこそを字ぢたり。

許曽結辞格（コソノ）　許而をれとこそきけ　世ハ堀川なれバあはれのおく
　　　に名ぞりこそ見え
互類（テン）新古なにはうちたきもこそ　袮類（ネノ）古春いろこそ　ねよや
八かくう

閉類（ヘン）へ　後撰おつれバ神こそある　免類（メ）後撰なへ菜ハつおでまをこ
そつあ　古今いの近のか
うみとてこ捻あれぬめ　万十　礼類（レ）後撰かぞもすぐさの枝よ
之飼早八カヒケメ小ハ非じう。　こそあれ　古今名にハ捻
君を待ちつれ　又後のこ　現類（ケ）仁徳紀おろきつそ二重
こそあにをがあれ　をよき　天智紀おゆこ
捻ハ侍べきえきえさハヨキし　万十一かくも今捻言ハまを出
おき　同十二あらしろまたれめか　すめりバこそ秋のおきまう
きしかるべき　又十一かのが書こ捻とこめづらしきかくおき
とも結べり。　又十四なろ捻え言も　駿河状古止古曽余之拆。
過類（スシ）後撰時あらくもにあり　己志加類（コシカ）拾遺人志まぜこそ兄
てこそこ　ひそめしら

良志類（ラシ）古雑ぬきえぞる人こ捻あるらしけらしハラメカシ
彩古あのぐしと表こ捻見え洙ゝ　ゑらしこの名らしハケル
ラメカシ　又万六長うべしこそ見る人おとゆかくりつぎ志
ぬびきらしきとりふ結びあり。
万志加類（マシカ）あれ加ア結べきまかぞりこそハあらましりゆひ
ぶらふにれのくまうふ。
金葉たのむきバこ捻いきれおつ霞こハいきておてとらふをい
ひりありり。　後撰雑はほをりふこそみつの浦ごとに。こハみつ
出とりふ淵のひりたたり。　新古さよ子なる船こそちかくなるを
ぐさこハなんといふをいひりきたり。

許曽上省婆念古曽類（コソノオモハバコソ）万四後瀬山のちもあそんと思へバこそ忘ぬべきその
をもふまでもあれけ思へこそを。新拾遺ふ思ひすぞと
あらためるハひがことなるよし。先達の説なきたり。　同
一ゐいすしへも志りにあれバこそうつせこ書をならそふら
しき　同十七長関さへまへありておきバてそよしなやしこま
らさまバを添てふるべし。

許曽合助辞許曽波類（コソノ　コソハ）　弥香来紫きれこそハ　毛許曽類（モコソノ）拾遺むかこの堂ゐ古
岩りもならすナヒ　こ捻人ハゆき　後撰
まごり志もこそ忘りかりなき　蜻蛉日記詞よ忘志も了捻ハ
あき　後撰又拾遺とがむぞうりの更にもこそ志兌

尓許曽結　古事あざまりとそれと名は　登許曽結上にみゆ。
乎許曽結上にみゆ。　弖許曽結上にみゆ。
すべて合助辞といふハ、能格のはもぞのやかこ挫と斯格此のにをより及過去格のでバなどく定まりあるものと知るべし。
合助辞省許曽志毛類　まそれ　万十八　志もちを志も[コソ]おやふくそみていひつぎに　後拾をみるべし。かるうる雅べき名ふしも[コソ]あ
まうしろめたくもおもひやるかな。　拾遺　時しも[コソ]あれ秋志も人のこゝろなれバ、是らこそを添て皆く見のうへ之。
尓類　万十七　あがふいのちもたが爲めなれこのみの下すもコソを添て皆くなり。まさ古慈君といへバふれあれそれ
是ハミモコソアレ　ミズモコソアレの意と皆ゆまさ一つ此格と志るし。
省結辞許曽間類　そおひぞ[コソ]　万十一　きのふみてゐふに　故結　六帖　よしやそこ挫ハむら故結さ絶のゆゑ[サレ]
耳許曽結　古意とそふ給ひらん　をのこゝそ思へ　人目多美許曽類　万十一　いきのをにおもふ
ハ思へど　くめかるきこそ逢ね　吹風にあらバあそく逢べきもの卿。

許曽結転変祢転為受類　千載　をがきこそ寝覚の床にあんしるとも知るらてのうつゝみりせバ。こハ接続云によりて転じたるなり。
祢転為婆也格　千載　よそ人にとそれぬるかな君にこそ見せめやとある社の志づくを同上。
閉転為布類　続古志さふこそ人の知もうつろ渉をさまみせる山ざくらかな。こハ所役格によりて転じたるなり。
金葉　いまハへハ月をのきこそ多がめ[ノ]に。　五社百首　夢にこそ都のこともみるべきを是らハ所格にて下につゞきたるなり。
能主失格
許曽不調類　後撰　たそれてふこと挫も倦れにのそみかくるや人をあやふまらん。
許曽結失格　波誤作也良免誤作良武類　子なる前安こつる加茂の給和此みそまさは逢すハ夢のここ挫あひきでうつゝともなきこよひ　こそ神やうらみん秋風の了系。
まりけ足こハ接続云のでまて結びハ既に転じたまバ、とゞ句をありなきとま結さ格にたがへり。
すべて帝尓乎波のとゞのへハ、玄奥此妙にて、おのづからよく調ふるまて、誠に格にそむきあるハ、いとくなきこととく、古事記と書紀とのまた結る長短合せて百八十余首、万葉集二十巻四千五百余首、古今集よりこなた世々の撰集家集此る所謂弟子ゟ記のなどの中にて其格を失へるハ二十余首にハ過ざるなし。

○所生格第二　所生格ハ.体言と体言との中間にある[の][が]に.諸体言を
らの助辞をもちゐれバ.所生の格とするなり.能格の條にもいへるがごとく.所といふ義ハ.能格よりものをうみいだすよりなどいへバ拾遺集なるもの[の]ア気とあるハ.なにをかものが主となりて家をうみて子を生ぜしむるとするがごとし.まさしくすべて所格の実体言.虚体言.代名言.連体言を受けるハ能格と同じ.

乃受体言格　白玉之君類　記上.あかだまハをさへひかれど[斯良多麻能君]がよそひしたふとくありけり.

重乃格　一能格五生格類　新古今.我が(?)[の]ありの[の]くち葉の[の]霜の[の]うへにおちつもれる[の]このあはれゞ六つあるが中に上五つハ所生れの[の]し.下一つハ能主の[の]し.能主にハ結辞あり所生にハ結辞なし.

三生格類　万十三.はしり出の[の]よろしき山の[の]いでたちの[の]くはしき山ぞ.以下れぞハ教諭感動云なり.

また万六.なつじれあさちん時の[の]ゝとも咲らん時まで皆ハ体言より体言を生じたるにて也之.十八.めぐるれきみて那く努るされどき[の]かあしき.二十.山されバ川[の]ことしく川されバ[の]さやらく是らハ体言より虚体言を生じたるし.

四.わがをこがゆき[の]まゐく.又大ぶねをこぎ[の]まくみま.これらハ体言より形容云を生じたるし.

陽語生語格　宇治川之早網代者類　後拾.宇治川[の]そやくやくせろハあみうりなし.これハうぢ川のあじろハそやくとりふなさし.

乃受用言格　將行之類　古今.君やこむ我やゆかん[の]いさよひにまきの板戸もさゝず寝にけり.

乃属賀格　元輔之後類　枕[元輔]がのちといはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてハをる.萩[が]花摺[が]え淺茅[が]原甲斐[が]ね同.

重賀格　為君我衣手類　古春.君[が]ためはるの野に出てわかなつむ[わが]衣手に雪ハふりつゝ.このれの[が]も所生に.

また古哀傷.ぬる[が]うちにみるをのみやハ夢といはん.とハ連体云をうけたるし.

顔淵.浸潤[之]譖.膚受[之]愬.又.虎豹[之]鞟.猶犬羊[之]鞟.滑稽傳.以楚國堂々[之]大.何求不得.信陵君傳.臣[之]客有能探得趙王陰事者.又孟子.庾公[之]斯.尹公[之]他.左氏.介[之]推.燭[之]武.此[之]字非名.皆属所生格.猶謂紀[之]貫[之]源[之]義経.朱註之語助也是.

また盧允武が説ニ.之指也.大成之殿.指此殿為大成殿也.聖人之言.指此言為聖人言也といへるハ.所生指示云のうされ釈とを返し.

○所與格（アタヘラルヽサダマリ）第三

所與格ハ体言の下につきていふ[に][と][へ]の類也．是らの助辞あれバ其上ハ体言になる所与格となる也．此格悉談にてハ二つに分きて為声と依声となづけたり．為声なるハこての所与格也．依声なるハ指示言也．ゆうしや尓又去のさまなると形容言なるとあり．これハ二字為声のうさ也．是らの尓を一そよよみなるハ．古春思花をハうつり[に]き里いたづら[に]我身よよふるながめせしまに是也．此尓き里のにハ尓き尓し尓さんにふりにてにせバなどいふにとはじく去字の意也．まなるハち万葉に去字をうきりいさつらまのにハ形容言のに也．この二つハ為声也．よしぬるのにとながめせしまのにとハ於字の意にて依声也．このけぢめのうと指示言此條にもいへり．猶いとぐ風雅とめにこまの妻にかざらんハ依声也．式子内親王妻[に]うもめ類よれきうしきうにハ為声にとならべし．さて所格の中にても所与所役の二格ハてにをはのにをしあまりて関係最ひろきなるぞ．

尓受体言格 急山背類（イソゲヤマヒロニ）記下[逃しろに]いしけとやまいしけいしけあがそしづかにいしきあハむうもこハ実体言をうくる也．

散狄類 古雑まかくもちるうき袖の[をぞきに]虚体言也．

教吾類 古来[見れに]手しへそ行てうしみむ代名言也．

間尓類 古来そきをごまおもふとてわが逃ど涙えきとあいひそへの[き]かく[に]きかくハきくと同じこハ連体言也．

還上尓格

宿袖狄類（ヤドリヅキヽ）新古もらひうさて我ハ霧の忘ぐかゝめやどうち[は]袖のせきき[に]漢籍よみに二より上へ還るも同格也．まさきこときこてかゝりにかゝれるなどハ接續言也．新古まぐ又ぬ人にちらすくまをし．此にハ二對シテとゐふ意也．やまくまりハ二アリの約まりなるにて尓より出る辞也．新古又貫之集にが宿れめの尓りぬがうハモノニアリナガラの意也．

尓属登格

為淵類 後撰ぞくもうのくまより落るるものの川．意ぞつもりて淵[と]なりぬる．古雑[理と]するぶうづらと鳴て年ハへむ．此上のとハ所与格にて[に]と同じ．下のとハ同等形容言也．又は[と][ぞと][やと][うと][ふと][をと]などハ登属の合助辞也．まうすべて加ふ格の辞をうくるとともの皆ぞひハ接續言也．うれ條まさしたるがおし．

尓属閉格

行北類 古羈旅[ゆへ]ゆく覚ぞ鳴なる．又後撰かゞこれバ[かくへ]入ぬる君又ようりなどう涙の[と][へ]ぶらづらん．此[に]と[へ]との差別ハ．將然と既然との二つ也．古羈旅詞あづまの[へ]にきぞりハそしとのみ[に][又]いさぬりにしにこれハへハ將然にいひ[に]ハ既然又いへり．されど上古にハ式差別なうりき．學而民德歸厚矣　又就有道而正焉　淮南傳太子終不近妃　相如傳橋孫水以通邛都　陽貨歸孔子豚　衛靈傳青姊子夫得入宮幸上

第二所與格

○所役格第四 所役格ハ体言也下につきてりに をゝ也てにをはあれハ其上なる体言所役の格にあるなり 小説 拂丹詔 掴對兒把旅とか將掴把の二字ハこゝ所役格にあされ也 又万四 流さてまし りの 目今ぞ悔しき 也めのし下にハ乎を添て心得べく

乎受体言格 覚目類 古秋 山里ハ秋こそことにわびしけれ鹿の鳴音に目をさましつゝ

古秋 ひとりのミながむるよりハ女郎花わが住む宿に植て見ましものを 是をハをのをの意也 又秋のきくにほふかぎりハかざしてん花よりさきと志らぬ我身を 也をハなるものを也 又日冬雲をぞまふみへ人の志るべく 也をハ知べく通へり

還上乎格 誰覓折山櫻類 古春 あれしかもとめて折つる春霞立かくすらん山のさくらを 是亦漢文のかへりと同じ

玉屑賈嶋が句に棹穿波底月船厭水中天とあるを土左日記よむでもむかしのをのこハさをハうがつ波のうへの月をふねハをそふうミのうちの空とハいひしとかく書り 此格と同じ また古意にひとしくハ下にをとおもへ 後拾遺ちりのかそりハあらじとをしれ 古秋 立とまり見てを渡らん 是らのみをとをてをハ乎属の合助辞也 又万四 汝をと吾をと云ま也

學而 使民以時 又吾日三省吾身 孟荀傳 美意觀色 張丞承高帝方擁戚姫 才二 所役格 八佾 問社於宰我

○所奪格第五 所奪格ハ体言也下につきてゆ より ゆり ゆゑなどからの助辞也 是らの助辞あれハ其上なる体言所奪の格とする也 但所奪格と指示言との差別あり 漢語にていへば 下車ハ所奪格也 従車上謝などハ指示言なり

與利格 落馬類 古春 諾諾渡てるより おちてよ絶る 千載 年のへより

與利属由格 空由類 万七 このよゝハさよあれぬらしかりがねのきこゆる空ゆ月わたる

同用格 後戸用類 記上 いりつどよ つゆきるがひまへつどよ つゆきるがひ

同加良格 行谷行宮類 神武紀 其にうしろゆかぞをうしろゆかん ぬども同じ ましくをしむうハ又連体言之 家身からにて也 さきよりましハ除去接續言より出さハ比較虚体言より也 やくハ比較形容言より ハ選取接續言也

同由恵格 人目故類 古恋 人めゆゑのちにあふ日のはるけくハわがつらきにやれりひとをさきもん 又てよりハ與利属合助辞也

子路 冉有退朝 憲問 是不出其位 八佾 繪事後素 倉公傳 史郎来救信 出之水中 衣盡濡 袁盎傳 趙同 泣下車

すべて漢語にて上へ還る讀あるハ所与所役所奪此三格と虚体言 形容言 指示言とにあるなり よく玩味をすし

○呼召格第六

呼召格ハ、体言此下につきていふ[よ]、又体言の上につけていふ[や][よ][いで]などなり。これハ客位のてにをはそへて上の四格とハいさゝか異なり。すなはちこの呼召格と招呼感動言とハ大同小異なりの條と見合せて考ふべし。

與格

霜與氷與類 千載式ずるの歌に紀神ぞ行はれする上毛の霜[よ]下のこほり[よ] 後撰集をあつめる[わぎもこよ]

其與類 後拾遺にて[そよ]人を忘れやハするとハ代名言なり。 不知與哉 拾遺集をとゞめてだれ人の[知らぬよ]

万世まで妹子が恋のびするよと流れし細いとにあるまでハと うじ[どよ]これハ合助辞なり。古歌かぢりうして[よ]これハ使令法なり。

也格

八千矛神命也類 記上。須勢理姫の歌。 鳴也哉 新古今のがつまなつく[なくや]

也與格

也與時雨哉 新古今[やよ時雨]ものおもふ袖のかぎりをバ本歌の後になだめそめなし。古友[やよやすて]山郭公云つてんだ。

伊傳格

伊傳吾輩類 古今[いでわれを]人なとがめそ大船のゆたのたゆたのものおもふころぞ我が身ハいでやなとおなじ。

すべて生存役奪の四格ハ、能格に役せらるゝ臣位の助辞ゆゑ、かならずかく主と法辞との中間にあるを、呼召格ハ自立する助辞なれバ、ゆゑに或ときハかく是れ上にもたち、或時ハ結辞の下にもつき、又ハ語の中間にあるときハ其所にて切るゝなり。故にこれをハ志らぞらく客位の助辞とするなりのぞ。今此六格の助辞を一つにあつめてみれバ、たとへバ天津神ぞ二柱の神を天より地に天降しなされてあるといへバ、あやしきまで上よりといふところなし。吾や此神[上]といいそんが為しめよや上宮汝こそ手のうちより吾や安らかにすぎき約音をきゝ志りてあらむぞとの給ひし。未生れざる語。[ヨ]クメとりのが如きこハ使令法にて其使令をまもる人君と為り、とハへども此六格を離れてハ語をなさずあるにハあらねども、茶使令を受る人民となりて行ゆゑ、君と民との助辞を用ひぞ。唯臣位所役格のものとみて、其義明らかにすゆることなし。志らば法にあり何ぞ此へだてあるか、ありて其語のかよハざるをこそうくらずとまうす。其語をみちびく時ハよくすら君臣民三法の助辞ありて以ひつぎとすなとへバ、アノ方[ハ]茶[ヲ]クメトオッシヤル如し。是ハ主者一能主格にて君なり。ヲハ所役格にて臣なり。クメハ能格の結辞にて民なり。うくりにてうよハざるすハなきなり。天下万国の言語すべてのひびきまで其格ハ此格にひとしきをなりぬへし。

里仁、参[乎]吾道一以貫之。

省字法　衛霊公[由]知德者鮮矣。

以上体言助辞六格

○現在格第七（ゲンザイカクノサダマリ）

現在格とは現在用言をうくる助辞にて、今それ用言と助辞とをあはせて、その受る法をさとすべし。

現在用言

く 来 起 聞 受 解
す 為 借 疲
つ 落 勝 捨 出
ぬ 寝 住 兼
ふ 経 痞 言 粋
む 試 楯 耆
ゆ 老 消
る 舊 成 枯
う 得 率 植

る 引ハ居十ガラニノ受ル辞トナル

現在格

めり らし らん べき 以上ハるゝ等ヲ不受

らむ なん なり 等ヲ受

とも より まで 是ハるゝ等ヲ受ルぞ

聞くといふ詞にていはゞ、まづ聞くといふは現在用言なれども缺助辞にて、次に聞くといふ詞又、現在格の助辞をつきてきくめり きくらん きくべき きくらし といへバ、完助辞の詞となるにて、これを現在格とはいふなり。また きくなり きくなん きくなり きくとも きくより きくまで などもいふハ、体言に助辞の格をつきていふそのまゝにてゆる体言に助辞連体言を受る格と同じ。されバ此なるなん等ハ、ゑ云格を受て きこしかな きこしかなん きこしなり きこしとも きこしより きこしまで ともいそらんども、めり らん等ハ、きこしめり きこしらん などくハいはれぬにて、右の如くなりなん等ハ体言に助辞の類なれども、まさしく現在用言を受るよしとゆゑ、志ずらくめりらん等にならべて現在格とはなしたるなり。

るハ居十ガラニノ受ル辞トナリ。めりらん等ハるゝヲ不受。なりなん等ハるゝヲ受ルといふことは、例へバ枯ると同じき流るといふ詞にていはんに、ながるといふハ下の現在格の助辞までをうけて ながるめり ながるらん ながるべき ながるらし といふ格なるを、ながるゝといふとき、これはる居ながらにしてみづからを受る辞となれにされバ、ながるゝめり ながるゝらん などくハいはれぬにて、志かるになりなん等ハ体言に助辞の類なるがゆゑ、又そのながるゝといふ詞をもうけて ながるゝなり ながるゝなん ながるゝより ながるゝとも ながるゝより ながるゝまで ともいふなり。まるもるゝと同格なり。

またふるくハるを延てらくといへり。續紀詔汝多知乃祖止母乃云來久 万七、恐らくなく、ふらくのおほきなど。

また万五、又十五などに泣るをなかゆといひ、同二十などに厭るをいとえといへるなどハこそ古語なり。

また現在格の助辞のこゝろハ、めり める めん らん らめ らし 等ハ有字の意、べき べし べく べこ 等ハ、もとより可字にあたれり。

さて用言のをろうけすもくさぐあれども、現在過去未來三世の助辞格をうしうにしておほとにハ、用言のをうきハおのづから分明なるを、よむ人みづからくちによびこゝろえてさとれ。覺しまべて此格に違ハざれバ、假字格にを誤まハなきぞのぞ。

現在助辞格	久	須	都	奴	布	武	由	る	宇
免利 める めれ	あびくめる	兎ぞ そめる	くう そまつめん	それぬめり	君をそふめり			あがるめり	
良武 らめ	今うさくらん	くうまをよまそらん	思ひ川わらん	もえちしぬらん		お薬つむらん	花のかんらん	神ぞしらん	
倍我 べし べく	くべきよひなり	やどりハむでし		おきそでぬべき	どぶべうりなり	とぶむべき	立そとうめべき	あらむとしるべく	
良志 らき	永とくらし	つうハそらしき	下はろうら	ろうぞゆぬらし				くるそあそらし	
加奈 ろ	あり ゆくう			あまあり ぬるな		我くぬのむつまな		恋も ゆるうな	
叉奈武	とろべくまんあうぬ					宣令よむなん			
奈利 なる なれ	原ぞまくなる	吉うそぞなり		まりぬなり	らふされバ		空ゆなり	つくるなり	
登毛	雪ハおくとも								
與利		おそろざなより							
万傳					人のとふまで			其をかんるまでぞ	
る	まうをてぞくうる	そふんちあうる	せまくぞうまつる	おどろかれぬる	うちそふる	人のとがむる	うまでぞかんゆる	月ぞあかるゝ	

ゆるハ古歌われぞまさるやうれるなどもとゝするれ格と同じ。新古今のかゝれる袂之集袖を

述而洋々乎盈耳哉　學而可謂孝矣　郷黨唯謹爾　子罕我叩其両端而竭焉　學而亦可宗也　又始可與言詩已矣　又可謂好學也已　子路無所苟而已矣　述而其可謂至徳也已矣　雍也其餘則日月至焉而已矣　項羽紀項梁渡淮黥布蒲將軍亦以兵屬焉。儒林傳翕然鄉風矣

○過去格（コガタヌサタリ）ハ八過去格とハ過去用言を受る助辞なり。これに二等あり。一つにハ全過ふつれ又ハ未過也。

全過用言

未	烏	似	干	見	射	居
著	借	往	言	摘		
聞	き	志	勝	落	ち	に
起	慮	ひ	試	老	い	舊	成
り	枯	為	率			
け 受	せ 痩	て 捨	ね 寝	兼	へ 経	辞
め 誉	え 得	消	き	恩	植	

全過格

て	なり	なん
つ	し	つる
過き	なバ	至ぬ
過しら	なん	

動きしたまひけれをりまどりふハ全過格の・全過用言を受て動うして たまひけれてをりてまどりふハ同格の助辞なり等をつきて動うてな きてるしまさそのてに同格の助辞なりなどもいへり。 全過格の助辞の立ていそゆるてふをそのてすして。そのさ らきりとひろしてぬてまてんてめてなりてなりしてきんて てきまどハ同助辞の全なりたるし。おさつつるつれつらんつ いまどハてのそさきてるし。脚結ふ万葉の長歌てぞ這そ ふてに通ふつことまがらふ通ひて聞ゆるつとあり。古歌ねごと とひふことのめとなるべきといへりさまあるべしゃさつらふ てに通ふてつの例し。同歌壽祝山吉にきて「つく」河ふ坂の実の た秋ぞ出てきめみぢ「つく」うつろひゆくをかぎりと思へバこハ

こよひに逢をふるうなか。是ハなぐくに通ひて定ゆるつの例え。まさりけるされもテアリトアリの二つより出くれバ、是もてのなう紀といふ歌し。六帖をそとびんいぞしるべくもなくなるくまこハトアリの格よりくるなり。郎恒集、疾そぞなさハぬ是なるこハテアリの格よりくるなり。次にまぬなバなんなめなましねにふきにけりにけらしぬめぬるぬれなどハ去字のさまてやがて万葉にハこ迷られ助辞に去字をあてたり。次にしきなりなるなれなんなめなららしハ来字のさなるべし。推古紀におやすしになれなりとまえやハきんやと同じ。

全過助辞格

	幾 計	志 世	知 呂	尓 祢	比 閑	美 免	伊 延	利 礼	韋 恵
弖 てぬてな てんてめ ふうふる ふれ	まきてぞ きなん	思ひなり てん	おちてぞ さぎつ	雲のそを ぬて		みてやハ 立らん		立ちりて	
	浪かけ なそや	大方をて ぞくる	まどろ まいぞや	今はえ 見て	神かり 花へて	待てか さめてか	うけそ えて	本ち散れて	
計利 なる なれ なら		うき年を しなる		うふき ぬなり	人を恋ひる	うべ なと なり		立しける なれ	
			おきぬ いそなり				松もとて なま	きみなる ねの	
計武 なめ	せめきなん			入まなん	思ひなん	そらめ なん		神のきり なん	
							受なぬ 見こなん	乞られ なん	
都 つるつれ つらん	よくなや きつる	影めぞり しつ			いそひ つる	衣を つくる		きなを やりつる	
			へぞて つれ	さぞめ 逢つる		ぬらし そめつる	見えつ		

	幾 計	志 世	知 呂	尓 祢	比 閑	美 免	伊 延	利 礼	韋 恵
過志 めしてし	飲とも逢し	なきなぢ 立し	待しさ くらも	甘のそは しても	うよひし あのを	恋んども こうし		あまり しぬ	
	恋にきて	めをさま しつ	いでし 庭らも		花よ久 しと	人の心の めし		強雑 かれし	
都 つ			めりそや ぢつ		なをを こひつ	見なな つくさ		なりて	
							思ひ きえて	名を立 まつて	
過去 けきてき			見てき	なると まりゆき	思ひきや	川ききとてか		衣ハう りき	
							いなとハ 見えき	立ちさ れて	
奈婆	こよひあ なるなぞ							宮とちり なぞ	
					花ハなど ひぬ			花ちりぬ	
畢奴 ぬるぬれ ぬらん	とれば なぬ		つらして ぬ	あまりて ひねぬ				琴なれ ぬる	
	きくし りど			夢なし か	思ひ しか	さやかも 見しか			
過去か			振すし てしか			思ひそめ しか	ねると 見しか		
	ちりて こなん				移や なん			立ちも ちりなん	
常奈武 なめ なほ			名をや よそなん		家よいへ なん		恐ひ さえなん	浅ぢれ なん	

比うち奈婆と常奈武とハ全く用言をうきて未来とする助辞にして、他の助辞といささか異なり。又古来わきまちりなんうきめそしなんと一つ是うちに二つあるハ、光なんを青ること。又後撰何せなてんさぞ渡りなんハ、移なんと光なんとすなきり。

述而 昔者吾友嘗從事於斯矣　雍也 不幸短命死矣　陽貨 前言戯之耳
憲問 夫子自道也　樗甘傳 三人疑之其母懼焉

未過用云	け聞　セ借　て勝　ね往　へ言　め摘　え　是成　る　るれ
	是ハ居ナガラニメ受ル辞トナル。
未過格	バ　ど　ども

過去より現在にいたりて、いまだ全過にならざる詞を未過と云。是ハすべて第三能格のこその結びになれる辞也。しかるに上にこそなくして切るゝときハ、使令法の辞となる也。其格ハ活用云の條にさとせるがごとし。今この未過格ハ、右の詞どものこそなくして、語の続く所にあるを受て、下へつゞくる辞にて、すなはち接続云に同じ。まさに此未過格の心をそふる格万葉に多し。万十、いと繁あれやハアレバヤ也。四、又十五、おもへりハ思ヘバカ也。四、又十二、思へりをハ思ヘバカモ也。十、行けりかれぞハアレバゾ也。一、天地もよりてあれこそもアレバコソ也。是ハ居ナガラニメ受ル辞トナルとハ、たとへバ雪雲などのふるをふれとももいひ、ふれとももいふ類これ也。さて未過格のバどども、めでたく併云此助辞の類なるがゆゑに、ふれ、などいふ詞をうけて、ふれバ、ふれども、ふれどもいふなり。なほさく、らんなどいふ詞をハ、さくらめどなどいふ。ちとこそもうけて、なほさくらめど、なほまたさくらめどなどいふも、未来格の辞にて別也。

未過助辞格	計	世	呈	許	閑	免	延	礼	恵
婆	妹がりゆかバ		来さてハ	渡りてハねバ	立ぬと思へバ			老ぬればバ	
土	をりけど			秋にハあらねど		さくらめど		来つれど志かし	
土毛	をけども			かへれねども		ありめども		志かれども	

古哀傷、つひにゆく道とハかねてききしかど、きのふけふとハ思ハざりしを。同恋、袖にまきてひぢにしかども表面そぬまけし、神ともとりごころさへん。この志りど志かども八接続云にて、一種の詞也と志るべし。まさ万四、又十七、とれきども。五、又十七、善りきどハ、めでたきケレドモヲシケレドのレをそぶきたる云のなり。

學而、弟子入則孝、出則弟。

封禪書、時去時來、來則風肅然。

○ユクサキナリ
未来格才九　未来格とハ、未来用言に係る助辞にて、志かるに此未来格ハ、現在過去の二格といさゝか異なる子細あり。

未来用言
か聞　さ借　た勝　な往　ハ言　ま摘　や　ら成　わ
け受　解　せ痩　て捨　ね無　へ辨　め誉　え得　消　ゑ枯　ゑ植
き起　着　ゐ　ち落　立　に寝　似　ひ經　干　み試　見　い老　り舊　ゐ率　居
こ来　せ爲　ら八居ナガラニノ受ル助辞トナル

未来格
ぞ　で　じ
不ぬ　ん　まし
バ　程ならん

此未来格の現在過去の二格と異なるよしハ、かの二格ハ、上の用言の下の助辞なくても、みづから語をなしてきくきくきけなどくさゝくを、この未来格ハ、上の用言の下の助辞をつきそてきかんきかましなどいはぞれバ、語をなさぬにて、また漢語にて、不字將字なきをそへて心得る語のごとし。これ未来格にても不字將字なきに、ぞでじ不ぬハ不字のきにて、ハズシテ反ぜするを轉じてでといふに、まじハじにおなじまくまくなどハ不ぬにおなじん、ましハ將字のきにまじハ、ンカシの約まりたる詞がハんにおなじ。又もなりかまり、又まくまくもまじとおなじ詞に、やまさバ、一種の助辞にてバセバなどこれに属せり。又頼まんハンニヤ

ランの約まりたる辞にて、ゑとへバ古今離別夕ぐれのまがきハ山とみえなまし〔みえなまし〕ハ見エナンニヤアランと頼みたるにて、まさまとんとの中間の音ハねなるがゆゑにねといふてもまんと同じ辞となるにて、同離別詞又、そハ志ぞまりゐへりなどとさまがらひなるをりふしなどあるハ、今ハ是ヨリ歸リナンニヤアランと頼みたるにて、まじハンカシの約まりまんハンニヤアランの約まりねハナとンとの中間の音にといふこと、初学ハ耳をきくことになるもにゑをぞどかゝることハ音韻のすをわきまへさとせバ、おのづからあきらめらるゝことに、なお悉談十二音出生の次第、喉舌脣三内の説などにも参考すべきことぞ。ンカシのンハ輕長内のムのめくにて、ンニヤアランのンハ輕舌内のこのめしこれを反切してこころみてよくしねハまんの中間の音にといふハ、反切にハうかゞはれ別のことに。

らハ居ナガラニノ受ル助辞トナルとハ、ゑとへバ見煮などの詞ハ見みるこれ見らん煮ふるれにらんとやうにそゝくくに、古今春下てバ見とや見らん万葉十一、妻望のうそぎつゝて見らしをすどれごとし。こまらるれそゝくきをらハ居ながらにしてこれをうきさて未来格のんにゆづる格なれバに。

はなら万十四、去のとみかもハ去カラバに　同十三、まさかしよかもハヨカラバに。

未来助辞格

	未来助辞格	受 ホ	傳	まじ	不奴 ずく ずくよ	叶 め も 子	万志 ま まく まら	婆 セバ てバ ねバ	願奈武 ね
加	加計幾古	ならむもまらな / 君こそで	あらでも人よ / 人ハとひこで	思ひハかくじ	それどおもぬ / 咲ぞずくよ / こぬめのゆるよ	いさみよゆらん	こぞりてみらん / ねぞさらまし	若なすらバ	雲ハなくなん / ときまとけなん / あえてきぬね / あらくひこなん
左	左世志世		為忘せで			おてらさらん / そハいろみきも		なりせぞ	国ハよせなん
多	多弖知					人なきん / はふよくみてん	ことやてまし	ちよいでぞ	忘ひらでなん
奈	奈祢尓	忘ちを志むをの	くれなでおまの				ちりなましらバ	使りをてねバ	うちまねなくん
波	波閉比			あいじともてん しるすき	咲ずとも今ぬ / わども へまくよ	こぞとやいえん / らへんともらん / こひんとめらん	うでといえまを	みふ出てこひぞ	逢ひんといそなん / こうもそへなん
万	万免美	うらこそや			人をも咲まく / わひこぬすききよ	我わぞハこらん	岩をみまじや		なあなつまなん / 名ハとめなん
也	也延伊	そまとも乃えむ / おいぞしまぞの							それえなん
良	良礼利	いはず志らむて	君なくて / ちくらきで	あらじとそめふ / 人ハ忘じ	しらずくよ / われをぬるう	咲とやみらん / おくがれん	ふれら志らまし	おせまへふるぞ	なくハざらなん / よくれなん
和	和恵韋			それハありうるべし					関もなきなん

万十七．忘れど あうおきん 又そこも あうふとこのふハむとみて まおハち不飽なり．

同八．きぬどう いそを 十二．たが名ふう あらも 十四．今ハ いう みきも 二．よ哉みのこみてや 臣らうを 千載人もがあ 忘れきも

きゝまゝ思はれをハミなんと同じ。また万四。ゆきてそやなを
このまもんし。
ようらんハヨクアランシ。恋しらんハシリテアランシ。これらし
なこくの格ふてそなハちらをんまそうせるゝ
土佐日記よりこまうらとハひてさちぬ。このまうくハマカラ
ンとハふさへ今も多くいふ例あり。
万十七。なんまくのありしむかしをまづしめてよくハむを延ふる辞し。拾遺
又このまくのくを省きて。なんまりしきゝまりしなどもいふ。
なんまうし。えま葉つさへまハあり。
後撰恋四よあやどうさを人のあらまきバ神ぞめよあるハそうらハざ
らまし。このあらまきバしアランナリセバの約なりさるゝ。
万三。又六。又八。又十二。雅志う思ふ里。同四。までとお思れる　又
いかられぞれき。同十七。おとめらそぞきん。古序。いるも恋ら
ぞてこまら八未来格のぞを過去格ふてうきさるゝ。
また万十六。充この子をハ思ふ思ろこハ未来格のぞを現在格
のらんふて交るると同格ゆて。ろハらんといふよ同じうるべし。
また後撰。雅習ハいのりうけらんとそしん。後拾。晩るふ高客や何
けいとそらん。あまらハ未来格の助辞を接續ゑよて交るるゝ。
かくて件云ハ六格の助辞ふよりて轉変し。用云ハ三世の助辞よ
よりて轉変せること云語の定法なり。三世の助辞と八。この現在

過去未来れ助辞格をいふなり。またさそべて假字ハ言語の軽重と
字音の開合とよよりて定則あることなれよ。用云の假字づかひ
ハ用云の轉変ふ志たがふ格しるとへバ聞字のごときるず聞と
のミかきてハ。その轉変の差別見きゆへ。ごとくれバ。うあらしくく
きけゝん等の假字をそへて。聞く聞き聞け聞ゝんとやうふ書く
べし。あざしこも缺助辞の假字格し。また完助辞のめりらん等を
つきそて書くとおい。右のくきけゝん等の假字をそぶきて。中めり
中てバ中ぞとやうに書きてもきくめりきくてきけバきゝん
とよあるし。これよて用云の三世の助辞よよりて轉変せる理
をそれまる用云の假字れ格をもさとるべし
季氏。季氏將伐顓臾。陽貨。陽貨欲見孔子。學而。不亦說乎。八佾。
足則吾能徵之矣。雍也。如有復我者則吾必在汶上矣。公冶長。不
知丘之好學也。顏淵。必也使無訟乎。雍也。山川其舍諸。陽貨。礼
云礼云。玉帛云乎哉。述而。其餘不足觀也已。子路。不占而已矣。
衛靈公。吾末如之何也已矣。學而。人不知而不慍。不亦君子乎。為
政。人焉廋哉。匈奴傳。令曰。鳴鏑所射。而不悉射者斬之。
戊申むかし漢語の助辞を問ふそのゝたゞよ助辞用法といふを
著ハしてそのそじめふ題せらく。
助辞用得來固不易也。而豈無其法可據者乎。乎歟邪哉夫者疑辞也。

矣耳焉也者決辞也。此時柳子厚、繫言耳至清唐彪著作文譜、乃引梁素冶曾壺字用法、以也矣等字是與由此是以等字相為接應者、乎哉等是與豈盍等字相為接應者、不可誤也。然如謂固如此、乎字與順用辞呼應、謂盍反其本矣、矣字與逆用辞呼應、則未必唐氏之說也。蓋助辞與順用辞對照、則從順歇與逆用辞對照、則從逆歇、其順歇者、多屬現在過去、逆歇者率係未來、助辞用法不過如是矣、學人取準繩于此、或免把筆徐々困于助辞吝嗇。

いまこゝたこゝふ附して初學の輩ふ志めしまふ後人こゝさかひあらバあらため改てよ。

用言三世能所中合図

未来			全過			現在		
中	所	能	中	所	能	中	所	能
うごゝんとを	うごゝされんとを	うごゝさんとを	うごきて	うごゝされき	うごゝしき	うごく	うごゝさるゝ	うごゝを
將自動	將被動	將動之	嘗自動矣	嘗被動矣	嘗動之矣	自動	被動	動之

過ゝ			未過		
中	所	能	中	所	能
うごきたりなり	動ゝされたりなり	動うしたりなり	うごけバ	うごゝさるれバ	うごゝをバ
先是既自動矣	先是既被動矣	先是既動之矣	自動則	被動則	動之則

以上用言助辞三格

附録依語法釈歌文例

統と根　各称実の所生体言　峯　統称実よ足格　所奪格　かつる　下比みなれ川に續く。現在連体言の格　みなれ川

各称実体言。このみなれ川の下に、同等形容言比の』を省きたり。恋　統称実体言　ぞ　ポ二

をなハちけのを添て学くまて。の如くすといふ義を含めり。

能主格ふて比一積て過去活用言て過去渦統称実体言て所与格ふ成り　過去活用言ぬるこき
そ比中の君こ。　臣こ。

過去格早ぬと同じく、ポ二統格の結辞こもなハち民こをべての主ハ統の根

乃峯よて落るみなれ川のぬくに。恋ぞ積て渕となりぬるといへるなり。

學而學ハ過去活用言時習之時ハ時令形容言習ハ現在活用言之ハ不ハ不亦未来
而ハ連及接續言　再説代名言まて。省きる道字比こ

格亦ハ合說乎說ハ未来活用言乎ハ疑問法すべての主ハ人曾學道而後時く

連接續言　復習之莫不也有善悦處歴といへるなり。

48-13512

三都發行書肆

京都 三條通桝屋町 出雲寺文次郎
心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門
大坂 心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
心齋橋通博労町 河内屋茂兵衛
日本橋通壹町目 須原屋茂兵衛
淺草茅屋二町目 須原屋伊八
日本橋通二町目 山城屋佐兵衛
江戸 芝神明前 岡田屋嘉七
同 和泉屋吉兵衛
下谷御成道 英文藏
芝飯倉五町目 萬屋忠藏板

中橋鶴峯著

語學新書

一名西洋仮字必讀

全

東都書林　文岳堂梓